
SLUMDUNK 2ND

名前がない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S L U M D U N K 2 N D

【コード】

N 9 6 0 0 F

【作者名】

名前がない

【あらすじ】

湘北高校が王朝山王工業を倒してから10年後。湘北高校バスケット部は新たな伝説が始まろうとしていた。

#1 青空拓馬

湘北高校バスケット部

彼らは王朝山王工業を倒し伝説となった。

そして後に次々と伝説をさらにつくっていった。

あれから10年後・・・

また新しい時代が始まるうとしていた・・・

4月初旬

湘北高校

ドガッ！！

男が殴られ吹っ飛んだ。

「俺に喧嘩売るなんて、100年早いんだよ!!」
また俺の髪のこと馬鹿にしたら、今度はぶっ殺してやる!!」
殴った金髪の背の高い男が言った。

「こつちも終わったぜ」

短髪の男が金髪の男に話しかけた。

両隣には坊主の男、オールバックの男がいる。

彼らの周りにも倒れてる男が数人いた。

彼ら4人が倒したのだ。

この4人組は若松中出身の不良グループである。

短髪の男 野口浩一

オールバックの男 宮野良昭

坊主の男 高杉均

そして、このグループのリーダー

金髪の男 青空拓馬

彼らは有名だったため、喧嘩を売る上級生が多かったのだ。

宮野

「手応えのねえ奴らだったな。これでも2年だろ？」

高杉

「えっ！？上級生なの！？」

浩一

「てか拓馬！！髪を馬鹿にされたぐらいで喧嘩買つなよ・・・」

青空

「俺の髪を馬鹿にする奴は許さん！！」

浩一は呆れている。

「お前ら何やってる！！」

声と共に一人の大男がやってきた。

宮野

「やべえ・・・」

高杉（こいつ・・・拓馬よりでかい・・・）

大男

「お前ら入学して早々喧嘩か？」

浩一

「あっちの方から喧嘩を吹っかけてきたんすよ」

大男

「喧嘩にどっちが悪いもくそもない！

ったく問題児だけは多いんだよな・・・この学校は」

青空

「いちいちうるせえなこのゴリラジジイ!!」

大男

「金髪の髪・・・お前は青空拓馬だな」

青空

「てめえ俺の髪を馬鹿にしゃがったなあああ!!許さーん!!」

高杉

「いや、馬鹿にしてないよ」

青空は大男に殴りかかった。

「それはまずい！」浩一は止めに入ろうとする。

しかし

バシイ！！！！！！

大男が青空の拳を手で止めていた。

青空

「・・・！？」

浩一（こいつ・・・拓馬のパンチを止めた・・・！！）

大男

「先生に殴りかかるとは態度が悪すぎるな。な。お前・・・力はなかなかあるな・・・それに背もある。」

青空

「だから何だってんだ!!このゴリラジジィ!!」

大男

「お前バスケやらないか!?スポーツはいいぞ!!」

浩一達は無言で聞いていた。

青空

「バスケだ?!?はは・・・あんな玉入れ遊びやってられっか!!」

大男

「玉入れ遊び・・・?」

青空

「そつだ!!くだらねえ!!」

大男

「バスケを馬鹿にするとはいい度胸だ。ちょっと付き合え!!」

#2 ゴリラ

青空達は体育館に連れてかれていた。

そこにはまだ誰もいない。

青空

「おいゴリラ！！こんな所に連れてきて何のつもりだ！！」

大男

「青空。俺とバスケットで勝負しないか？」

青空

「はあ！？何言ってるんだてめえ！！」

大男

「お前はバスケットを馬鹿にしたんだ。バスケットつてものを教えてやる！！」

浩一、宮野、高杉は二人のやり取りを見ている。

青空

「ははは・・・お前勝負する相手を間違えたな！！俺はバスケット経験者だ！！」

浩一（二週間でやめたけどな・・・）

大男

「経験者でも関係ない！やるか！やらないのか！？」

青空

「望むところだ！！ぶっ倒してやる！！」

高杉

「おいおい大丈夫か！？あいつ経験者でもほぼ素人のようなもんだぞ！」

宮野

「二週間続いただけでも奇跡だったしな」

浩一

「.....」

大男

「勝負は10本で俺から1本でもゴールを決めたら、負けを認めてやる。」

青空

「1本だけでいいのか？」

「さあ来い！！」大男は青空にボールを渡し、腰を落としDFの体制をとった。

青空

「いくぞゴリラジジイ！！」

青空と大男の勝負が始まった。

青空はドリブルを始めた。

ほう.....ドリブルはまともだな.....

大男

ダムッ！！

青空はスピードを上げて抜きに行った。

しかし、大男がコースに入り止める。

青空

「ぬ・・・!?!?」

大男

「甘いわ!!!!」

青空

「ちくしょう!!!!くらえゴリラ!!!!」

青空は無理矢理シュートを放った。

ガンッ!!!

シュートがゴールではなく、ボードに当たり外れる。

青空

「ちっ・・・」

大男（こいつシュートがめちゃくちゃだ・・・経験者と言っても長い期間バスケをやっていないな・・・）

高杉

「さすがにこの戦いは無理そうだな」

宮野

「でもあいつ負けを認めねえと思っぜ」

浩一

「負けず嫌いだからな」

バツシイイ！！！！

大男が青空のシュートをブロックで叩いていた。

大男

「こんなものか!？」

青空

「う・・・うるせえ!!!」

この勝負は大男の圧倒的な力で青空は何もなすべなく終わるのである。

大男

「口ほどにもねえな。バスケットをなめてるからだ」

「……」

青空は呆然として立っている。悔しさのあまり声も出ないのだ。

大男

「でもセンスはあるな。やっぱりお前バスケット部に来い!!」

「部活なんかやるか!!覚えてやがれ!!次はぶっ倒してやる!!」
青空は体育館を出て行く。

宮野

「おい!待てよ!!」

浩一(つたく……しょうがねえな。あいつは……)

浩一達も青空の後を追って出て行った。

赤木（あいつのプレー・・・あの馬鹿を見てるようだったな・・・）

#3 神谷大和

青空と大男の対決から一週間後

青空は学校の近くにある公園にいた。

そこには一つバスケットゴールが建っている。

青空

「今度こそあのゴリラを倒してやる!!」
バスケットボールを持っている。

大男との対決に負けてから、青空は毎日この公園で練習していたのだ。
再戦を誓って

青空はこれから練習するところだった。

しかし

シュパッ!!

すでにゴールには先客がいた。

青空

「俺より先に人がいやがる」

シュパツ!!

綺麗なフォームから放たれたシュートは高い弧を描きリングを通過した。

青空（何だ・・・あいつ）

シュートを打っていた男が青空に気づいた。

男は青空と同じぐらいの長身で茶色い髪をしている。

冷たい視線で青空を見ている。

男

「何だよお前・・・」

青空（な・・・何だよだと!?!）

「君、これから俺がゴールを使うんだ。どきたまえ!」

男
「は！？嫌だ・・・」

青空
「嫌だじゃねえ！！さっさと帰れ！！」

男
「てめえが帰れよ・・・」

青空
「いい度胸してるなあ！！お前何て名前だ！？」

男
「神谷大和・・・」

そのころ・・・

湘北高校1年教室

高杉

「拓馬のやつ、また公園に行ってるのか？」

宮野

「多分な。赤木に負けてからずっと行ってるよな」

高杉

「赤木？」

宮野

「拓馬と戦ったゴリラだよ！！バスケット部の顧問の」

高杉

「あいつね。てか赤木ってすごい奴なんだろう！？」

宮野

「ああ。聞いた話によると前にこのバスケット部のキャプテンで、全国にも行ったらしいぜ」

高杉

「拓馬また戦っても負けるな・・・」

宮野

「確かに……てか浩一はまだ来てないのか！」

公園

浩一は公園付近の道を歩いていた。

浩一

「朝はやっぱり駄目だな……拓馬のやつ今日もやってるかな」

ゴール付近を見ると青空ともう一人男がいた。

浩一

「いたいた。あれ？あいつ誰と一緒にいるんだ？」

青空

「カミヤあぁ早くどきやがれ！！」

神谷

「しっけーな……さっさと帰れサイヤ人」

カチン・・・

青空

「てめえ俺の髪を馬鹿にしやがったな・・・」

神谷

「だから何だよ？」

青空

「死ねコラアアア！！！」

ドゴッ！！

青空は神谷の顔面を殴った。

神谷

「ぐっ・・・いてえな！！」

ドガッ！！

神谷が殴り返した。

青空

「ぐおっ！！！」

（こいつのパンチ・・・なかなか重い・・・）

「上等だコリアー!!」

浩一

「やめる拓馬!!」

殴り掛かるうとした青空に、様子を見た浩一が止めに入った。

青空

「離せ浩一!!」青空は暴れている。

神谷

「馬鹿野郎が・・・」

神谷は頭から血を流しながら去って行った。

青空

「逃げんじゃねえ!!」

浩一が青空を必死に止めている。

浩一（あいつ拓馬のパンチを受けて立っていやがる・・・何て奴だ
!!）

青空拓馬と神谷大和

最悪の出会いだったこの二人は
後にできる伝説の中心となるのであった。

#4 再戦へ

青空と神谷の出会いから数日後

湘北高校体育館

昼休みの体育館にはボールを使って遊んでいる人

またはシュート練習をしているバスケット部員もいる。

その中でも一人、赤木と同じぐらいの大男がいた。
ゴール下のシュートの練習をしている。

彼の名前は熊岡信博。

湘北バスケット部のキャプテンである。

バスッ！！

熊岡

「ふう……」

（インターハイ予選まで、あと2ヶ月か……今年こそは行くぞ！
全国に……）

「やってるな！熊岡！」
声の主は赤木だった。

熊岡

「先生！！」

赤木

「二週間後に京成と練習試合が決まったぞ！」

熊岡

「京成ですか……」

赤木

「今回はこれから入って来る一年も出していきたいと思ってる」

熊岡

「一年ですか……そういうばすごい奴が入って来るって聞いたんですけど」

赤木

「ああ……一中の神谷か。あいつはきつと即戦力になるはずだ」

熊岡

「そうだったら全国も夢じゃないですね」

赤木

「そうだな」

そのとき

「ゴリラジジイー！！！！」

大きな声が体育館を響き渡った。

体育館にいる人全員がこの声に驚いている。

「何だ！？」

赤木が声の方に振り返ると、そこには青空がいた。

「この前のリベンジしに来た！勝負しろ！！」

青空は赤木の方へ向かって歩いて来た

赤木

「どうせまた負けるのがオチだと思うがな・・・」

青空

「うるせえ！！早く勝負しろ！！」

赤木

「ふん・・・わかった」

青空

「次こそぶつ倒す！！」

熊岡

「誰だあの金髪は・・・」

こうして青空と赤木の再戦が始まる。

体育館の中ではすでにバスケット部員や野次馬が集まっていた。

もちろん浩一達も見ている。

宮野

「あーあ・・・やっぱり再戦を申し込んだか・・・」

高杉

「また駄目な気がするけど」

浩一

「まあ一週間練習してただけでも、すごいことだけだな」

赤木

「ルールは前と同じでお前がOFで、俺がDFの10本勝負。一本でもシュートを決めたらお前の勝ちだ」

青空

「わかってるから、さっさとしろ!」

「あの金髪誰だ!?!」

「赤木って昔全国出たんだろ?無理に決まっている」

「いや、でも一本だからわからないぞ!」

野次馬の声が飛び交う。

「じゃあ始めるぞ」

赤木は青空にボールを渡した。

10本勝負開始!!!

青空（今回こそ抜いてやる!!）

ダムツ!!

青空がドライブを仕掛ける。

キュツ!

またしても赤木は抜かれない。

そしてまた無理矢理シユートを放つ。

バツシイイ!!!

赤木のブロック。

宮野

「また同じパターンで止められているじゃねえか!!」

高杉

「こりゃあ駄目だ・・・」

「おおー！！高いな！！」

「まるでキングゴングみたいだ！！」

赤木

「こんなんじゃ俺からゴールは奪えんぞ！」

青空

「く・・・くそう・・・」

熊岡

「あんなふざけたプレーで、先生に勝てる訳がねえ・・・」

前回のようには赤木の圧倒的な力で青空はゴールを奪えない。そして青空の攻撃は8本目を迎えていた。

「やっぱり赤木の余裕勝ちだな！！」

「あの金髪何にもできてないぞ！」

そのとき一人の男もこの対決を見ていた。

「あのサイヤ人が勝てる訳がねえ・・・」

その男とは神谷大和である。

赤木

「前のときと全く変わっとらん！こんなんで勝とうとは甘いな」

青空

「うっせえ！！」

（でも確かにこのままだと勝てねえ・・・）

高杉

「拓馬の奴、前とちっとも変わってねえじゃねえか！！」

浩一

「いや、あいつのことだからこのままじゃ終わらせねえと思っぜ」

宮野

「そっか？今のところはそんな気がしねえけど」

青空（今の俺にはゴリラを抜くことはできねえ。

でも何かできることはあるはずだ！！絶対に負けねえ！！）

「行くぞ！！ゴリラ！！」

#5 青空入部

青空

「行くぞ！！ゴリラ！」

ダムツ！！

赤木

「甘い！！！」

「また止められた！！！」

「やっぱりあの人上手いな！あれで現役じゃないんだろ！？」

またしても青空のドライブが止められる。

しかし

青空は赤木に背を向け、押しはじめた。

ポストブレイ……
神谷

赤木（自分で考えた末の答えか・・・こいつにしてはたいしたものだ・・・）

青空（技術でかなわねえなら、力づくでいってやる！！）

熊岡（先生のやってたポジションはセンターだ。しかも全国に行ったほどの選手だ。
しよばいポストプレイなんかに負ける訳がない！！）

ダムツ！！

青空が力で押し込む。

赤木（む・・・なかなか力がある！！）

少しずつ押し込まれていく。

熊岡

「!?!?!?」

キュツ！！

赤木（早い！！）

青空素早いターンで赤木をかわしシュートを放つ。

ガンツ！！

「ああー惜しい！！」

「あの金髪、なかなか力あるぞ！！」

「もしかしたら、あいつ勝てるかもしれないぞ！！」面白半分で見
ていた人達も青空を応援し始めていた。

赤木（あいつに押し込まれるとは、俺もなまったもんだな・・・）

青空

「ちくしょう・・・あともう少しなのに・・・」

9本目またしても青空はポストプレイで挑むが、シュートを入れられないのが痛手になった。

「ああやっぱり相手が悪すぎるな・・・」

「ここまでだな……」

勝負を見ていた人達から諦めの言葉がちらほら出ている。

くそが……
青空

赤木

「まだ諦めんのは早いんじゃないか？それと勝負はシュートを打つて終わりじゃない！」

青空

「諦めるか……くそが！てめえに言われたかねえ！！」

宮野

「ラスト1本か……」

高杉

「拓馬にしては頑張ったと思っぜ」

浩一

「あいつは頑張ったじゃ満足しねえよ」

運命のラスト1本が始まった。

青空はまたしてもポストプレイで押し込む。

キュッ！！

素早いターンをし、シュートへ

赤木は読み、ブロックに飛ぶ。

しかし、

赤木

「なに！？」

青空はシュートを打たなかった。

熊岡

「フェイクだと！？」

青空今度こそシュートを放つ。

ガンッ！！

熊岡

「シュートは入らないと意味がない。この勝負終わったな」

「打って終わりじゃねえ!!」青空がリバウンドに飛ぶ。

「た・・高い!!!」

神谷

「・・・」

「捕らせん!!!」赤木も飛ぶ。

青空と赤木のリバウンド勝負へ

バツシイイ!!!

上空でボールを取ったのは青空。

青空（このままぶち込んでやる!!）

「うおおおおお!!!!!!」

ドガッッ!!!!!!

上空で取ったボールをそのままリングにぶち込んだ。

「ぐおっ!!」赤木が吹っ飛ぶ!

「取ったボールをダンクしたぞ!!」

「あの赤木先生を吹っ飛ばした!!」

「よっしゃああ!!勝ったぞおー!!」青空嬉しさのためか吠えている。

高杉

「あのゴリラから・・・」

宮野

「勝っちゃまった・・・」

浩一

「まさかここまでとは思わなかったぜ」

「・・・」熊岡は驚愕の表情を浮かべている。

「青空拓馬・・・」神谷は体育館を後にする。

「今回は俺の完敗だな」
赤木が青空に声をかけた。

青空

「俺様が負けっ放しで終わる訳がねえ！！」

赤木

「フン・・・生意気な・・・どうだ青空！！バスケットは面白いだろ！？」

青空

「・・・」

赤木

「バスケット部に来て！！お前ならすごい選手になれる！！」

青空

「部活なんかやるか！！」

宮野

「本当はやりたいたんだろ！？」

浩一たちが青空のもとへ歩み寄っていた。

高杉

「相変わらず素直じゃねえな」

青空

「何言ってるんだてめえら！！」

浩一

「ったく・・・見ててわかるぜ！！それにお前はここ最近ずっと」
リラに勝つために、練習してたじゃねえか？」

青空

「・・・」

宮野

「まあ中学ん時は先生や先輩と衝突があつてすぐやめちまったけどな」

高杉

「またやってみろよ！！拓馬！！俺達は応援するぜ！！」

浩一

「またすぐやめたら、許さねえけどな！！」

青空

「お前ら・・・」

赤木

「・・・」

青空

「ゴリラ！！・・・俺を・・・俺をバスケット部に入れろ！！」

赤木は笑みを浮かべた。

「やっと決めてくれたか！！言っておくが厳しいから覚悟していけ！！！！」

青空

「厳しかろうが絶対ついていってやるよ！！！！」

赤木との再戦を経て

青空拓馬、湘北バスケット部に入部！！

6 練習初日

青空がバスケット部に入部し最初の練習が始まる。

湘北高校体育館

新入部員が集まっている。

浩一達が外から見ている。

高杉

「今日から練習か」

宮野

「前みたいにすぐやめなければいいけど・・・」

浩一

「まあいきなり問題は起きそうだけどな」

「あいつが赤木先生と戦ってた青空か・・・」

「悪そうな奴だな・・・」

周りは青空を見てざわついている。

「うるせえ・・・庶民共が・・・」青空は苛立っているようだ。

「本当に金髪だ・・・派手だな」

カチンッ・・・

青空

「お前・・・今俺の髪・・・馬鹿にしゃがったな！」

「い・・・いや・・・馬鹿にはしてないけど・・・」

「許さーん！！！」青空、襲い掛かる。

宮野

「やべえ！！暴れ始めた！！」浩一達が止めに入ろうと、体育館の
中に取り出そうとする。

その時

熊岡

「入部して早々暴れてんじゃねえ！！！」

ゴツンッ！！

青空の脳天に熊岡のゲンコツが炸裂した。

青空

「いつてえ・・・何すんだ！！この野郎！！！」

熊岡

「礼儀がなつてねえな・・・」

「あれがキャプテンの熊岡さんか・・・」

「すごい迫力だ・・・」

浩一

「拓馬を一発で黙らせるとは・・・すごい奴だな」

熊岡

「集合！！！！」

バスケット部員が集まる。

熊岡

「今年の新入部員はなかなかいるかな・・・とりあえず自己紹介を
してもらおうか。」

名前と出身中学、身長、ポジションを言ってくれ。じゃあまずそこ
の小さいの」

「はい！！」軽くくせのある髪の小柄な男が返事をした。

「日下部義仁いいいます。出身は大阪の浪花中央中学。身長は165。
ポジションはガードです。よろしくたのんます。」関西弁の口調だ。

熊岡

「他県からか・・・高校バスケットでとくに小柄な奴は厳しくなるぞ。頑張れよ!!」

日下部

「はい!!」

熊岡

「よし次!!」

浩一

「あいつ公園にいた奴だ!!」

宮野、高杉

「????」

青空

「あいつ!?!?!」

神谷

「神谷大和。横浜第一中出身。身長は188。ポジションは何でもできます。」

「あの神谷って奴、全中出たって聞いたぞ!!」

「あいつのオフエンス力は凄かった!!」

「てめえ!!この前のことは忘れてねえよな?」青空が神谷の目
前に来た。

神谷

「は・・・あの時はてめえがいけねえんだろ?」

青空

「喧嘩の続きやってやるうじゃねえか!!」

熊岡

「何やってんだ!」

ゴッソッ!!

再びゲンコッ。

青空

「いてえ・・・!!」

熊岡

「まったく・・・」(先生は何でこんなめちゃくちやな野郎を入れ
たんだ・・・)

高杉

「拓馬殴られてばかりだな・・・」

宮野

「いつかあのキングゴングに殺されるぞ・・・」

熊岡

「次!!」

青空

「俺の番か!!青空拓馬。若松中出身。190cm。ポジションは知らん!!」

熊岡

「これで全員だな。じゃあこれから練習を始めるが、その前に一言言っておく。

俺達が目指しているのは全国だ!!練習が苦しくなることを覚悟しておけ!!」

日下部(そんなぐらい言ってもらわんと困るで!!)

神谷:

青空

「全国?何それ?」

「全国……」他の新入部員は圧倒されている。

熊岡

「よーし……!始めるぞ!!」

湘北……!……!……!ファイッ!!……!」

「おお……!……!……!」

こうして練習が始まった。

最初はランニング、フットワークからはいる。

青空

「何だこの練習。つまらん!」

その時

ガラガラ

体育館のドアが開いた。

「お!! 新入部員入って来たか」 赤木が来た。

「ちゅーす!!!」

青空

「ゴリじゃねえか!？」

熊岡

「挨拶をしろ!」

ゴツンッ!!

青空

「ちゅーす!!!」 (このゴリ2世すぐ殴る...)

熊岡、赤木のもとへ行く。

「新入部員7人です。」

赤木

「7人か・・・何人残るかだな・・・とりあえずいつも通りの練習をしる！」

熊岡

「はい！！スクエアパス！！！」

「おおー！！！」

青空

「やっとボールを使うみたいだな！！おーし！やるか！！！」

「青空！お前はこっちだ！！」赤木が青空を呼び止める。

「えっ・・・！？」青空はコートの外に呼ばれた。

赤木

「お前は別の練習だ！！！」

#7 紅白戦

4月某日

高杉

「練習始まって一週間かあ!!」

宮野

「きつと拓馬のやつ、みんなと同じ練習に参加できないから、ストレス溜まってるぜ!」

浩一

「暇だし今日も見に行くか」

湘北高校体育館

熊岡

「オラー!!足動かせ!!」

バスケット部が練習を行っていた。
一人を除いて

青空

「何故、隅っこでこんなことやらないといけないんだ!!」
青空はコートの外でドリブルの基礎練習をしていた。

「そこ文句言わない!」マネージャーの女の子が言う。

青空

「す…すいません」（この人、恐いんだよな…）

一週間前

練習初日

青空

「何だ別の練習って!?!」

赤木

「お前はドリブル、パス、シュートの基礎をやらしてもらおう!基礎は大事だからな!」

青空

「えっ!?!」

赤木

「この練習はマネージャーの如月に見てもらおう」

如月

「マネージャーの如月葵よ!よろしくね!ちなみに学年は青空の二つ上よ!」

青空

「…マジかよ」

青空

「ちくしょう……ゴリめ……」

一方で赤木は練習を見ていた。

赤木（やはり神谷は評判通り、いやそれ以上かもしれんな。日下部もいい選手だ。

そして青空は途中で逃げ出すとも思ったが、文句を言いながらも、ちゃんと基礎練習をやってるしな！）

熊岡

「おーし！！集合！！」

全員赤木のもとへ集まる。

赤木

「来週ここで京成と練習試合することになった」

「京成……東京のベスト4じゃないか」

青空

「試合か！！」

神谷

「……」

赤木

「この試合では1年も出していこうと思ってるからな」

日下部（活躍次第ではスタメンも取れるかもしれへんで!!）

赤木

「じゃあとりあえず二、三年と一年で試合してもらっかな」

熊岡

「はい!!」

こうして一週間後の練習試合に向けて紅白戦をすることになった。

白：二、三年チームスタメン

熊岡、駒坂、仲根（三年）

山岡、石毛（二年）

赤：一年チームスタメン

神谷、高代、渚、目黒、沢田

青空

「何故俺がスタメンじゃねえんだ!!」

如月

「わがまま言うんじゃない!!」

青空

「……………」(ちくしょう「ゴリめ!」)

赤木

「日下部!お前は途中で出すから準備しておけ!」

日下部

「はい!」(よっしゃ!やったるで!)

「よし始めるぞ!」赤木はボールと笛を持っている。審判をやるみたいだ。

センターサークルにはジャンパーの熊岡、神谷がいる。

熊岡

「よろしくな神谷」

神谷

「……………」

赤木がボールをあげた。

バシィ!!!!!!

ジャンプは互角。

ボールは二、三年チームのガード山岡が取る。

如月

「熊岡先輩と互角なんて・・・さすがね！」

青空

「カミヤめ・・・」

二、三年の攻撃

熊岡がローポストで面をとる。

「ぐ・・・すごい力だ!!」「ディフェンスについている目黒はどつ
することもできない。」

ボールが山岡から熊岡に入る。

そしてターンからゴール下でシュートを放つ。

バスッ!!

山岡

「ナイシュウです!!熊岡さん!!」

熊岡

「おっ!!」

如月

「さすが先輩ね！県で有名なセンターなだけあるわ！！」

青空

「あのゴリ2世、そんなすげえのか・・・」

バツシイイイ！！！！！！

熊岡のブロックショット。

「ナイスだ！！熊岡！」副キャプテンの駒坂がボールを拾う。

二、三年チームの速攻。

駒坂から石毛へ、そしてレイアップシュートを放つ。

パスッ！！

二、三年 4

一年 0

熊岡

「おらどうした一年！！」

神谷（おもしろえ・・・やってやるよ！！）

「ボールくれ！！」

神谷がボールを持つ。

如月

「神谷がどこまでやるか見物だわ!!」

青空

「どうせあの根暗野郎、たいしたことないですよ!!」

「……」赤木は無言でじつと神谷を見ている。

(全中出た実力がどんなものか見てやる!!) ディフェンスの仲根が腰を落とした。

その時

ビュンッ!!

神谷あつという間に仲根を抜く。

沢田

「早い!?!」

さらに神谷は止まることなく、山岡、石毛も抜いた。

山岡、石毛

「!?!?!」

「さあ来い!神谷!!」ゴール下には熊岡がいる。

キュッ!!

しかし神谷はミドルレンジでストップし、シュートを放った。

シュパッッ!!!!

二、三年 4

一年 2

如月

「す・・・すごい!!」

熊岡（神谷大和・・・こいつは本物だ!!）

赤木まさか「」まで

「・・・」神谷のプレーを見て青空は驚愕の表情を浮かべていた。

#8 新戦力VSキャプテン、副キャプテン

二、三年 4

一年 2

序盤は熊岡、神谷の活躍から始まった。

二、三年の攻撃。

山岡がボールを運ぶ。

左45度には駒坂、熊岡が駒坂のディフェンスの渚にスクリーンをかける。

熊岡

「行け!!!」

駒坂ゴールに向かって走る。渚は熊岡のスクリーンに引っ掛かった。

ボールは駒坂に渡る。

(行かせない!!!) 目黒がヘルプに入る。

しかし

スッ

駒坂が横にパスを出した。

パスを取ったのは熊岡。

ドガッツ!!!!!!!!!!

ボースハンドダクが炸裂。

二、三年 6

一年 2

如月

「やっぱり熊岡先輩と駒坂先輩の連携はすごいわ!!」

日下部

「それにしても何て迫力のダクや・・・!!」

青空

「ドンキーコングみたいだ・・・」

その時

シュッ

神谷がスリーを放った。

(えっ!?) 山岡不意をつかれる。

シュパッ!!!

日下部（決めやがったで・・・）

二、三年 6

一年 5

神谷のスリーで1点差に追い付く。

高杉

「お!!!試合やってんじゃねえか!」

浩一達が体育館に来た。

宮野

「拓馬のやつ出てねえな!」

浩一

「まあいきなりは出れないだろ」

時間が経つにつれて、二、三年の経験やチーム力の差から徐々に開き始めていた。

石毛がミドルシュートを放つ。

シュパッ!!!

熊岡

「ナイシュウだ！石毛！」

二、三年 12

一年 7

如月

「やっぱり差が開いてきたわね。二、三年は熊岡先輩と駒坂先輩を起点にチームで点を取っているのに対して、一年は神谷しか点を取っていないわね」

青空

「ざまあみるカミヤー！」

ゴール下の熊岡が3Pラインの駒坂にパス。

シュパッ！！

駒坂スリーを沈める。

二、三年 15

一年 7

「ピーーーーー！！！！！！！！！！」笛がなった。

赤木

「日下部！！高代と交代だ！！」

日下部

「はい！」

日下部、高代と交代。

現在の一年チーム

神谷、渚、沢田、目黒、日下部

青空

「あのチビ助め！！俺より先に出やがって！」

如月

「まああの子も大阪では有名だったらしいからね！」

一年チームの攻撃。

日下部がボールを運ぶ。

「行くでー！！」

ディフェンスの山岡が構える。（来い！！）

ビュンッ！！！！！！

素早いドライブでポイント内に切れ込んだ。
山岡はついていけない。

ビッ

日下部はミドルレンジで空いていた沢田にパスを出した。

日下部

「シュートやー!!」

沢田が言われるがままにシュートを放った。

スパツ!!!

山岡(こいつも早い!!神谷以上かも・・・)

赤木(ほう・・・なかなかやるな!!)

二、三年 15

一年 9

石毛がドリブルでキープしている。

パシィィィィ!!

後ろから日下部がスティール

石毛

「!？」

日下部

「速攻や!!」

先頭を切って神谷が走っている。

「へいつ!!」

日下部からワンパスで神谷へ

ドカツツツ!!!!

熊岡と対象的な美しいワンハンドダークをぶち込んだ。

如月

「日下部が入って一年チームのリズムが良くなって来たわね!!」

青空

「カミヤの奴!!目立ちやがって!!」

二、三年 15

一年 11

二、三年チーム、山岡がボールを持つ。

熊岡、ゴール下でポストを取った。

熊岡

「山岡!!」

山岡が熊岡にボールを入れる。

ダムッ

熊岡、背中でDFの目黒を押し込む。

如月

「やっぱり一年じゃ熊岡先輩を抑えるのは厳しいわね・・・」

バスッ

またしても熊岡がシュートを沈めた。

青空

「何で俺が出れねんだ!!」

高杉

「おいおい・・・拓馬、出れなくて相当ストレス溜めてるぞ・・・」

浩一

「もうそろそろキレそうだな・・・」

浩一の予想は当たっていた。

「おいコラァ!!ゴリィ!!」青空、赤木に駆け寄る。

如月がそれを見て慌てている。

「ちょっとあんた何やってんの!!」

青空

「俺を試合に出せー!!」

「何だ!!先生にその態度は!!」コート内で熊岡が怒っている。

呆れる赤木

「まったく・・・大人しく見てられんのか」

青空

「カミヤが出てるのに何で俺が出ないんだよ!!」

神谷（馬鹿か・・・）

アホやで・・・

日下部

二人共呆れている。

青空、熊岡に指を指しながら言った。

「それにあのドンキーコングにやられすぎなんだよ!!」

熊岡

「誰がドンキーコングだコラァ!!」

赤木

「ほほう・・・そこまで言っんなら、お前熊岡を止められるのか?」

青空

「上等じゃねえか！！やってやるよ！！」

赤木

「じゃあやってみる！！目黒と交代だ！！」

如月

「せ・先生」（絶対無理に決まってるわ・）

宮野

「面白いことになってきたな！！」

宮野、高杉はこの状況を見て楽しんでいる。

浩一は呆れている。

「馬鹿だな・・・」

ビブスを着てコートに入る青空

「カミヤーてめえには負けねえ！！」

神谷

「負けるか・・・サイヤ人」

青空

「なんだとおお！！」

火花を散らす青空と神谷

二人を見て呆れる日下部

「何内輪もめしとんねん」

熊岡

「あのガキには絶対に負けん!!」

駒坂

「まあまあ落ち着けよ熊岡!いつも通りやればいいだろ?」熊岡をなだめている。

二、三年 17

一年 11

いよいよ青空拓馬、紅白戦出場!!

#9 トリオ

二、三年 17
一年 11

青空いよいよ登場。

高杉

「拓馬が出るぞ！」

「何か面白いことやってくれねえかな！」宮野はニヤニヤしている。

浩一

「多分やるな!!！」

青空

「よっしゃー!!!!俺様の出番だぜ!!!!
おいドンキー!!!!てめえには負けねえ!!！」

「上等だ!!!!このガキが!!！」熊岡はキレている。

如月

「熊岡先輩・・・我を忘れてる・・・」

腕を組ながら赤木

「まったくあいつらは・・・」

二、三年チーム

熊岡、駒坂、仲根、山岡、石毛

一年チーム

神谷、渚、沢田、日下部、青空

一年の攻撃

日下部がボールを持っている。

熊岡

「おらあ！来い！！金髪のがキが！」

青空

「何だと！！ぶっ倒してやる！！」

ローポスト付近で二人が口論している。

日下部

「喧嘩しとる場合か・・・」

そのとき神谷がDFの仲根を振り切る。

仲根

「!?!」

日下部から神谷へ。

神谷、ミドルシュートを打つ。

青空

「あっ!?!?!」

シュパツ!?!?!

日下部

「ナイスや!大和!」

青空

「チビ助!?!何でカミヤにパスする!?!」

日下部

「今、普通に空いてたやろ!」

怒鳴る赤木

「コリアア!?!青空!?!黙ってやれ!?!でないと下げろ!?!」

黙る青空

「ぬ...」

一方、二、三年の攻撃。

ミドルでポストを取った熊岡にボールが渡った。

DFは青空がついている。

ダムッ!!

熊岡、ドリブルをつきながら背中で押し込む。

青空（ぐ・・・馬鹿力だな・・・）

如月

「やっぱり先輩の力は凄すぎるわ！」

バスッ!!

シュートを沈めた。

熊岡

「口ほどにもねえな!!！」

悔しがる青空

「くそが!!！」

二、三年 19
一年 13

一年チームのガード、日下部と渚でボールを回す。

ビュン!!!

一瞬にして日下部がドライブで切れ込む。

赤木（速いな・・・）

キュツ!!

ストップしシュートを放った。

ガンツ!!

リングに嫌われる。

如月

「シュートは苦手なようね」

バシィ!!

リバウンドを取ったのは石毛。

日下部

「ちっ……」

二、三年の攻撃へ

山岡、駒坂、仲根の三人でボールを回す。

熊岡またしてもローポストを陣取った。

パシィ

熊岡、ボールをもらっつ。

熊岡（雑魚だな！！この金髪！！）

キュッ

ターンシュートを放つ。

青空（次は負けん！！）

バツシィィィィ！！！！！！

青空のブロックショットが炸裂。

熊岡

「なに!?!」

駒坂

「!?!?!?!」

如月

「高い!?!」

赤木（それに早い!?!）

みんな青空のジャンプに驚いている。

一年チームの速攻。

日下部から青空にボールが渡った。

前には神谷が走っている。

日下部

「神谷にパスや!?!」

しかし青空はパスを出さない。

青空（あいつにパスなど出さん!?!）

神谷（あのサイヤ人・・・）

高杉

「あいつ何するつもりだ!？」

宮野

「わからん!!」

浩一

「・・・!!」

ドリブルする青空（ゴリにやったみたいだ、直接リングにぶち込んでやる!!）

青空は踏み込んで

ダンッ!!

飛んだ・・・

3Pラインから

如月

「え?」

日下部

「あんな遠くから……」

神谷

「……………」

熊岡

「!?!」

青空、高く宙を舞う。

そして

スタッ

リングに届かず着地した。

青空

「……………」

「ピ——————!!!!!!」赤木が笛を鳴らす。

「こらああああ!!青空ああ!!無理なプレイしやがって!!!!お前もつ下がれ!!!!」

落ち込む青空

「ぐ……やっちゃまった……」

「わーはっはっはー！！いいぞ拓馬！！！」浩一ら三人は大爆笑している。

神谷

「馬鹿野郎……」

日下部

「あほやで……」

青空が下がっても紅白戦は続く。

二、三年は熊岡、駒坂のチームプレイを中心に

一年は神谷、日下部の個人技を中心に戦う。

そして最終スコアは

二、三年 23

一年 19

二、三年の勝利で終わった。

日下部

「神谷ますごいけど、上級生の連携もなかなかやで!!」

熊岡（青空拓馬・・・めちゃくちな奴だが、ジャンプ力はすごいな!!）

駒坂（神谷に日下部。そして青空。とんでもないトリオが入って来たな!!）

これなら全国に行けるかもしれない!!）

みんなを見て赤木（お互いに刺激になったかな）

そして

熊岡

「今週末には練習試合！それが終わったらインターハイ予選が始まる！」

「気締めていくぞ!!」

「はい!!!!!!!!!!」

熊岡

「よーし終わるぞ!!」

湘北――ファイツ!!」

「おお――!!」

「青空!熊岡!ちよつと来い!!」赤木が二人を呼ぶ。

熊岡

「??」

青空

「何だ?」

二人は赤木のもとへ行く。

赤木

「青空!!お前に覚えてもらいたいことがある!!」

10 必殺技

赤木

「お前に教えたいことがある!!」

目をキラキラさせながら青空

「何だゴリ!!俺にしかできない必殺技でも教えてくれるのか!!」

呆れる熊岡

「馬鹿か・・・」

赤木

「まあそんなものだ・・・」

さらに目を輝かせる青空

「早く教える!!なんだその技って!!!!」

このやり取りを駒坂と山岡が見ている。

駒坂

「先生が個人的に教えに行くなんて・・・熊岡以来だな」

山岡

「なんで先生は青空のことを気に入ってんですかね?？」

駒坂

「なんか昔のチームメイトに似てるらしいよ」

山岡

「え!?!この湘北が全国に行ったときの!?!」

駒坂

「ああ。」

新戦力が入って来たし、これから湘北は強くなるぞ!?!」

山岡

「はい!?!」

あとアラタがいれば……」

駒坂

「アラタか……予選までに間に合えばいいけど……」

一方で日下部は自主練習をしている。

ダムッ

日下部（今度の練習試合の出来次第で、きっと予選のスタメンが決まるはずや!?!やったるで!?!）

シュパッ！！！！

神谷はシュートを打っていた。

神谷（・・・どこだろうと倒す・・・日本一のプレーヤーになるために・・・）静かに闘志を燃やしている。

他にも全体練習が終わった後でも自主練習をしている。それぞれの思いにふけながら

仲根（京成か・・・あの二人をどれだけ抑えるかが鍵だな・・・）

石毛（この試合で予選の弾みをつけないと）

沢田（きつと神谷はスタメンだ・・・俺もがんばらないと！！）

渚（試合に出たい！！がんばるぞ！！）

赤木

「お前に教えたいのはリバウンドだ！！」

熊岡（なるほど！）

青空

「リバウンド???何それ??」

赤木

「リバウンドとはシュートで落ちたボールを拾うことだ!!」

「何だよ!!基礎と同じように地味なやつかよ!!そんなことだったら、俺はやらん!!」立ち去ろうとする青空。

それを見て焦る熊岡

「おいコラア!!話を最後まで聞かんか!!」

熊岡を無視する青空

「フン!!やる気でねえ!!」

そのとき赤木が口を開いた。

「リバウンドを制する者は試合を制す!!」

「!!」青空が言葉に反応する。

「その言葉・・・なんかかっこいいな!!」

そんなすごいのか!?!そのリバウンドって!!」

赤木

「ああ。お前の力が必要だ!!」

青空、不適な笑みを浮かべる。

「そこまで言うならやってやるよ！！俺が湘北を強くしてやる！！」

青空を見て熊岡（単純すぎる野郎だな・・・）

赤木

「とりあえず練習には熊岡に付き合ってもらおう。熊岡頼んだぞ！」

頷く熊岡

「はい！」

青空

「よっしゃー！！ゴリ！早く練習始めようぜ！！」

微笑む赤木

「元気なのも今の内だ・・・」

こうして青空の個人練習が始まる。

後にこのリバウンドこそが青空だけでなく、湘北にとって大きな力になるのである。

そして一週間後――

湘北新チームとなって最初の練習試合が始まる！！

11 京成高校

紅白戦から一週間後

4月下旬

いよいよ、湘北新チームとなって初の試合が始まる。

相手は東京の京成高校。

東京のベスト4であり、今年こそ全国に出るであろうと言われる強豪校である。

湘北高校体育館

湘北のバスケット部員は椅子を並べている。

青空が文句を言いながら、椅子を運んでいる。

「なんでこんな事をやらんといけないんだ。いいやー！もうサボっちゃまおう」

熊岡

「バカタレ!!」

ゴツンッ!!!

青空の脳天にゲンコツが炸裂。

頭を抑えながら青空

「いってえ・・・ドンキーめ・・・」

熊岡

「サボろうとしてんじゃねえ!!」

神谷（馬鹿野郎・・・）

アホや：
日下部

そのとき

ガラッ

体育館のドアが開いた。

「ちゅーーーーーす!!!」

京成高校が来た。

体育館の教官室から出てくる赤木

「お!!!来たか!」

京成の顧問の名倉が赤木のもとへ行く。

「赤木先輩!今日は呼んでいただいてありがとうございます!」
会釈をしながら話している。

赤木

「おお名倉!わざわざ遠くからすまないな」

首をふりながら名倉

「いえいえ、そんなことないですよ!電車ですぐなんで!」

京成高校の顧問、名倉敏彦。

彼は高校時代、名朋高校である名センターと共に全国制覇を経験した名プレイヤーであり、大学では赤木の大学の後輩であった。

名倉

「そついえば今日の試合、東海林が楽しみにしていましたよ。『熊岡を倒す!』』とか言つて」

赤木

「東海林か・・・」

熊岡は同じぐらいの背で、スキンヘッドの男と話している。

熊岡

「久しぶりだな!東海林!」

スキンヘッドの男が答える。

「ああ。吉川と今日を楽しみにしてた。負けんぞ!」

熊岡がニヤリ

「生意気な!今日は負けて帰ってもらつぞ!」

ガシッ

二人が握手を交わす。

二人の様子を見ていた青空

「なんだ？あのドンキーと話しているハゲは？」

如月

「京成のキャプテン、東海林昭夫よ！！熊岡先輩のライバルね！」

青空

「ドンキーのライバルか・・・どうりで同じような顔をしてるんだな
！」

如月

「いや、それは関係ないと思うけど・・・」

日下部

「如月さん！京成ってあの人の他にも有名な人がいると聞いたんですけど」

「ああ、吉川さんのことね」

如月が京成の短髪の真面目そうな人を指した。

「吉川光一。シューターとして有名だけど、その他の能力もなかなかのものよ!」

「まあ二人とも俺の相手ではねえな! ! だーはっはっ! !」高笑
いする青空。

日下部

「どっからそんな自信がわいてくるんや...」

如月

「ここ最近先生に熱血指導してもらってたからね! !」

青空

「京成は俺が倒す! !」

そして

両チームがアップを終え、ベンチに集まっている。

湘北ベンチ

赤木

「この練習試合は今度の予選に望むにおいて、大事な試合だ!! 気引き締めていけ!!!」

一同

「はい!!!」

赤木

「スタメンは熊岡、駒坂、仲根、山岡そして・・・神谷だ!!!」

青空

「何だと!?! 根暗野郎がスタメンだと!?!」

如月

「コラ!!! 文句言わない!」

青空

「ぐ・・・くそが・・・」

呆れる如月

「まったく・・・」

(でもすぐにスタメンなんて・・・すごいわね!)

日下部（さすがやな。俺もすぐに取ったるで！！）

手を叩きながら熊岡

「よーし！！行くぞ！！」

一方で京成ベンチ

東海林の肩をポンと叩きながら名倉

「頼んだぞ！東海林！！」

東海林

「はい！！」

名倉

「吉川！お前もな！」

吉川

「わかってますよ。今日を楽しみにしてたんですから。」

両チームがセンターサークルに散らばる。

ジャンパーは熊岡と東海林。

如月

「いよいよ始まるわね!!」

不満そうな青空

「なぜ俺がスタメンじゃないんだ」

日下部（楽しみやで!!）

湘北と京成の練習試合

いよいよティップオフ!!

#11 京成高校（後書き）

いよいよ練習試合です！がんばります！！

#12 点取りコンビ

湘北 vs 京成

ジャンプボール

審判からボールが放たれた。

熊岡と東海林が飛ぶ。

バシイ!!!!!!

ジャンプは互角でボールが落ちる。

ボールを取ったのは吉川。

湘北スタメン

赤ゼッケン

4・熊岡 198cm / 3年 / C

5 ・駒坂 177cm / 3年 / SG
6 ・仲根 178cm / 3年 / SF
8 ・山岡 172cm / 2年 / PG
15 ・神谷 188cm / 1年 / PF

京成スタメン

白ユニフォーム

4 ・東海林 199cm / 3年 / C
5 ・山口 185cm / 3年 / PF
6 ・坂本 183cm / 3年 / SF
7 ・吉川 178cm / 3年 / SG
12 ・脇屋 177cm / 2年 / PG

最初の攻撃は京成から

ボールはPG脇屋がキープする。

脇屋につく山岡（まずは誰から攻める？）

東海林が吉川についている駒坂にスクリーン。

東海林（行け！！）

吉川が逆の3Pラインに走る。

「スイッチだ!! 駒坂!!」熊岡が吉川につく。

駒坂は東海林へ

ボールは吉川にわたり、スリーを放つ。

如月

「初得点は京成か!!」

だが熊岡がブロックに飛ぶ。

「簡単に打たせん!!」

日下部

「高い!!!!」

しかし

ヒュッ

熊岡

「!!!!」

吉川がシュートの体制からパスを出した。

東海林

「ナイスパース!!!」

ゴール下に走り込んだ東海林へ

ドガツツツツ!!!!!!!!!!!!

ボースハンドダク炸裂。

「よーよーし!!!!」

ベンチの名倉が拳を握る。

如月

「上手い・・・」

腕くみの赤木

「・・・」

青空

「あのハゲゴリ、迫力がすげえな!!!」

バツシイイ!!

山岡

「あ!!!!」

脇屋が山岡からステイル。

如月

「山岡くん、さっきのダンクの迫力にやられてる……」

ローポストの東海林にボールがわたる。

青空

「ゴリラ対決!!」

ダムツ

東海林が背中で熊岡を押し込む。

「簡単には打たせん!!」熊岡も踏ん張る。

日下部（二人ともすごいパワーや！！）

シュツ

東海林は外へパスを出した。

熊岡

「なに??」

3Pラインの吉川がパスを取る。

シュパツ!!!

吉川のスリーが決まる。

「ナイツシュウ!!!」京成ベンチが声を出す。

冷や汗の日下部

「DFの駒坂さんが一瞬抜かれた時にパス出したで。タイミングがどんぴしゃりやー!」

如月

「やっぱりあのコンビはすごいわ。1年のときから試合を出てたんだし」

山岡がボールを運ぶ。

山岡（流れが良くない・・・ここで決めないと）

東海林

「熊岡！！お前はこんなもんじゃないだろ？」

熊岡

「・・・」

山岡、仲根、駒坂でボールを回す。

そしてボールは神谷へ

腰を落とす坂本（これが噂の一年坊か・・・）

神谷、一瞬で神谷を抜き去る。

シュパツ！！

シュートが決まった。

「・・・！！！」沈黙の京成ベンチ。

名倉（神谷大和。噂には聞いたが、ここまでとは）

「よーし！ーし！ーし！ー神谷ーし！ー」

青空

「く．．神谷め．．」

赤木

「ウチのコンビも負けとらんど如月」

如月

「え？？」

熊岡

「うおらあああ！ー！ー！ー」

バツシイイイイ！ー！ー！ー！ー！ー！

熊岡が東海林のシュートをブロック。

東海林

「熊岡！ー！ー！ー」

「ナイスブロック！ー」 駒坂がボールを拾う。

ダッ!!

神谷が前を走る。

名倉

「速い!!!!」

駒坂から神谷へボールが通る。

しかし、吉川が戻っている。

吉川

「簡単に決めさせねえ!!」

神谷、そのまま突っ込んでレイアップ

吉川も反応して飛んだ。

スッ

神谷はボールを後ろに放った。

パシッ

熊岡がボールを受ける。

吉川（こいつ・・・走ってやがったか！！）

熊岡

「ふんぬっつ！！！！！！」

ドガツツツツ！！！！！！！！！！

東海林に負けないパワーダנקをぶち込む。

湘北ベンチ

「すっげーダークだ！！！！」

「神谷のパスもすげえ！！！！」

青空

「ドンキー！！」

如月

「す・・・すごい」

赤木

「まだまだ粗削りな二人だがな。こっちもおそろしい点取りコンビだ！！」

如月、ニコリと微笑みながら
「そうですね。」

熊岡

「東海林。まだまだこれからだ!!」

東海林

「こつでないとな」不適な笑みを浮かべる。

試合開始1分

湘北 4 - 5 京成

両チームの点取りコンビのゴールにより始まった。

#13 東京ベスト4

1Q1分経過

湘北 4 - 5 京成

序盤は互角の戦いから始まったが、京成の猛攻が始まるうとしていた。

吉川がボールを持っている。

駒坂（こいつの外は注意しないと）
距離を縮めてDFをする。

そのとき

キュッ

駒坂をあっという間に抜いた。

ヘルプに仲根が出る。

吉川、空いた坂本にパス。

日下部（うまいー！！）

シュパツ！！

坂本、シュートを沈める。

湘北 4 - 7 京成

湘北の攻撃

山岡、駒坂でボールを回す。熊岡がポストを取る。

「熊岡さん！！」山岡が熊岡へパスを出す。

パッシー！！！！！！

吉川がパスをステール。
そのままワンマン速攻へ

神谷が戻っている。

如月

「よく戻ったわ神谷！」

吉川

「一年坊の割には、いい選手だ」

なんと吉川は3Pラインでストップしシュートを放った。

神谷

「!!!!!!」

シュパツ!!!!!!

湘北 4 - 10 京成

日下部

「速攻でスリー打つなんて、どんだけ自信があるんや」

ローポストで東海林を背負いながらポストを取る熊岡。

今度はしっかりとパスが通る。

キュッ

素早いターンからシュートを放つ。

しかし

東海林

「甘いわー!!」

バツシイイ!!!!!!!!

東海林がブロック。

青空

「何やられてんだドンキー!!」

こぼれ球を仲根が拾い、またしてもシュートを狙うが

またしても東海林が飛ぶ。

バツシイイ!!!!!!

再びブロック。

如月

「二連続ブロックなんて・・・」

赤木も驚愕の表情を浮かべている。

シュパッ

山口がシュートを決める。

湘北 4 - 1 2 京成

そして . . .

青空

「おいコラア!!なにハゲゴリなんかやられてんだ!!」

如月

「静かに見なさい!!」

日下部

「確かに悪い流れやな」

東海林がバンクショットを放つ。

熊岡

「ぐっ!!!!」

バッチイイイ!!!!

熊岡の手が接触する。

が

バス!!!!

東海林が無理な体制からシュートを沈める。

ピーーーーー。

「赤4番（熊岡）ファール！！カウントワンスロー！！」

盛り上がる京成ベンチ

「ナイシュウ！東海林先輩！！」

熊岡

「くそ……」

「気にするな熊岡！」
声をかける駒坂

1Q残り1分

湘北 8 - 18 京成

京成の3年コンビ、東海林、吉川を中心に差を広げられていた。

湘北ベンチの石毛、沢田

「東京ベスト4の力はすごい……」

「強い……」

東海林のフリースローを放つ。

ガンッ

リングに嫌われる。

東海林

「くそ!!」

熊岡（相変わらずフリースローは下手だな）

如月

「リバウンドよ!」

バシィ!!

リバウンドを取ったのは神谷。

名倉

「高い!!」

日下部

「ナイスリバンや!」

神谷

「・・・いくぜ」

ダムッ!

神谷はドライブを始めた。

山口、坂本、脇屋

「！！！」

京成メンバーをどんどん抜いていく。

京成ベンチ

「なんて速いドライブだ！！」

そして、そのままドライブで持っていく。

だが、またしても吉川が戻っている。

石毛

「またあの7番だ」吉川

「すげえスピードだな。でもゴールはいれさせねえ」

しかし

キュッ

神谷は3Pラインで止まりスリーを放った。

吉川

「な!？」

シュパツ!!!

綺麗な弧を描き決まる。

湘北ベンチ

「うおー!!! ナイススリー!!!」

吉川（こいつ、さっきの俺がやったことをしてきやがった）

神谷が吉川に言い放つ。

「すぐ追いついてやるよ・・・」

「生意気な」吉川はニヤリと笑う。

熊岡

「ナイスだ神谷!」

神谷

「うす」

そして

ビーーーーー！！！！！！！！！！

1Q終了

湘北 11 - 18 京成

京成にリードを広げられ始めていたが、
神谷の相手の流れを止めるプレーで1Qが終わった。

名倉、手を叩きながら

「よーし！！いい出だしだ！！」

でもまだ油断するな！熊岡がもっとゴール下を攻めてくるはずだ！」

東海林

「わかってます。あいつはあんなもんじゃねえ」

吉川

「それにあの一年。なかなかできる奴だ」

湘北ベンチ

青空

「なに負けてんだドンキー！！俺が代わってやるつか！？」

熊岡

「黙れ」

赤木

「しかし大人しいんじゃないかねえか？」

お前は東海林に負けてないと思ってるんだが」

熊岡

「先生……」

青空

「ゴリラ対決、頑張って勝てや!!」

大丈夫! ドンキーの方がゴリラっぽいから!

だ! はっはっは!!」

熊岡

「ガキが!!」

ゴツン!!

青空、熊岡のゲンコツを喰らう。

神谷、日下部、如月

「馬鹿野郎……」

熊岡

「よーし!! 2Qいくぞ!!」

(確かに大人しすぎたな。見てる東海林!!)

2 Q 開始!!

14 動きのない展開

宮野

「おい！！早くしろ！試合もうやってるみたいだぞ！」

浩一

「てめえが寝坊するからいけねえんだからな」

高杉

「ゴメン。朝はどうも苦手で・・・」

浩一、宮野

「朝じゃなくてももう昼だろ！！」

体育館の前で三人組が口論している。

浩一が体育館に入り、得点掲示板に目をやる。

「お！頑張ってるじゃねえか」

続いて宮野、高杉も入る。

宮野

「相手は東京でも上位のところなんだろ？」

試合は2Q6分経過していた。

湘北 22 - 28 京成

2Q前半は差を広げられることもなければ、縮めることもない互角の戦いを繰り広げていた。

「熊岡!!」

駒坂からローポストの熊岡にパス

バス!!

熊岡、東海林を交わしきつちりとゴール下を沈める。

東海林

「さすがだな・・・」

湘北 24 - 28 京成

京成も追撃を許さない。

シュパツ!!

吉川がミドルを決める。

湘北 24 - 30 京成

湘北ベンチの石毛

「なかなか差を縮めさせてもらえない」

如月

「吉川さんのシュート成功率がすごいわね」

青空

「早く俺を出せ・・・」

高杉

「拓馬、また出れなくてストレス溜めてやがる」

宮野

「今回はさすがに出ることねえんじゃねえか？」

京成の攻撃

脇屋がドライブイン

DFの山岡が抜かれる。

青空

「コリア！やま！」

脇屋から坂本にパス

スパツ！！

シュートが決まる。

吉川

「ナイス坂本！！」

坂本

「おう！！」

青空

「だーゴリ！俺を出さねえか！！全然追い付かねえじゃねえか！」

「・・・」

無視する赤木

青空

「しかとかー！！」

如月

「黙って見てなさい！！」

青空を見て日下部

(さわがしい奴やな・・・)

「拓馬が怒られてるぞ」

笑っている高杉

浩一

「どうせ試合出たいとか言ってるんじゃないか」

パスッ！！

神谷がドライブからレイアップを決めていた。

湘北ベンチ

「やっぱりこいつはすげえ！本当に一年か!？」

如月

「頼りになるわね」

不満そうな青空

「俺は気にいらねー」

そんな青空を見て赤木

(まったくこいつは・・・)

湘北 26 - 32 京成

東海林がローポストでボールを持つ。

熊岡

「来い！！東海林！」

シュ

東海林が外にパスを出す。

パスを取った脇屋のスリー。

ガンッ！！

シュートが外れる。

しかし

パスッ！！

東海林がタップシュートを決める。

熊岡

「ちっ！！」

（やっぱり去年よりうまくなってやがる）

日下部

「京成はプレーに安定感があるな」

如月

「確かに・・・連携がしっかりとしているわ」

青空

「俺を出さねえからだ」

赤木（このままだとまた京成に流れが傾きそうだ。後輩はメンバーを変えてみるか）

・・・そして

ビーーーーー！！！！

2Qは何も動きのないまま終了。

湘北 40 - 46 京成

ここでハーフタイムにはいる。

湘北ベンチ

赤木

「前半はまずまずだな。やはり京成は東海林と吉川を中心に攻めてくる。」

駒坂

「確かに吉川にやられすぎた・・・」

赤木

「そこでだ、神谷。お前が駒坂と代わって吉川につけ!!」

「!!!??」

(一年の神谷が京成のエースに!?)

「できるな?」

神谷に問い掛ける赤木

神谷

「もちろん・・・」

無表情ながらも闘志が伝わってくる。

駒坂、神谷の背中をポンと叩く。

「頼んだぞ!神谷」

神谷

「うす」

青空

「てめえなんかやられちまえ。この根暗野郎が」

神谷

「うるせーこのサイヤ人」

青空

「なんだと!!」

如月

「また始まった・・・」

日下部

「なんで二人が仲悪いのかわからへん」

二人とも呆れている。

観客席から青空を見て宮野

「あいつ今度は神谷と喧嘩してやがる」

浩一

「公園で会ってから仲がわるいみたいだからな。あの二人は」

さらに湘北ベンチでは動きがあった。

赤木

「あと山岡と日下部、交代だ！」

日下部

「はい！！」（よっしゃ！！）

青空

「何！？俺より先にチビ助が！」

日下部

「まあ実力的には妥当やな」

青空

「！！！？？……お前殺す……」

京成ベンチ

名倉

「後半もこのままのメンバーでいくぞ！！
今年こそは全国に行くんだ！！この試合に勝って予選の弾みをつけるぞ！いいな！？」

「はい！！！！」

吉川

「東海林。どうだ？熊岡は」

東海林

「相変わらずパワーがなかなかある。本調子じゃないみたいだが」

吉川

「そうか。しかし今年の湘北はなかなかだぞ。あのルーキーおもしろえ奴だ」

東海林

「気になるのか？」

吉川がニコリ

「まあな。」

でも本音言えば、あのシューターと戦うのを楽しみにしてたんだけど、今日はいないみたいだ」

そして

ビーーーーー！！！！！！

ハーフタイム終了を告げるブザーがなる。

いよいよ3Q開始。

#15 チビ助投入

3Qが開始しようとしている。

湘北 40 - 46 京成

京成ベンチ

「湘北になんか小さいのが入って来たぞ！」

湘北は山岡と代わって日下部が入っていた。

18・日下部 167cm / 1年 / PG

日下部（今の内にぬかしておけや）

名倉

「あいつ一年か・・・試合出すということはそれだけの選手なんだから」

吉川

「またおもしろいのが出てきた」

ふて腐れてる青空

「どうせすぐやられるに決まってる」

如月

「アンタちゃんと味方の応援しなさいよ」

湘北のスロインから開始される。

スローは日下部へ渡る。

人差し指を立てて日下部

「ほな、一本いきましょ」

D Fの脇屋（小さいからスピードがありそうだな）

ダムッ

日下部のドライブで脇屋をあっさりの抜く。

そしてレイアップを放つ。

が

東海林がブロックに飛ぶ。

東海林

「簡単に打たせん!!」

スッ

日下部はノーマークの熊岡へパス

バスッ

湘北 42 - 46 京成

日下部

「すんまへん。もともと打つ気なんてありません」

東海林

「フン。生意気なガキだな」

不満の青空

「目立ちやがって」

赤木

「やはりスピードだけなら神谷以上だな」

京成の攻撃

神谷が赤木の指示通りに吉川につく。

吉川

「お前がつくのか。よろしくな」

名倉

「あの一年を吉川に!!」

如月

「神谷がどこまで抑えられるか見物だわ」

青空

「フン!! やられちまえ!!」

脇屋がボールを持っている。

キュキュッ

神谷が簡単に吉川を空かせない。

吉川（こいつ!!）

脇屋（吉川さんをフェイスガードか・・・）

そのとき

パシィ!!!!!!

日下部が脇屋からボールをスティール。

脇屋

「!?!?!?」

ダツ!?!!

神谷が前を走る。

京成ベンチ

「速い!?!?!?!」

名倉

「!?!?!?!」

日下部が3Pライン付近からルーパスを出す。

ドガツツツツツ!?!?!?!?!!

神谷が直接リングにぶち込んだ。

湘北ベンチ

「アリウープをやりやがった」

如月

「すごいーい」

「……！！！！」青空は驚いた表情で見つめている。

赤木

「よし！！」拳を握り喜ぶ。

名倉

「！！！！」

名倉を含め京成ベンチ全員愕然としている。

「ナイスランヤ！！」日下部、神谷に手を差し出す。

神谷

「おう……」

パシィ！

二人はハイタッチを交わす。

神谷のアリウープを見て宮野

「すげえな・・・神谷もあのチビ助も」

高杉

「かっこいいな」

浩一

「これでさらに拓馬のストレスが溜まるな」

吉川

「面白れえ！！燃えて来た！」

東海林

「フン。スクリーンかけてやるからどんどんスリー打てよ！」

3Q残り9分

湘北 44 - 46 京成

一年のガード目下部の投入により、1ゴール差まで追いついた湘北。しかし、これから京成の一人の選手の闘志が燃えはじめていた。

#15 チビ助投入(後書き)

試合書くの大変です。楽しいけど。

1 6 N o . 7

3 Q 残り 9 分

湘北 4 4 - 4 6 京成

熊岡

「1ゴール差だ！追いつくぞ！！」

「オウ！！！！」

京成の攻撃

神谷が吉川にピッタリとつく。

吉川

「お前ら面白いルーキーだな」

神谷

「.....」

吉川

「でもまだまだだ」

そう言い放つと0度から吉川は逆サイドへ走り出した。

神谷もそれに反応。

すると

山口がスクリーンに立っていた。

神谷はスクリーンをすり抜け、吉川を離さない。

しかし

ドンッ

神谷は何かに止められた。

さらに東海林がスクリーンに立っていたのだ。

吉川がノーマークでもらいスリーを決める。

湘北 44 - 49 京成

赤木

「やはり4人3年ということもあって、連携もすっかりしてる」

青空

「かっかっか。神谷の野郎、ハゲゴリに負けやがったぜ」

湘北、日下部からローポストの熊岡へ

ダムッ

ドリブルしながら背中で押し込む。

東海林（やっぱりすごい力だ！！）

キュッ

熊岡、東海林をターンで交わす。

坂本がヘルプに入った。

熊岡から仲根へパス。

その瞬間

パシィ！！

吉川がスティール。

脇屋がボールをもらい速攻へ

「簡単に決めさせないで！」
日下部が追いつく。

脇屋（こころし、やっぱり早い……！）

如月

「よく追いついた、日下部」

青空

「動きは速いんだよな。チビなだけあって」

脇屋が後ろにパスを出した。

日下部

「なに!？」

パスの行く先は3Pラインの吉川。

ザシュ!!!!

京成ベンチ

「よっしゃあ!!吉川さん二連続!!」

「やっぱり吉川さんのスリーはすごい!!」

名倉

「そろそろエンジンがかかってきたかな」

名倉の言つよつに、吉川のシュートを中心に点を取りり始めていた。

ザシュー！！

湘北ベンチ

「またまた7番スリーかよ」

「あの人外してねえんじゃねえか!？」

青空がニヤリ

「カミヤがやられてやがる」

如月

「いや神谷はしっかりとついてるわ。でもあの人のシュートがすごい確率なのと、チームでノーマークにしてるわ。」

赤木

「スクリーンプレイがしっかりとしてる」さらに京成の怒涛の攻撃。

シュパツ！！

山口のミドルが決まる。

吉川から少しずつ京成の攻撃のリズムが良くなっていた。

バス!!

熊岡がゴール下を沈める。

日下部

「ナイシュウ！キャプテン！」（流れが悪くてもきっちり決めてくれる。さすがや）

熊岡（流れが悪すぎる。やはり吉川か）

3Q残り1分

湘北 52 - 62 京成

湘北は熊岡のゴール下で何とか対抗するも、京成のチーム力の差から徐々に広げられていた。

またしても吉川をノーマークにするためのスクリーンプレイをする。

神谷

「ワンパターンめ・・・」

スクリーンを交わし吉川にくっつく。

湘北ベンチ

「ナイスDF!!」

如月

「それにしても、吉川さんの体力はすごいわ」

赤木

「常に走り回ってるからな」

名倉

「吉川は確かにパワーもスピードもセンスもないかもしれない。でもあいつは人一倍シュート練習と走り込みをやってきたんだ。」

吉川は神谷を振り切るために走り回る。

神谷

「こいつ……よく走る……」

ドンッ

またしても神谷が山口のスクリーンに引っ掛かる。

神谷

「ちっ・・・」

ミドルレンジの吉川にパスが渡る。

「打たせん!!」熊岡がヘルプに出る。

吉川から東海林へ

東海林

「どりゃあああ!!!!!!!!」

ドガツツツツツ!!!!!!!!!!

東海林のボースハンドダク

名倉

「外の吉川がいるからこそ、中の東海林が活きる。最高のコンビだ」

そして・・・

3Q終了

湘北 52 - 64 京成

吉川を活かすチームプレイにより、差が12点まで開いた。

湘北ベンチ

青空

「はっはっはー。雑魚だなお前。ざまあみるー!」

神谷

「うるせー・・・」

青空

「凶星だろお前!」

ゴリ!!--このままカミヤを出していると負けるぞ!!--」

赤木

「たしかに吉川をノーマークにするチームの動きが完璧だ。
神谷には荷が重かったかもしれないな」

神谷

「そんなことないっすよ・・・次こそ止めます」

日下部

「大和・・・」

(自分から話すなんてめずらしいで。よほど悔しかったんやな)

赤木がニコリ

「じゃあ任せたぞ！！神谷！」

青空

「フン！！またやられちまえ」

如月

「そんなこと言わない！！」

神谷、京成ベンチの吉川に目を向ける。

(野郎・・・次こそ抑えてやるぜ)

一方で京成ベンチ。

名倉

「吉川、調子いいじゃないか!」

吉川

「絶対調ですよ」

東海林

「リバウンドは俺達に任せろ!どんどん打ってけ!」

名倉（吉川はいい相手ほど燃える。きつと15番もそれほどの選手なんだな。

しかしあの選手、誰かに似てるんだよな・・・）

いよいよ4Qが開始!!

#17 ゴール下の差

4Q開始

コート上には両チームとも3Qと変わらないメンバーがいる。

高杉

「拓馬は今日出れないな。てかバスケの試合ってこんなすごいものだったんだな!!」

浩一

「確かに見てて面白いもんだな」

宮野

「拓馬には似合わない舞台だぜ」

神谷が吉川に着く。

吉川

「またお前か。お前は俺達に勝てねえよ」

神谷

「しるせー」

京成は外でボールを回す。

そして吉川にボールが渡る。

如月

「神谷と吉川さんの1対1だわ!!」

青空

「負ける・・・」

吉川（まともによつたら負けるな。運動能力ではあいつの方が上だ）

ダムッ!!

吉川がドライブ。

神谷がついていく。

しかし

ドンッ！！

東海林のスクリーンに引っ掛かる。

吉川、熊岡のヘルプが来るまえにシュートを放つ。

名倉

「さすがだ。あの二人の連携は完璧だ」

そのとき

バツシイイ！！！！！！

後ろからシュートが叩かれた。

吉川

「！？！？」

ブロックをしたのは神谷だった。

神谷

「まだまだこれからだ」

吉川

「野郎・・・」

駒坂がボールを拾う。

パスッ

速攻で日下部が決める。

湘北 54 - 64 京成

ここから徐々に神谷が吉川を抑え始める。

京成ベンチ

「吉川さんが抑えられ始めてる」

名倉

「やはりあの15番はただ者ではないな」

吉川

(こいつ、さっきより動きがよくなってやがる)

神谷

(負けねえ……)

如月

「神谷の動き良くなってますね」

赤木

「負けん気が動きを良くしたか」

青空

「俺の出番はまだかよ」

ガンッ

吉川のシュートが外れる。

リバウンドを熊岡が取る。

東海林

「ちっ！！」

湘北ベンチ

「熊岡先輩、ナイスリバン！！」

如月

「熊岡先輩、あの東海林さんに互角の戦いをしてますね」

赤木

「ああ」

(だけど、リバウンドを取れているのは熊岡だけだ)

赤木には引っ掛かっていることがあった。

東京の名センター東海林昭夫と互角に熊岡が戦っていたが、他のゴール下の差で明らかに京成が上だったのだ。

特にDフリバウンドでは神谷が吉川につくため外に出たことにより、負けていた。

そのことにより湘北が京成に差は縮めたものの、なかなか追いつけなかった。

4Q残り5分

湘北 68 - 74 京成

バシィ

山口がりバウンドを取る。

仲根

「くそ・・・」

日下部（ゴール下がなんとか熊岡さんのおかげで守れてるけど、リバウンドが取れへん）

名倉

「東海林と熊岡が互角だが、他のゴール下はうちが上だ」

如月

「リバウンドが取れない」

赤木

「熊岡が頑張ってるんだが・・・」

青空

「リバウンド……」

そして

赤木

「青空!!」

青空

「!?!」

赤木

「仲根と交代だ!!」

湘北ベンチのみんなが驚いている。

「え!?青空!?!」

青空

「わーはっはー!!俺様の出番かー!!」

赤木

「お前やることわかってるな!!
余計なことをしたらすぐ下げる」

青空

「任せろ!!」

心配そうな如月

「本当に大丈夫かしら」

40残り4分

いよいよ青空拓馬登場。

#18 青空参上

4Q残り4分

湘北 68 - 74 京成

「ビーーーーー」

「交代 赤」

青空

「だーはっはっはー!!青空拓馬参上!!」

日下部・熊岡

「は!?!?」

駒坂・仲根

「え!?!?」

神谷

「・・・!?!?」

コート上の湘北メンバーがこの交代に驚く。

宮野

「拓馬出るのか!?!」

高杉

「何かの間違いじゃないか!?!」

浩一も驚愕の表情。

名倉

「!?!」

「何だあいつ!?!」

「金髪だ……!?!」

京成ベンチは青空の態度と風貌に驚いている。

東海林

「!?!?!」

吉川

「変なやつが来た……」

日下部

「お前何か間違いやないんか!？」

青空

「お前らが情けないから、俺様が投入されたわけだ」

神谷

「馬鹿か・・・」

青空

「ドンキー!!!俺様の必殺技を見せる時が来たぜ!!!」

「!!!!!!!」

熊岡、赤木に目をやる。

赤木は無言で頷く。

熊岡

「青空!練習したことをしっかりとやるんだ!決して無理なことはするな!!!」

青空

「おつよ!!!」

日下部・神谷

(信用できねえ・・・)

20・青空 190cm / 1年 / PF

青空、仲根と交代。

駒坂のスローインからスタート。

日下部がボールを運ぶ。

青空

「チビ助！！ボールくれ！！」

日下部

「うるさい奴やな」

そのとき神谷がうまく動きノーマークになる。

日下部すかさず神谷にパス。

青空

「ああ！！！！」

神谷難無くシュートを決める。

湘北 70 - 74 京成

青空

「チビ助ー！！なぜ俺にパスしないでカミヤにするんだー！！」

日下部

「どう見ても大和が空いてたやろ」

山口が脇屋に話しかける。

「俺に攻めさせてくれ。あの金髪がどんな野郎か気になる」

脇屋

「わかりました」

そして山口にパスが入る。

青空との1対1の体制。

山口

（お手並み拝見だ・・・）

青空

（俺様なら簡単に取れるぜ）

「せい！・・・！」

ビシィー!!!

山口

「痛てっ!!」

青空の手刀が山口の腕に炸裂した。

「ピューーーーー!!!」

「ファール!20番」

日下部・神谷

「……」

ため息をつきながら如月

「馬鹿だわ……」

青空

「だーーーーやっちゃまったー!!!」

熊岡

「何やってんだお前は!!!」

ゴツン!!!

ゲンゴツが炸裂。

青空

「痛てえ・・・」

熊岡

「無理なことすんなって言っただろうが!!」

赤木

「コラア青空!!」

ビクッ!!

恐る恐る赤木の方を見る青空。

赤木

「また同じプレイをしたら、すぐ下げるぞ!!」

青空

「わ・・・わかったよ」

(くそ・・・もう二度と馬鹿できねえ。俺としたことが・・・)

東海林

「別に対したことなさそうだな」

山口

「ああ。こんな奴出すなんて、湘北のミスだな」

名倉

（しかし20番もあの15番と同じように、誰かに似てる）

京成の攻撃が再開。

吉川のスリー。

神谷が反応するが届かない。

「ちっ……」

吉川

（これは外れた）

「リバウンド頼む!!」

青空

「!!!」

……練習したことをしっかりとやるんだ！

ガンッ！！

シュートが落ちる。

「リバーーン！！」

「だりゃあああ！！！！」

バツシイイイ！！！！

リバウンドを取ったのは青空。

東海林・山口

「！！！！！！」

青空

「よっしやああ！！！！！！」

赤木

「よーし！！」

湘北ベンチ

「ナイスリバンだ青空！！」

吉川

「すごい飛ぶな！！」

名倉

「東海林よりも飛んでいたぞ！！」

青空

「さすが俺様！！」

4Q残り3分30秒

湘北 70 - 74 京成

青空の投入から湘北逆転なるか!?

19 救世主

40残り3分30秒

青空

「さすが俺様!!」

高杉

「おおー!!あいつ完璧に調子に乗ってるぞ!!」

宮野

「あんなのまぐれに決まってる!!」

浩一

「でも・・・高かったよな・・・拓馬のジャンプ!」

熊岡

「ふん!!」

バス!!

熊岡から東海林からパワープレイでゴール下を決める。

湘北 72 - 74 京成

湘北ベンチ

「これで1ゴール差だー！ー！ー！」

青空

「ナイスだドンキーー！！俺のリバウンドのおかげだな！」

熊岡、笑みを浮かべながら

「ふ・・・生意気な」

京成の攻撃

吉川

「簡単に逆転されてたまるかよ！」

ビッ！

神谷

「!?!」

吉川、クイックモーションでスリーを放つ。

ザシュ!!!!

湘北 72 - 77 京成

京成ベンチ

「さすが吉川さん!!!!ここぞの時に頼りになる!!!!」

東海林

「ナイシュウ!」

吉川

「外は俺に任せろ!熊岡はお前に任せたらな!!!!」

「あいつら……」

二人のやり取りを見て、名倉は微笑んでいた。

青空

「カミヤ!! てめえ何やってんだ!!
役に立たねえから、さっさと下がれ!!」

神谷

「・・・黙ってる」

「もう・・・試合中なのにまたあの二人喧嘩してる・・・」 呆れる
如月

腕を組みながら赤木

「ったく・・・」

湘北の攻撃

日下部がスリーを放った。

ガンツ!!

日下部

「くそ・・・」

脇屋

「スクリーンアウトってのよくわかんねえんだよ!!
それにドンキーの野郎、俺を押し込みやがつて!!
ゴリラだからルールなんてわかりやしねえ!!」

熊岡

「ガキが!!」

ゴツン!!

熊岡のゲンコツが飛ぶ。

涙目で青空

「いってえ・・・」

赤木

「押し込むのは反則じゃない。これがスクリーンアウトだ!!
ゴール下は戦場だ!!
多少の接触にも耐えられないとやっていけないぞ!!」

青空、熊岡に指をさしながら

「こんなゴリラに押し込まれて勝てるか!!」

熊岡

「なんだと!!」

赤木

「ほう・・・お前ならリバウンドを覚えて、湘北の救世主になってくれると思ったんだがな・・・」

青空

「救世主・・・」

（いい響きだ・・・）

「それならしょうがねえ！リバウンド覚えてやるよ！！」

熊岡

（なんて単純な奴だ・・・）

青空

「『リバウンドを制する者は試合を制す』だ！！ドンキーかかって来い！！」

熊岡

「ふん！！生意気な」

青空

（スクリーンアウト・・・）

ガッ

青空が山口をしっかりとスクリーンアウトで抑える。

そして

バシィ！！！！

青空

「よっしゃああ！！！！」

赤木

「よーし、そうだ！！！！」

如月

「すごい！！京成のゴール下からリバウンドを取るなんて！！！！」

「ナイスリバンだ！青空！！」

湘北ベンチが盛り上がる。

神谷

「戻せ！！！！」

青空

「!!!」

スッ

青空がパスを出す。

パスは駒坂へ渡る。

シュパッ!!!

ミドルシュートが決まる。

湘北 74 - 77 京成

駒坂

「ナイスパスだ青空」

青空

「おうよ！任せろコマっち!!!」
(神谷にはパスをわたさん!!!)

山岡

「青空のやつ、ナイスパスだったな」

石毛

「バスケットを始めたばかりとは思えない」

二人の会話を見て赤木

(どうせ・・・神谷にパスを渡す気がないだけだと思っが・・・)

青空の投入により、支配されていたリバウンドを取れるようになりリズムを取り戻した湘北だったが、

京成も東海林のゴール下、吉川の外角シュートを中心に追撃を許さない。

そして

4Q残り1分

湘北 78 - 82 湘北

試合は終盤へ

#20 あの二人

4Q残り1分

湘北 78 - 82 京成

如月

「リズムは悪くないのに・・・なかなか逆転できない」

赤木

「さすが東京の強豪校だ」

京成の攻撃

吉川がトップでボールを持っている。

DFについている神谷

（・・・止めてやる!!）

ダムッ

神谷

「!!!!」

神谷が難無く抜かれる。

ザシユ!!

吉川がミドルを決める。

湘北 78 - 84 京成

青空

「簡単に抜かれてんだこの根暗野郎!!」

神谷

「・・・黙れ」

(くそ・・・)

吉川

(あの一年坊の反応遅くなってやがる)

名倉

「吉川をあれだけ抑えたのはすごいがやはり一年。体力がまだまだだ」

名倉の言うことは的確だった。
吉川を徹底的につくことで抑えていた神谷だったが、経験、体力の差からか疲れが出始めていた。

如月

「神谷・・・相当疲れているわ」

赤木（やはりあいつには荷が重かったか・・・）

湘北の攻撃

日下部がボールをキープ。

青空が声をあげる。

「チビ助！！ヘイヘイ！！」

日下部

「まったく・・・うるさい奴やな・・・」

日下部からハイポストの青空にボールが入る。

DFにつく山口

(この金髪、リバウンド以外はきっと素人だ。ここでもらっても何もできまい)

ダムッ

青空がドリブルイン。

山口

「なに!?!」

「打たせん!!」

東海林がヘルプに出る。

しかし

スッ

ノーマークの熊岡にパスを出す。

熊岡、ゴール下を決める。

湘北 80 - 84 京成

青空

「さすが俺様！ドンキーへのナイスパスだな！」

高杉

「今は上手いな・・・」

宮野

「すごいけど・・・」

浩一

「たぶんまぐれだな」

如月

「ドリブルしかできないのが逆にいい結果を生みましたね・・・」

赤木

「ああ。あそこからのシュートは教えてないからな」

神谷

「今のはまぐれだ・・・無理なプレーをすんじゃねえ」

青空

「おおつひがんでるのか？根暗！」

神谷

「うるせー」

東海林

（こいつら本当に仲が悪いんだな・・・）

京成ボール

またしても吉川がボールをもらっ。吉川

「もう疲れたみたいだな一年坊」

神谷

「疲れてねー・・・」

吉川

「まあよくやったよお前は」

ダムッ

神谷、再びあっさり抜かれる。

如月

「足がついていってない!!」

吉川がストップしミドルを放つ。

しかし

バツシイイイイ!!!!!!

吉川のシュートが叩かれた。

吉川

「!?!?!?」

ブロックしたのは

青空

湘北ベンチ

「すごいジャンプだ青空!!」

如月・赤木

「・・・!!」

青空

「何やってんだ根暗!! 疲れてんなら下げれ!!」

神谷

「んだと?・・・」

こぼれ球を脇屋が拾い、すぐに山口へパス。

青空の1対1の体制。

青空

「抜かせん!!」

山口がシュートモーションへ。

「とっ!」

青空が反応して飛ぶ。

しかし山口はドライブへ。

熊岡

「ばかもーん！！単純なフェイクに引つ掛かるなー！！」

山口がレイアップを放つ。

しかしまたしても

バツシイイイ！！！！！

山口のシュートを次は神谷がブロック。

ルーズボール争いに熊岡、東海林が飛び込む。

熊岡・東海林

「うおおおおおお」

ボールを取ったのは熊岡。

湘北ベンチ

「おーキャプテン!!」

赤木

「よし!!!!」

如月

「すごーい!!」

「キャプテン!!」

日下部がボールを貰いに行く。

熊岡から日下部へボールが渡り、

そしてワンパスで神谷へ

ドガツツツツ!!!!!!!!

神谷がワンハンドダークを決める。

神谷

「まだ疲れちゃいねえ……てめえが下がれ、この素人が……」

青空

「なんだよ！さっきまでへ口へ口だった野郎が」

湘北ベンチ

「おおー！すげえぞー！！」

如月

「あの二人が流れを呼び込んでる……」

微笑む赤木

（やはりあの二人は昔のあいつらに似てる。
名倉よ……お前も気づいているだろ??）

名倉

（あの一年コンビ、恐ろしいものがある。
高校時代に全国で戦ったあいつらを見てるみたいだ……昔の湘
北高校にいた……桜木花道と流川楓に!!!）

4Q残り30秒

湘北 82 - 84 京成

#21 船出

4Q残り30秒

湘北 82 - 84 京成

「おらぁー！！一本止めて逆転するぞ！！」
熊岡がコート上で叫ぶ。

青空

「おつよー！ドンキーー！！」

赤木が指示を出す。

「残り時間が少ないんだ！！当たれ！！！！」

日下部がボールを持っている脇屋にあたる。

（絶対に止める！！）

脇屋（こいつ・・・ディフェンスもなかなかつめえ！！）

脇屋がなかなか運べない。

湘北ベンチ

「ナイスディフェンスだ日下部!!」

如月

「とつて!!」

吉川がボールをもらいに来る。

「渡せ!!」

脇屋から吉川へボールが渡る。

そしてそのまま運ぶ。

しかし神谷も気迫のディフェンス。

「打たせねえ!!」

吉川（こいつ・・・疲れてたんじゃねえのか!!）

ダムツ!!

吉川、うまく神谷を抜く。

京成ベンチ

「吉川さんうまい!!」

青空

「ばかもーん!!」

吉川シュートモーションへ

だが神谷が反応して飛んでいた。

吉川（こいつ!!）

スッ

吉川、シュートを打たずにパスを出した。

神谷

「!?!?!」

ボールはゴール下の東海林へ

熊岡

「勝負だ！東海林！！」

東海林、パワープレイで押し込む。

東海林（なかなか押し込めねえ）

脇屋

「もうすぐ24秒です！」

東海林、強引にシュートを放つ。

（入ってくれ！！）

シュートは

ガンッ

リングに嫌われた。

赤木・名倉

「リバウンドだ！！」

バシィ！！！！

リバウンドを取ったのは熊岡。

赤木

「速攻だ！！！」

ボールは日下部、そして神谷へ

神谷（逆転する！！）

残り6秒、神谷が3Pラインでシュートの体制。

しかし吉川がチェックしている。

（打たせねえ・・・！！）

神谷の横に誰かが走ってきた。

「パスしろ！！」

神谷がパス。

パスした相手は青空。

青空

「ナイスパス神谷!!」

て…てめえかよ…
神谷

残り3秒

青空、ゴールへドライブ。

青空（ゴリからぶち込んだ時を思い出すんだ!!）

赤木

「青空!!」

如月

「…!!」

浩一・宮野・高杉

「いけえ拓馬——！！！」

叫びながら飛ぶ青空

「おりゃあああ——！！！」

ドガアアアア——！！！！

青空のワンハンドダックが炸裂した。

それと同時に

ビ——！！！！！！！！！！

試合終了のブザーがなった。

そして

湘北 84 - 84 京成

湘北高校新世代の船出の試合は引き分けという結果で幕を閉じる
ことになった。

#21 船出(後書き)

更新遅くなりました!!

#22 夢の舞台へ

東京の強豪校、京成高校との練習試合。

結果は引き分けとなった。

――試合後

熊岡

「ひとまず勝負は全国までおあずけだな！
今度こそ勝ってやる！」

東海林

「はは、楽しみにしてるぞ！その前にお互いに県大会を勝ち抜かないとな！」

吉川

「神奈川は厳しいんじゃないか!？」

熊岡

「吉川!!！」

東海林

「確かに・・・全国常連校の海南、陵南、そして翔陽か・・・激戦区だな」

熊岡

「どこが相手だろうと関係ねえ！！全部倒して湘北が全国に行く！！」

微笑みながら東海林

「ほほう・・・うちも負けてられないな」

吉川

「そういえばあのひよる長いシューターは今日いなかったみたいだけど、どうしたんだ？？」

マッチアップするの楽しみにしてたんだけど」

熊岡

「アラタか・・・いろいろとあってな・・・予選にも間に合うか微妙だな」

吉川

「そうなのか・・・でもいい戦力が入ってるじゃねえか！！怪物ルーキーにあのちっこいガード、それにあの金髪のやつも一年だろ！？」

熊岡

「青空か・・・あいつはもっと鍛えてやらないと・・・」

一方で赤木と名倉。

会釈しながら名倉

「今日は本当にありがとうございました」

赤木

「こちらこそありがとな。お互い行けるといいな。全国に」

名倉

「はい！！今度は全国で戦いましょう！！」

また違うところでは・・・

高笑いしながら青空

「だーはっはっはー！俺様のおかげでなんとか負けずにすんだな！！」

ボソツと神谷

「俺がスリーを決めてれば勝てた」

青空

「あ！？ひがんでるのか！？パス出したのはお前だぞ！！」

神谷

「勝たないと意味ねーんだサイヤ人」

青空

「なんだとお！？」

二人のやり取りを見て日下部

「何で二人はいつもああなるんや・・・」

・・・そして

京成高校が一行に並んでいる。

「ありがとうございました！！！！！！！！！！」

京成全員の声が体育館にこだました。

日下部

「京成高校・・・連携がすっかりとしてる強いところやったな」

青空

「あのハゲゴリもたいしたことなかったな！」

日下部

「お前が言つなや!!」

神谷

（俺はあのシューターを完璧に止められなかった・・・もっと強くなる・・・日本一になるために・・・）
静かに闘志を燃やす。

熊岡

（東海林よ・・・絶対に上がってこい!!
俺も絶対に負けん!!
全国に行くんだ!!）

赤木

（今回の練習試合でいろいろと課題が出たな。あの三人がもっと鍛えないと!!
そうすればきつと今年こそ全国に行ける!!
あとはあいつが間に合えば・・・）

それぞれの目標をもち、練習試合を終えることになる。

そして

一ヶ月後には全国への切符を賭けた県予選が始まるのである。

しかし

その前に一つの出来事が起こることになる。

#22 夢の舞台へ（後書き）

とりあえずこれで京成戦終了です！！これからも頑張って書きますのでよろしくお願いします。

#23 アラタくん

・・・京成高校との練習試合から数日後

早朝

湘北高校体育館

青空

「おい！！浩一！早くこい！」

浩一

「ったく・・・朝っぱらから元気すぎるんだよ・・・。
何で朝練なんか・・・」

青空

「この前の練習試合、あまり出れなかったからな。あのゴリに認め
てもらわねえと」

浩一

「付き合っつてやるのは今日だけだぞ・・・」

そのとき

ダムッ

体育館の中からボールをつく音が聞こえた。

青空

「ん！？誰かいるのか??

秘密特訓しようとしたのに!!」

浩一

「この前の試合にはいなかったよなあの人」

体育館の中には青空でさえ見たことのない人がいた。

見た目はひよろつとした体型で長髪の男だ。

その男は3Pラインに立っている。

そして

そこからシュートを放った。

青空

「！！！！」

シュパッ

その男のシュートは青空が見たなかで一番綺麗なフォームから放たれていた。

男は一息つきながら

「やっぱりこの体育館でシュートを打てるのはいいな。」

青空

「なんだ！？あのひよる長」

男が二人に気づいた。

「ん！？君らここのバスケット部の人！？」

浩一

「あ。俺は違うんだ。こいつがバスケット部で、ちょっと付き合わされてね」

青空に指を指しながら説明する。

今度は男が青空を指しながら
「あ！その金髪・・・」

青空

「！！！！」

慌てる浩一

(髪のことを触れたらまずい！！！！)

青空

「てめえ！！！！！」

「青空拓馬君だっけ？」

男が青空を遮るように話した。

青空

「そつだ！文句あるか！！！」

浩一

「いや・・・文句はないと思うけど」

男

「なんかすごい一年達が入ったって聞いてね。
君がその一人かぁ・・・」

青空

(すごい一年・・・)

「ほほう。君はわかるやつみたいだな」

呆れる浩一

(乗せられやすいんだよな・・・こいつは)

男

「この前の練習試合は惜しかったらしいね」

青空

「まあ俺様のダンクがなければ負けてたな」

浩一

(まあ勝ってもいないけどな)

青空

「君はなんて名前なんだ??」

男

「あ！自己紹介まだだったね。
俺は新富美夫。湘北高校2年3組だ」

青空

「ほほう。じゃあ俺様の先輩にあたる訳だな」

浩一

「なんでえらそうに言っただよ」

そのとき

「おいアラター！！赤木んどこ挨拶しに行くぞ！！」
体育館の外から男が叫んだ。

新

「はい！！今行きます！

じゃあね。拓馬君」

青空

「おお！またな！」

新は男と一緒に体育館を出ていった。

青空

「やっと俺様が認めるやつが現れたか」

「またも呆れる浩」

「何言ってるんだお前？」

・・・そして

湘北高校廊下

新

「今日からやっここでバスケットできるのか・・・
本当に今までありがとうございました」

男

「完治したが、また同じように怪我すんじゃないぞ！！
また午後の練習のとき行くから」

新

「はい」

男

「そつえばお前が話してたあの髪が派手なやつ誰だ??」

新

「ああ、バスケット部の新入部員らしいですよ」

男

「そうか」

(しかしあの風貌・・・あの馬鹿みたいだな)

新といた男は短髪で右の口下に傷痕を持っていた。

#24 ひとつ

・・・青空と新が会った日の放課後

湘北高校体育館

熊岡

「集合！！！！」

みんなが熊岡のもとへ集まる。

熊岡

「みんなも知ってると思うが、今日の練習から新が復帰することになった。」

新！！みんなに挨拶しろ」

新

「はい。」

新富美夫、今日から怪我から復帰し練習できることになりました。みなさん長い間迷惑をおかけしました。またよろしくお願いします」

パチパチパチパチ

全員が新を拍手で迎える。

駒坂

「よく戻ってくれたな新！」

山岡

「おかえり！」

如月

「おかえり！新くん！！」

神谷

「……」

青空

「俺の認めた男だからな」

日下部

「何を言っとんねんお前」

新富美夫

湘北高校バスケット部現在2年

彼は去年の秋に大怪我を負い戦列から離れていた。

赤木の知り合いであるトレーナーのもとでリハビリ、練習を行っていた。

そして、予選まで間に合うか微妙とされていたが、無事に今日から復帰することができたのである。

笑いながら青空

「かっかっか！ー！復帰できて良かったな！アラタくん！」

神谷

「えらそーに」

新

「ありがとう。拓馬君」

青空

「まあわからないことがあったら聞くんだな！この同点 Dank を決めた俺様に」

日下部

「アホかお前！」

熊岡

「完全に調子のとってやがるな」

神谷

「馬鹿野郎……」

新

「そうだね……でも拓馬君。俺はひとつ誰にも負けない自信のあることがひとつある」

新はボールを手に取り、スリートを放った。

青空

「ぬ……!」

神谷・日下部

「……!」

シュパッ

ボールは綺麗にネットを通過した。

新

「シュートに関しては誰にも負けない」

日下部

（それにしても、なんて綺麗なシュートフォームや）

神谷

「……」

熊岡

（やはり相変わらず綺麗なシュートを打つな。予選に間に合ってくれてよかった）

青空

「やるなーアラタくん」

呆れる如月

「さっきから本当にえらそっね」

熊岡

「よーし練習はじめるぞー……」

青空

「よしやー……」

熊岡

「湘北——ファイ!!!!」

「おお——!!!!」

こうして新を加え練習がスタートした。

・湘北高校職員室前

赤木

「よし!今日も部活行ってくるか!」

「赤木!!」

職員室の前には朝に新といた男がいた。

赤木

「おお三井か。新を見に来たのか?」

男

「まあな。一応、初日だけは大丈夫か見とこうと思って」

三井寿

現スポーツトレーナー
湘北バスケット出身

赤木

「そうか」

三井

「それに今の湘北がどんなものか見てみたいしな」

赤木

「それなら今から体育館行くから、ついて来ればいい」

三井

「ああ」

二人は体育館に向かって歩き始めた。

赤木

「新を間に合わせてくれてありがとな」

三井

「いや、あいつもそのために頑張ってたみたいだからな。俺はそれをサポートしただけだ。
そういえば今の湘北はどうなんだ？」

赤木

「今のか・・・ちょうど10年前に俺達が全国行ったときあっただろ？」

三井

「ああ、山王に勝ったときか。懐かしいな」

赤木

「そのときにそっくりなんだ!!」

#25 炎の男

湘北高校体育館

熊岡

「おらぁ足動かせー！！！！」

新が復帰して最初の練習が行われている。

三井

「県予選が近いだけあってみんな張り切ってるな」

赤木

「まあな。そうしてもらわないと困る」

シュパッ

新がスリーを決めた。

熊岡

「よし！ナイシュウだ新！」

新

「はい！」

駒坂

「しばらく戦列から離れてても関係ないな」

青空

「コマツチ。あいつは俺が認めた男だからな」

日下部

「だからなんで上目線なんや！！」

赤木

「あいつはフォームといい、プレイスタイルといいお前そっくりだな。三井よ」

三井

「そうか？」

「まあ多少のことは昔あいつに教えたけどな」

シュパッ

神谷がシュートを決める。

青空

「ぬ！・・・神谷め」

三井

「あいつなかなかやるな！まるで流川みたいだな」

赤木

「そう思うつか。」

さらにお前が驚きそうな奴がいるぞ」

三井

「ああわかるぜ。あいつだろ」

三井はある男を指さした。

バシィィィィ！！！！！

青空がリバウンドを取る。

如月

「ナイスリバン！青空拓馬！！」

青空

「このリバウンドの鬼、青空拓馬にお任せください葵さん！」

如月

「何よ・・・そのリバウンドの鬼って」

日下部

「アホやな」

青空を見て三井

「あの風貌に態度、ジャンプ力までそっくりだぜ」

赤木

「やはりわかってたか」

日下部

「速攻や!!」

青空が先頭を走る。

「チビ助〜!パ〜ス!!」

日下部

「うっさい奴やな!!」

日下部から青空にパスが通る。

青空レイアップを放つ。

青空

「くらえ!レイアップシュート!!」

ガンッ!!

強くボードに当たり外れた。

青空

「だ〜!!俺としたことが〜!!」

日下部

「何やっとなねんアホ!!」

青空を見て三井

「あいつ素人なのか？」

赤木

「まあそんな感じだ」

「レイアップは力を抜いて打たねえとダメだぞ!!」三井がいきなり青空に激を飛ばした。

三井の方を見る青空

「ぬ!？」

赤木

「三井・・・!？」

三井が青空の方に歩み寄りながら
「置いてくるように打たないと」

青空

「お前は朝いた・・・」

「三井さんだ」

新が会話に入る。

「俺が怪我している間、世話してくれたんだ。バスケもうまいし、いろいろと教わったんだ」

日下部

「三井・・・聞いたことあるで！！」

三井寿、通称炎の男、元湘北バスケット部で先生のチームメイト。スリ
「はかなりのものだったらしいで！」

赤木

「そのとおりだ」

仏頂面で三井

「炎の男ってのは余計だけどな」

興味なさそうに神谷（早く練習再開しろよ・・・）

青空

「でいきなりなんだミッチー」

熊岡

「礼儀を弁えろ！」

ゴッソ！

青空の脳天にゲンコツが炸裂。

涙目で青空

「いってえ……」

三井

「べつにいいよ。言われなれてるからな」

(ミッチーなんて、言われたのはあいつ以来だな)

「しかしお前のような奴がレイアップを決めれないとはな」

青空

「何だとミッチー！！レイアップぐらい決めてやるよ」

熊岡

「バカタレ！！」

ゴッソ！！

頭を抑えながら青空

「ぐ……」

（ドンキーめ……すぐ殴る……）

熊岡

「よーし！！練習再開だ！！」

練習に戻る部員達。

三井

「お前の言ったとおりだ。あのちっこいガードは宮城に似てるし、キャプテンなんかお前そのものだ」

「そうか……？」

少し困りながら赤木が答える。

「だがな……行くぞ！このメンバーで全国に」

三井

「ああ。俺もいつでも手伝うぜ」

そのとき

青空

「置いてくる!?!」

パスッ

青空がレイアップを決めた。

青空

「どうだミッチー!?!レイアップ決めたぞ!」

ボソッと神谷

「決めて当然だ。それに・・・レイアップじゃなくてレイアップだ」

青空

「何だとカミヤ!?!」

二人のやり取りを見て三井

(仲がわるいとこまで似てるのかよ・・・)

こうして県予選への練習が続くのである・・・

そして舞台は1ヶ月後へ移る。

5月下旬

全国大会への切符を賭けた神奈川県予選が始まるうとしていた。

去年、県ベスト16という成績で終わった湘北は地区予選からスタートである。

そして無事に地区予選を勝ち抜き県予選の出場を決めたのだ。

会場の前には一人の男がいた。

男

「ついに来たで！県予選」

男は外に張り出されていた試合の紙に書かれているある対戦カードを眺めている。

湘北・三浦台

男

「湘北か・・・桜木さんや流川くんがいたときはすごいチームやったな。

今年ほどのくらい強いか気になるぞ。

それにもし勝ち上がったら、ブロック決勝で我が母校陵南と戦うことになる。

要チエックや!!!」

相田彦一

スポーツ記者 陵南高校出身

・・・そして

会場のコート上では試合が始まるつとじていた。

湘北ベンチ

赤木

「全国大会への切符賭けた大会の緒戦だ!!
気引き締めていけ!」

「はい!!!」

赤木

「よし!行ってこい!!」

スタメンの5人が赤のユニフォーム姿でコートに入る。

赤:湘北スターティングメンバー

- 4・熊岡 198cm / C / 3年
- 5・駒坂 177cm / SF / 3年
- 7・新 182cm / SG / 2年
- 11・神谷 188cm / PF / 1年
- 14・日下部 167cm / PG / 1年

青空

「ゴリの野郎、なぜ俺がスタメンじゃないんだ!!」

如月

「そんなこと言わない!!」

あんたがユニフォーム取ってベンチにいただけでもすごいことなんだから」

青空

「す・すいません」

如月の言うように、ついこの間まではほとんど素人だった青空がベンチにいたことだけでもすごいことだった。

1年でユニフォームを取れたのは神谷、日下部、そして青空の三人だけだった。

さらに上級生の中にも取ることができない人がいたのだ。

「湘北……!!」

「いけ……!!」

観客席ではベンチ入りできなかった者が応援していた。

一方で三浦台ベンチでは監督の村雨が激を飛ばしていた。

村雨

「今年こそは全国に行くぞ！！そのためにも湘北をコテンパンにするんだ！！！！」

「はい！！！！！！」

村雨（緒戦が憎き湘北とはな・・・しかし今年のうちは強いぞ！！今年こそ、あの海南を倒せる！！！！）

三浦台のスタメンがコートに入る。

・・・記者席

「お！！！！ちょうど始まるところやな」
彦一が席に着く。

観客席では・・・

宮野

「ちょうど良かった。今から始まるみたいだな」

高杉

「拓馬は出てないみたいだな」

浩一

「さすがにスタメンはないだろ。ベンチ入りだけでも奇跡だぜ」

「三浦台と湘北かー！ー！」

「最初の試合にしては面白いカードだ！ー！ー！」

「今年の湘北は強いのか！ー！」

観客も始まる前に盛り上がっている。

『-----』

「試合を始めます」

両チームのジャンパーがサークルに入った。

湘北のジャンパーは熊岡。

「飛べ！飛べ！飛べ！熊岡ー！ー！ー！」

応援にも熱が入る。

ボールがふわりと上がった。

#26 FIRST(後書き)

一斉更新しました。やっと県予選が書ける!!がんばります!!

#27 怒涛

神奈川県予選1回戦

湘北・三浦台

バシィ!!!

熊岡がジャンプボールを制した。

「やはり高い!!!熊岡!!!」

「迫力もすごい!!!」

「ナイス!キャプテン!!!」
ボールを日下部が拾う。

ビュッ

ゴール側に向かってダイレクトパスを出す。

パスを取ったのは神谷。

ドガッッ!!!!!!!!!!

ワンハンドダנקを決めた。

赤木

「よーし!!」

如月

「よし!!先制点ゲットだわ」

不満そうに青空

「カミヤ・・・」

「早い!!」

「今の速攻すごいな!!」

・ ・ 記者席

彦一

「あの速攻・・・前の湘北がやってたパターンや!!」

そして序盤から湘北の怒涛の攻撃が始まる。

ドゴッッッ!!!!!!

熊岡のボースハンドダークが炸裂。

「すごいぞ!!!!まさにキングコングだ!!」

「あんなのがゴール下にいるのかよ!!」

青空

「キングコングじゃねえ。ドンキーコングだ」

バシィ!!!!

日下部がスティール。

「もらいや」

パスッ

「14番(日下部)、取ってそのまま決めた!!」

「あいつ速いな!!」

またも湘北の攻撃。

ローポストの熊岡にボールが入る。

村雨

「囲め!!」

三浦台の選手が村雨の指示で熊岡を囲む。

しかし

ビッ

熊岡、外にパスを出した。

新がノーマークでパスをもらおう。

ザシュ

「今度は7番（新）のスリーだ!!」

「中に外に攻撃範囲が広いぞこのチーム!!」

湘北の攻撃の中でも一際目立っている人が一人いた。

「11番（神谷）が決めた!!!」

「11番、シュート外してないんじゃないか!？」

シュパッ

神谷のミドルが入る。

「また決めたぞ!！」

如月

「すごいわね神谷。絶好調よ!！」

不満そうな青空。

赤木

（神谷・・・まさかここまでの男とは・・・）

宮野

「湘北ってそんな強かったのか!？」

高杉

「ずっと湘北しか攻めてないし」

浩一

「このチームに拓馬がいるっていうのが理解できねー」

彦一

「それぞれのポジションに役者が揃ってる。

あと一人、インサイドの強力な武器があれば最高やな。しかしやはりあの11番出てきたで!!!

神谷大和、横浜第一中出身。全中の経験ありか・・・」

・・・そして

『~~~~~!!!!!!』

前半終了。

湘北 55 - 22 三浦台

湘北の圧倒的な力で前半が終わった。

「湘北強いぞ・・・」

「サイズで上回る三浦台に大差をつけるなんて」

「それにあの11番。1年らしいぞ！」

観客席がざわついている。

「大和・・・やはり出て来たか！相変わらずすごいオフェンス力だ」

一人の男が試合を見ていた。

海南のジャージを着ている。

ある人がその男に気づいた。

「あれ・・・海南って書いてあるぞ」

「前に聞いたぞ・・・1年のガードが入ったって」

ジャージ男

（大和・・・戦うとしたら決勝リーグだ。今度は敵として・・・絶対

に上がって来い！！）

風間俊平

海南大附属高校1年 ガード

横浜第一中出身

湘北ベンチでは

赤木

「よし！いい感じだ！！後半も攻めてけ！！」

「はい！！！！」

日下部

「調子いいみたいやな大和」

神谷

「当たり前だ」

青空

「でも前の練習試合みたいに途中でバテるんだろ？」

神谷

「黙れ・・・素人が」

青空

「なんだと!?!」

青空と神谷を注意する如月

「コラ!!そこの二人喧嘩しない!!」

二人を見て新

「あの二人、いつも仲悪いですね」

熊岡

「試合中だっていうのに。けしからん!!」

そして

赤木

「青空!!」

青空

「あ!?!」

赤木

「後半の途中で出すから準備しておけ!!」

#28 Before

湘北の初陣の試合。

湘北のペースのまま4Qに突入していた。

湘北 96 - 42 三浦台

主力を一部下げて試合にのぞんでいた。

湘北メンバー

- 5 ・ 駒坂
- 6 ・ 仲根
- 9 ・ 石毛
- 11 ・ 神谷
- 14 ・ 日下部

ザシユ

「またあの11番が決めた!!!」

「あいつ何点決めてんだ!!」

彦一

「まさかここまでやるとは思ってなかったで!!
今年の湘北は要チエックやで!!」

湘北ベンチ

青空

「おいゴリ!!
準備万端だ!早く出せ!!」

赤木

「出してやるから慌てるな」

青空の態度を見て熊岡

「こらあ青空!!先生に向かってなんて態度だ!!」

青空を見て新

「元気だな」

そのころコートでは

日下部

「まいどー!!」

日下部ドライブでポイント内へ

(たたき落としてやる!!)

三浦台のインサイド陣がいつせいに飛ぶ。

しかし

ビッ

日下部アウトサイドにいた神谷にパス

シュパッ

神谷のスリーが決まる。

湘北ベンチ

「ナイシュー!!! 神谷!!!」

観客席にいるメンバーも盛り上がる。

不満げに青空

「カミヤ……」

呆れる如月

（なんで神谷が決めると機嫌悪くなるのかしら）

湘北の攻撃はまたしても続く

「11番すげー！……」

「14番速いなー！！」

「もしかしたら同じブロックの陵南を食うかもしれないぞ……」

風間

「思ったよりすごいな……これは真田さんと伴さんに報告しないとな」

そのとき風間の後ろに背の高いごつい男が現れた。

男

「湘北・・・ブロックの決勝で戦うことになりそうだな。しかし負ける気がしない。熊岡さん・・・あなたとやっとならんと戦えそうだな」

男を見て風間

（あの人は陵南のセンターの壇之浦さんだ）

壇之浦聡

陵南高校2年

ポジション：C

壇之浦

「今年こそ全国へ行くんだ」

風間

（迫力ある人だな）

壇之浦が風間に気づいた。

びびる風間

（げー！見られた！）

壇之浦

「このジャージ・・・お前海南か!?!」

風間

「そ・・・そうです」

壇之浦

「見たことねえ顔だな・・・1年か!？」

風間

「はい!そうです・・・。風間っていいます・・・」

壇之浦

「一中から来たっていうガードか・・・。伴さんに言っておけ!!今年こそ俺が勝つとな!」

風間

「は・・・はい!」

(俺のこともう知られてんのかよ・・・)

「もうここには用がねえな」

壇之浦は体育館をあとにする。

一息ついて風間

「恐かった・・・」

そしてスコアボードに目を向ける。

4Q残り5分

湘北 108 - 48 三浦台

三浦台ベンチ

頭を抱えながら村雨

「これじゃあうちが弱小チームみたいじゃないか……」

そのころ湘北ベンチでは動きが出ていた。

赤木

「よし！青空いくぞー！ー」

青空

「よっしゃあー！この時を待ってたぜー！ー」

青空拓馬

いよいよ本戦デビューー！ー！

#28 Before (後書き)

遅くなりました。

#29 不幸な男

4Q残り5分

湘北 108 - 48 三浦台

勝負ついた試合だったが、最後にもう一つの動きがあった。

『ビーーーーー』

「交代。白（湘北）」

オフィシャルテーブルの横にはユニフォーム姿の青空が立っている。

青空

「やっと俺様の出番だぜ」

・・観客席

宮野

「拓馬が出るみたいだぞ!!」

高杉

「本試合デビューか!？」

浩一

「さすがに驚きだぜ・・・」

他の観客は青空の風貌に驚いている。

「なんだあの派手なやつは!?!?!？」

「湘北の変なやつ出してきたぞ!!?!！」

「金髪だ・・・!!！」

観客の声を聞いて青空

「俺のことを馬鹿にしゃがって・・・近くにいたらぶっ殺してやる
ところだ!」

青空を見て如月

「ダメだ・・・もうキレてる・・・」

新

「拓馬くん大丈夫ですかね??」

熊岡

「ダメな気がするな・・・」

声をかける赤木

「わかってるな青空!!」

青空

「おつよ!任せろヨリ!!」

青空、仲根と交代。

10・青空 190cm/CF

湘北メンバー

PG 日下部

SG 駒坂

SF 石毛

PF 神谷

C 青空

村雨

「変なやつが出てきたな・・・あいつを見ると何故か昔おきた悪夢を思い出す」

彦一

「なんやあの子。あの風貌みると昔湘北にいた桜木さんを思い出すで!!」

要チエツクや!」

そのとき

『プーーーーー』

「ファール。白10番(青空)」

青空の手刀が炸裂していた。

如月

「またやった・・・」

熊岡

「まったくあいつは・・・」

新

「・・・」

青空

「やっちまったー!!!」

神谷

「やる気がねえんなら下がれ」

青空

「んだと!!!？」

二人の様子を見て日下部

「コートで喧嘩すんなや!!!」

風間

「なんだ？大和と喧嘩し始めた」

「いきなりファールしたぞ!!!」

「変なやつだな」

観客の声を聞いて青空

「俺としたことが・・・」

三浦台の攻撃

ガンッ

ミドルシュートが落ちた。

日下部

「リバウンドや!!!」

ピクッ……

青空

（リバウンド……）

三浦台のインサイド陣がいつせいに飛ぶ。

バツシイイイ!!!

三浦台メンバー

「！！！！」

村雨

「なに！？」

三浦台ベンチ

「！？！？」

風間

「！！！！」

彦一

「なんやと！！」

観客も驚いている。

リバウンドを取ったのは青空だった。

赤木

「よーし！！ナイスリバンだ！！」

如月

「すごい・・・」

熊岡と新も驚愕の表情を浮かべている。

バスッ

速攻でそのまま神谷が決める。

「すげー！！！」

「あのインサイドからリバウンドを取ったぞ！！」

彦一

「あのジャンプ力に瞬発力すごいで！！」

青空

「俺様の才能に気づいたか！庶民ども！！」

呆れ顔で神谷

「ばかやるー」

また三浦台の攻撃

三浦台のガードがパスミスをした。

怒る村雨

「なにやってんだー!!」

ルーズボールは三浦台ベンチの方に転がる。

それを追う青空

「絶対にとーる!!」

ボールはライン前で跳ねて村雨のもとへ。

日下部

「まだボール生きつるで!!」

青空

「わかってらい!!」

ボールと村雨の方へ飛びつく青空

村雨

「え……?」

バツシイイ！！

青空、ボールをコート内へ弾く。

それと同時に

ガッシャーーン！！！！

村雨の上へのしかかった。

弾かれたボールを取る日下部

「ナイスや！！」

そして速攻で神谷がシュートを決める。

如月

「ナイスファイトよ青空拓馬！！」

赤木

「よーし！！」

青空

「よっしゃあ!!」

何事もなかったかのように立ち上がり、走ってコートに戻る青空

一方でまだベンチで倒れている村雨

心配そうな三浦台ベンチ

「大丈夫ですか?・・・監督」

痛そうに立ち上がりながら村雨

「くそ・・・散々やられた揚げ句にあの金髪め・・・」

昔もそうだが、湘北は赤頭をはじめにたちが悪い・・・」

三浦台高校監督 村雨

湘北二世代に渡って不幸な目に合うのだった。

#30 スタート

湘北×三浦台

終了のブザーがなる。

『ブーーーーー!!!!!!』

最終スコア

湘北 122 - 58 三浦台

熊岡

「よし!!」

如月

「まずは一勝ね!」

赤木

「幸先のいいスタートだな!」

「湘北つえー！ー！！」

「あの三浦台にダブルスコアか！！！！」

風間

「確かになかなか強い。でもうちには勝てないな」

彦一

「三浦台も県ではベスト16か8に入る強豪校や。そこにこの差で勝つなんて、強いで！！」

これは陵南の相手は湘北になりそうやな！」

ベンチで叫ぶ青空

「だーはっはー！！俺様のおかげだな！」

日下部

「そんな試合出てないやろ・・・」

神谷

「ばかやろー」

呆れ顔の新

「・・・」

赤木

「青空！！無駄なファールが多過ぎだ！！」

青空

「ぬ？ゴリ！」

赤木

「たった5分でファール3つだぞ！！気をつけろ！！」

押し黙る青空

「ぐ・・・」

話に入る熊岡

「無理にボールを取ろうとするからだ。バカタレ！！」

青空

「ドンキーまで・・・」

青空を見て新

「課題が山積みだな」

観客席にはまだ浩一達がいる。

高杉

「強いな・・・湘北」

宮野

「青空も試合出ちゃったしな」

浩一

「ファールばかりだったけど」

インターハイ県予選一回目

湘北高校、三浦台高校に圧勝。

この試合の勢いをそのままに湘北の快進撃が続いた。

すべての試合を大差で勝ち抜き、ブロック決勝まで駒を進めたのである。

この時点でベスト8となり、去年の記録を抜く。

そして4強決戦の組み合わせは――

海南大附属 - 津久武

翔陽 - 竜ヶ崎

陵南 - 湘北

武里 - 箕輪

湘北の相手は陵南高校。

インターハイ出場の経験をもつ強豪校である。

いよいよ決勝リーグをかけた戦いが始まる。

#31 ブロック決勝

7月某日

いよいよブロック決勝戦が始まるうとしていた。

この試合を勝ち抜けば決勝リーグへ進め、

リーグ戦の上位2校が全国への切符を手にすることができるのだ。

その大事な一戦の湘北の相手は

陵南高校

名将田岡監督率いる全国の経験をもつ強豪校である。

観客席では浩一たちが来ていた。

高杉

「いつもより観客の席が多いな」

宮野

「確かに・・・それほど大事な試合なんだろ」

浩一（拓馬、がんばれよ！）

そこから少し離れた席では三井が座っている。

三井

（相手は陵南か。懐かしいな。全国を決めたときのことを思い出
ぜ！）

一方で記者席

彦一

「いよいよブロック決勝や！！しかも母校の陵南と、黄金時代復活
が囁かれている湘北や！
要チエツクやで！！」

そのとき両チームがコート上に現れた。

「おおお出てきた！！」

「陵南！今年こそ全国に行ってくれ！！」

「いや、湘北が食うかもしれないぞ！！」

観客の声を聞いて青空

「おおおう、俺様への声援か!？」

日下部

「いやいや、違うやろ」

神谷

(ばかやろー)

新は観客席に三井がいるのを確認。

(三井さん・・・絶対勝ちますよ!!)

激をとばす熊岡

「よーし!!行くぞ!!」

「おおー!!!!!!!!」

両チームともアップを開始。

コートサイドでは赤木と田岡が握手を交わす。

田岡

「ここまで上がってきたか赤木くん!!昔のときみたいにはいかな
いからね!

よろしく頼むよ!」

赤木

「勝ちに行きますよ!!よろしくお願ひします!!」

火花を散らす二人。

そのとき……

ドガツツツツ!!!!

陵南の壇之浦が強烈なダンクを叩きこんだ。

「おおー!!」

「やはりすごい迫力だー!!」

「さすが県NO.1センターを争っただけはある!」

青空

「なんだ??あのごついおっさん」

新

「壇之浦聡。陵南のエースセンターだよ」

青空

「ふーん。じゃああのおっさんは俺が倒す!!」

新

「いや、拓馬くんの出る幕はないよ」

憤慨しながら青空

「ぬ!??どういことだフミ!??」

新

「拓馬くんが出る前に、熊岡先輩が抑えてくれるってこと」

得意げに青空

「ほほう……なるほど」

二人のやりとりを見て日下部

(新さん、拓馬の扱いがうまいで!!)

そして

ドガツツツツツツツ！！！！！

熊岡がダンクを返す。

会場はヒートアップ。

「お返しのダンクだー！！！！」

「壇之浦と熊岡の戦いが鍵を握るかもしれないぞ！！！！」

壇之浦を見る熊岡

（2年のガキには負けん！！）

壇之浦も睨み返す。

（やっとあなたと戦える・・・）

「気合い十分だな聡」

一人の男が壇之浦に声をかけた。

壇之浦

「花田さん……」

「今まで出てこなかったけど、熊岡もなかなかのセンターだ！頼んだぞ！」

男は壇之浦の背中を叩きながら言う。

花田勝頼

陵南高校キャプテン ガード

気合十分の表情で壇之浦

「絶対に負けません」

微笑む花田

「頼りになるな」

一方で湘北

青空

「おおおうドンキー！気合十分だな！！俺も Dank を……」

熊岡

「バカタレ！！」

ドゴッ！！

頭を抑えながら青空

「なんでお前がやって、俺がダメなんだよ……」

熊岡

「どつせできんだろ！！」

それを見て新

（拓馬くんかわいそうに……。でも今日の熊岡さんの気合はすごいものがあるな）

……そして

赤木

「相手は強豪の陵南だ！！全国に行くための難関だ！おまえたちなら勝てる！！行ってこい！！！！」

「おおおおお！！！！！！」

熊岡

(壇之浦・・・絶対倒す!!)

新

(・・・絶対に勝つ!)

日下部

(相手のガードもきつとすごい選手や!!やったるで!)

神谷

(・・・)

駒坂

(今年こそ全国に行くぞ!)

不機嫌な青空

(なぜ俺がスタメンじゃねえんだ・・・)

陵南ベンチ

田岡

「去年は全国を逃したが、今年こそ行くぞ!!
何よりも練習量ではどこにも負けてない!!
勝ってこい!!」

「はい!!!!!!!!」

観客席では――

風間

「ちようどよかった。これから始まるみたいですよ！」
筋肉質の色黒な男という。

男

「陵南と湘北か。面白い試合になりそうだな」

センターサークル内に熊岡と壇之浦が入った。

壇之浦

「熊岡さん。No.1センターは俺のものですよ」

熊岡

「ふん。生意気なやつだ」

ボールがフワリと上に放られた。

いよいよティップオフ。

#32 湘北vs陵南

ブロック決勝

湘北 - 陵南

審判からジャンプボールのトスが放たれた。

バシィ!!!

ジャンプは互角。

ボールは陵南のガード花田に落ちた。

湘北スタメン

- 4・熊岡 / C / 198cm / 3年
- 5・駒坂 / SG / 177cm / 3年
- 7・新 / SF / 182cm / 2年

1 1 ・神谷 / P F / 1 8 8 c m / 1 年
1 4 ・日下部 / P G / 1 6 7 c m / 1 年

陵南スタメン

4 ・花田 / P G / 1 7 2 c m / 3 年
5 ・高野 / S G / 1 7 6 c m / 3 年
6 ・朝井 / S F / 1 8 5 c m / 2 年
8 ・白山 / P F / 1 9 1 c m / 2 年
9 ・壇之浦 / C / 1 9 6 c m / 2 年

花田がボールをキープ。

「まずは陵南の攻撃からだ!!」「誰で攻めてくる!?!」「花田から
ローポストの壇之浦へ。」

「おお!!いきなりセンター対決だ!!」

ダムッ!!!

壇之浦、ドリブルで押し込む。

D Fの熊岡

(こいつ…重い…!)

バス!!

壇之浦のバンクショットで陵南先制。

田岡

「よーし!! いいぞ壇之浦!!」

「やっぱり壇之浦のパワーはすごい!!」

如月

「熊岡先輩が簡単に押し込まれた・・・」

不満顔の青空

「ドンキーのやるつ、こつこつオヤジにやらねやがって」

・・・記者席

彦一

「この試合のキーマンはセンターになるな。
県NO.1センターと呼び声高い壇之浦くん、熊岡くんがどのくらい食いつくか見物やで!!」

ボールを運ぶ日下部

「一本いきましよう!!」

熊岡がローポストを陣取る。

「日下部!! 入れろ!!」

強くパスを要求する。

日下部、熊岡にパスを入れる。

熊岡

「年下の小僧に負けてたまるか」

ダムッ!!

今度は熊岡が壇之浦を押し込む。

壇之浦

「ぐ……」

バスッ!!!

「おお!!!今度は熊岡が入れかえしたぞ!!!」

熊岡

「よ……し!!!」

……観客席

風間

「まさか壇之浦さんを押し込むとは……熊岡さんもすごいパワ
ーだ!」

風間と一緒にいる色黒の男が口を開く。

「2年前から見ていたが、いずねあいつもここまで上がってくると
思ってたよ」

風間

「伴さん……」

男

「きつと壇之浦と互角の戦いをするはずだ!!」

伴勇次郎

海南大附属 キャプテン

CF

コートでは……

バスッ!!

「またしてもゴール下だ!!!!!!」

「壇之浦連続得点!!」

壇之浦

「熊岡さん。ゴール下では負けませんよ」

無視して走って戻る熊岡（くそ……見てろ！！）

駒坂

（熊岡……）

新

（先輩……）

次の湘北の攻撃。

熊岡

「俺に入れる！！」

またしてもパスを要求。

腕組みの赤木

（……）

バス！！！！

「また入れ返したぞ!!」

「初っ端から面白い展開だぞ!!!」

如月

「熊岡先輩も負けてないわ!!!」

青空

「暑苦しい戦いだな・・・」

・・・観客席の浩一たち

高杉

「ドンキー大暴れ!!」

にやけながら宮野

「あんなのにいつもどっかかれている拓馬はかわいそうだな!!!」

浩一

「今日も拓馬の出番はそんなないかな・・・」

・・・記者席

彦一

「やはり熊岡くんもたいした選手や!!
壇之浦くんと堂々と戦っている」

日下部

「気合充分っすね!キャプテン!!」

熊岡

「当たり前だ!!絶対に負けん!!」

熊岡を見て駒坂

(今日の熊岡は何か変だ・・・)

同じく新

(気合入ってるのはわかるけど、相手を意識しすぎてるような気がする。)

今は良い結果になってるからいいもの・・・)

(熊岡・・・)

ベンチで無言の赤木

赤木も二人と同じく不安な気持ちを抱いていた。

そして・・・

その不安はすぐに的中することになるのである。

1Q残り9分

湘北 4 - 4 陵南

#33 壇之浦聡(前書き)

#32より目下部の背番号は15ではなく14です。すいません m

m ()

#33 壇之浦聡

神奈川県予選ブロック決勝

湘北 vs 陵南

1Q残り9分

湘北 4 - 4 陵南

陵南の攻撃

花田がボールをキープしている。

DFにつく日下部

(きつとまた9番で攻めてくるはずや!!)

そのとき

ダムッ！！

花田がドライブで日下部を抜く。

日下部

(ドライブやと!?)

必死に花田を追う。

花田

(!?!?!?)

田岡

(早い!?!?!?)

日下部が花田に追い付く。

ビッ

S Fの高野にパス

そしてゴール下の壇之浦にパス。

D Fの熊岡

(今度は止める!!)

壇之浦ターンしてシュート

しかし撃たない。

(フェイクだと!?)

熊岡は引っ掛かって飛んでいる。

そして

ドンッ！……！！

壇之浦、飛んでいる熊岡に体をぶつけながらシュートを放つ。
バスッ

『ピュッ……！！』

「ファール白4番（熊岡）……カウントワンスロー……！！」

田岡

「よし……！！」

「力で押し込んだ……！！」

「さすが壇之浦だ……！！」

花田

「ナイスだ……！！」

うなづく壇之浦

「はい」

熊岡

「くそ……」

駒坂

「気にするな熊岡」

熊岡

「わかってる。くそ……小僧め……」

駒坂

（熊岡……）

そのやりとりを無言で見つめる新

花田を見つめる日下部

（あのガード、けっしてスピードとかあるわけではないけど、人の考えてることの裏を読むのはうまいかもしれへんな……）

神谷

（陵南……）

ベンチの青空

「おいおいドンキーやられちまったぞ！！俺様と交代した方がいい

んじゃないか??」

如月

「あなたは黙ってなさい!!」

腕組しながら赤木

(・・・)

ガンッ

壇之浦がフリースローを外す。

壇之浦

「くそ・・・」

リバウンドを神谷が取る。

記者席の彦一

「さすが壇之浦くん！パワープレーは見事なもんやで!!
昔いた魚住さんそっくりや!!
フリースローが苦手なところも」

・・・コート上では

ガンッ

日下部

「ちくしょう・・・」

花田

(こいつ、スピードはすごいけど、シュートは苦手だな)

リバウンドを壇之浦が取る。

陵南ベンチ

「ナイスリバンだ壇之浦!!!」

速攻で朝井が決める。

湘北 4 - 8 陵南

・・・観客席

伴

「壇之浦のプレイで流れが陵南に傾いたな。熊岡ならもつと張り合えると思うんだが・・・」

風間

「いや・・・まだまだですよ。湘北にはまだすごいのがいますよ」

伴

「そいつってお前と全中行ったって奴か？」

風間

「はい」

そのとき

「おおー！！！！」

観客席から大歓声が出た。

「あの１１番いきなりスリー決めたぞ！！」

風間

「噂をすれば・・・だ」

神谷がスリーを決めていた。

青空

「カミヤめ……」

しかし陵南は動じず壇之浦を中心に得点を決めていく。

「また壇之浦だ!!!」

田岡

「今日の壇之浦は調子がいいぞ!!!熊岡が相手というので気合いが入ってるみたいだ」

観客席の三井

「陵南のセンターなかなかだな。魚住を見てるみたいだぜ。熊岡も実力では負けてないと思うんだが、おかしいな」

湘北は神谷の個人技で食らい付いていたが、

壇之浦のカウントをきっかけに陵南に流れが傾いていた。

- - -そして

10残り2分

湘北 10 - 18 陵南

点差が少しずつ開き始めていた。

#34 痛手

1Q残り2分

湘北 10 - 18 陵南

陵南の攻撃。

花田がボールを運ぶ。

ボールはまたしても壇之浦へ。
ゴールに背を向けてもらう。

熊岡

「かかってこい!!」

壇之浦ドリブルでじりじりと熊岡を押し込む。

キュッ

ターンでゴールに体を向ける。

熊岡

(シュートだ!!)

しかし

ミドルレンジにいる朝井にパス。

ザシュ!!

ミドルシュートが決まる。

湘北 10 - 20 陵南

「10点差だ——!!」

「やはり陵南が突き放したぞ!!」

田岡

「よしゴール下が機能してるから、良い流れだ!!」

(この感じならあいつを出すまでもないな・・・)

熊岡(くそ・・・俺があいつに勝たないと全国にいけない!!!!)

シュパッ

新がミドルを決める。

(熊岡さんがやっぱりおかしい・・・どうにかしないと・・・)

「すぐに湘北が返したぞ!!」

しかしすぐに陵南が返す。

ザシュ

PF白山のシュートが決まる。

彦一

「さすが県ベスト4の強豪校や!!」

花田くんら安定感のあるガード陣と壇之浦くん中心のインサイド陣がうまくかみ合ってるで!!」

次々と陵南が点を決めていく。

「花田ナイスパスだ!!!」

「陵南のインサイド陣が止まらない!!!」

そして

ドガアアアアア!!!

壇之浦が熊岡をかわしボースハンドダックを決める。

「壇之浦だ!!!」

「止められない!!!」

熊岡

「くそ……」

日下部、熊岡に声をかける。

「どんまいですキャプテン！最後決めましょう！」

湘北 14 - 28 陵南

10残り20秒となっていた。

青空

「だあああ！～やられてんじゃねえかよ！～！」

如月

「あの9番だわ……」

三井

「湘北はこれを決めないと痛いぞ……」

湘北1Q最後の攻撃。

日下部がドリブルでキープ。

花田がプレッシャーをかける。

田岡が声を出す。

「いいDFだ花田!!」

日下部（嫌らしいディフェンスする人やで）

残り5秒

ビュッ!!

花田

「!!」

早いパスが熊岡へ渡った。

日下部

（ここは任せるで!!キャプテン!!）

DFの壇之浦

「……！」

「ここでもセンター対決だ……！」

「湘北決められるか……！」

熊岡

（絶対決めてやる！）

壇之浦

「……！」

無理矢理なパワープレイで壇之浦に挑む。

神谷

（無理だ……）

駒坂

（熊岡……！）

新

（無理矢理すぎる……！）

赤木

（…………！）

食い入るように見つめる青空。

ドンッ！……！！

熊岡、体をぶつけながらシュートを放つ。

壇之浦は倒れる。

『ブー……！！……！！』

10終了のブザーと同時にボールはリングを通過。

熊岡

（決まった……）

そこに

『ブー……！！……！！』

審判の笛がなった。

「オフエンスチャージング！！白4番（熊岡）！ノーカウント！！」

熊岡

「なんだと！？」

「ファールだ！！！」

「チャージング取ったぞ！！！」

風間

「今のは痛いな」

伴

「熊岡が無理にいきすぎたな」

倒れている壇之浦に手を差し出す白山
「ナイス！！！」

その手を取って起き上がる壇之浦
「おう！」

花田も駆け付ける。

「よくやった！！」

如月

「最悪の終わり方だわ……」

腕組みの赤木

「早くも二つ目か……」

1Q終了

湘北 14 - 28 陵南

早くも熊岡2ファール。

#35 宣戦布告

1Q終了

湘北 14 - 28 陵南

壇之浦のカウンント（ワンスローは外れる）で序盤が終了した。

田岡が手を叩きながらメンバーを迎え入れる。

「よーし！！！！いい出だしだ！！！」

壇之浦

「はい！！！」

田岡

「次も壇之浦を中心にゴール下で攻めるんだ！！
ゲームメイクは頼んだぞ花田！！！」

花田

「はい！！！」

田岡

「ここで一気に突き放すぞ!!」

「はい!!!!」

一方で湘北ベンチ。

腕組みの赤木

「……………」

青空

「どうしたんだゴリ? 黙っちまって」

タオルを被って俯いている熊岡

(……………くそ!)

そして赤木は口を開く。

「最悪だな……………」

新、日下部、駒坂

「!!!!」

神谷

「……………」

青空

「俺を出さないからだ!!」

如月

「あんたは黙ってなさい!!」

赤木

「無理なプレーで一人相撲する奴なんか必要ない!!わかるか!?
熊岡!!」

赤木の方へ顔を上げる熊岡

赤木

「お前は頭を冷やせ!!
青空!熊岡と交代だ!!」

青空

「おう!!」

(やつと出番だぜ!!)

彦一

「1Qは陵南のペースで終わったけど、湘北がこのまま終わるとは
思えない。
どう来るか見物やで!!」

風間

「やはり陵南のゴール下は強いですね」

伴

「ああ。さすが壇之浦だ！！熊岡をこのまま抑えれば陵南の勝ちは決定だな」

・・・そして

『ビーーーーー！！！』

クォーターブレイク終了のブザーが鳴る。

コートに向かうメンバー。

新

（俺が怪我で迷惑かけたぶんここで頑張らないと）

駒坂

（この流れを止めるんだ）

日下部

（あのガードを止めないと流れは変わらへん）

神谷

(・・・・・・・・)

そして浩一達が青空を見て

高杉

「拓馬出るみたいだ!!」

宮野

「しかもドンキーの代わりかよ!!」

浩一

「おいおい大丈夫か？」

観客も同様に

「4番下がったぞ!!」

「金髪の奴がでてきたぞ!!」

三井

「熊岡と交代だと!？」

「あいつで平気なのか？」

田岡

「なんかすごい奴が出てきたな。まるで奴を見ているみたいだが」

コート上では青空が壇之浦に向かって歩いて行く。

日下部

「何する気や!?!」

青空

「おい!ぬりかべ!!」

怒りをあらわにする壇之浦

「ぬりかべ・・・?」

熊岡

「!?!?!」

壇之浦に指をさしながら青空

「ドンキーを倒して調子乗ってるみたいだが、俺がぶっ倒してやるよ!?!?!」

「あいつ壇之浦に宣戦布告したぞ!?!」

「そんなにすごい選手なのか!？」

呆れる如月

「馬鹿……」

同じく赤木

「ったく……」

神谷

「んなことできねえくせに勝手なことぬかすな」

青空

「カミヤー! てめえにも負けねえ!!」

神谷

「てめえは黙ってコートにいればいい。お前の力なんか必要ねえ」

青空

「なんだと!？」

神谷

「絶対逆転する。こんなところで負ける訳にはいかねえ」

「もちろんだ。このままじゃ終われない。」

拓馬くんの力も必要だ」
新が会話に加わる。

笑みを浮かべる青空

「ふふ。フミは根暗野郎と違ってわかるな」

そして熊岡がいない状態で2Qを迎える。

湘北 14 - 28 陵南

#36 期待してねえ

湘北 14 - 28 陵南

記者席の彦一

「キャプテンでもあり、湘北のインサイドの核でもある熊岡君を下げてルーキーの青空君投入か!!
2Q見物やで!」

- - 観客席

高杉

「拓馬があのでかいのつくのかよ・・・」

浩一

「喧嘩売ってたからな・・・」

コート上では2Q最初の陵南の攻撃が始まっていた。

花田がボールをキープ。

壇之浦のDFには青空がついている。

花田

(あの金髪はきつと穴だ。ここを攻める以外ないな)

そのとき

バシィ

花田

「!!!」

日下部がスティール。

「油断禁物や」

「あのちっこいのが取ったぞ!!!」

湘北の攻撃へ

「へい」

神谷がボールを要求する。

ボールは目下部から神谷へ。

神谷と白山、1on1の体勢。

腰を落とす白山。

「来い！ルーキー！」

ダムッ

高速ドライブで白山を一気に置き去りにする。

白山

(速い!!)

神谷、そのまま切れ込みレイアップへ。

しかし、そこにヘルプで壇之浦がチェックに飛ぶ。

如月

「高い！！！！」

無言で見つめる熊岡

壇之浦のDFが外れた青空

「カミヤ！空いたぞ！」

パスを要求。

そのとき

スッ

空中で壇之浦をかわした。

壇之浦

「なに！？」

そして

スパッ

神谷、ダブルクラッチを決める。

「壇之浦をかわして決めたぞ!!!」

「その前のドライブもやばかった!!!」

熊岡

「なんて奴だ……」

如月

「すごいわね……」

不満げに青空

「なぜパスを渡さん？」

神谷

「てめえに渡しても意味ねえ」

青空

「なんだと!!!」

日下部

「喧嘩しとる場合やないで拓馬」

新

「逆転するぞ」

駒坂

「DF頼んだぞ!!」

次々と青空に声をかける。

青空

「おつよ!!」

陵南の攻撃

花田

（この14番のDF油断できねえな）

壇之浦がポジションを取る。

青空

（こいつ力強い!!ドンキーこんな奴と戦ってたのか）

三井

「やはり青空には荷が重いか!!」

ボールが壇之浦に入る。

壇之浦

「ぬりかべって言ったの忘れてねえよな？
今すぐ口も出せなくしてやるわ!!」

パワードリブルで青空を押し込む。

青空

「ぐ……」

熊岡

「やっぱりあいつには無理だ!!」

赤木は無言のまま動かない。

壇之浦そのままシュートをつつ。

そのとき

バツシイ！！！！！！

壇之浦のシュートが後ろから叩かれた。

叩いたのは神谷だった。

壇之浦

「またお前か！！」

青空

「神谷！！！！」

「また１１番だ！！！！」

「今度は壇之浦からブロックしたぞ！！！！」

こぼれ球を日下部が拾う。

湘北の速攻

花田がDFに戻っている。
「ここは決めさせない!!」

日下部

(さすがに戻りが速いで)

花田

(外はない!!このまま突っ込んでくる!!)

花田はその判断をした直後。

スッ

日下部は横にノールックパスを出した。

ボールは走っていた新のもとへ

そして立っているのは3Pライン上。

きれいなフォームからスリーを放つ。

ザシュ

湘北 19 - 28 陵南

「スリーを決めた!!!」

「点差が1桁になったぞ!!!」

三井

「よし!!!」

如月

「一桁になったわ!!!」

青空

「おのれカミヤめ!!!」

それを聞いて神谷

「別にお前のディフェンスに期待してねえ」

青空

「くそ・・・見てやがれ」

伴

「あの神谷って男たいしたもんだな。
去年の真田を見てるみたいだ。」

風間

「まだまだあいつはあんなもんじゃないですよ」

2Q残り9分

湘北 19 - 28 陵南

#37 がむしやら

20残り9分

湘北 19 - 28 陵南

三井

「熊岡がない状態で差が縮まるとは、神谷大和……たいした男
だぜ。」

風間

「逆転のカギは壇之浦さんを抑えるか、ですね」

伴

「ああ、あの金髪が踏ん張れるかだ」

そのとき

ローポストの壇之浦にボールが入る。

田岡が叫ぶ。

「いけ！！壇之浦！！」

青空

（絶対止める！！）

キュッ

壇之浦がターンで青空をかわす。

「やっぱり壇之浦が上だ！！」

そのとき、青空にある言葉が頭を過ぎる。

――お前のディフェンスなんか期待してねえ

青空

「決めさせねえ！！」

バツシイイイ！！！！

青空が後ろから壇之浦のシュートをブロックショット。

壇之浦

「!!!!!!」

田岡

「なんだと!?!」

こぼれ球を駒坂が拾い、速攻で神谷が決める。

湘北 21 - 28 陵南

「あの金髪後ろから叩いたぞ!!」

「これで7点差だ!!湘北の逆転があるかもしれない」

青空

「誰がディフェンスに期待してねえだ??」

神谷

「フン・・・」

無言でディフェンスに戻る。

青空

「図星め」

日下部が声を出す。

「オラー！！逆転するで！！！！」

ベンチの熊岡

「青空が壇之浦を・・・」

赤木

「さっきのお前とあいつの違いがわかるか？？」

熊岡

「・・・！？」

コート上では壇之浦がシュートを決めていた。

湘北 21 - 30 陵南

「壇之浦がすぐやり返した！！！！」

壇之浦

「やられっ放しで黙ってられるか」

青空

「ぬりかべめ」

如月

「さすが陵南のエースセンターなだけあってミスを引きずらないわね」

しかし湘北の攻撃は止まらない。

ザシユ

新のスリーが決まる。

湘北 24 - 30 陵南

「あの7番さつきからシユート外してないぞ!!」

日下部

「ナイシユウです。フミオさん」

新

「おう」

三井

「新も調子がいいみたいだ。しかし体力がまだ戻ってないはずだ。こんなに飛ばして平気なのか？」

（それにあいつはもともと体力がある方じゃねえし・・・）

腕組みの田岡

（今は完璧にこっちの流れだ・・・ここは耐えるんだ!!）

花田

（無理に攻めないで、確実に攻めていこう!!）

そして、時間は経過していく。

2Q残り1分

湘北 36 - 40 陵南

湘北は神谷、新を中心に攻め差を縮めていった。
それに対し陵南は壇之浦らゴール下を中心とした確実な攻めで逆転を許さない。

彦一

「まさかこの時間帯で点差が縮まるとは思ってなかったで！！
湘北の爆発力はすごいものやな」

伴

「しかし陵南も強い。流れが来ない中で慌てず確実に攻めている」

風間

「確かに。流れが変わったら湘北は不利だ」

コート上では湘北が攻めている。

日下部から新にボールを展開。

新、シュートの体勢。

(撃たせねえ!!!)

デیفエンスの朝井がチェックに飛ぶ。

しかし、撃たずにミドルレンジに走ってきた駒坂にパス。

駒坂

「ナイスパス!!!」

シュートを放つ。

(ただで撃たせるか!)

高野がチェックに飛んでいる。

ガンッ

シュートが外れる。

駒坂

(・・・くそ)

日下部が声を出す。

「リバーン!!!!!!」

ガッ！！！

青空、神谷が壇之浦、白山をスクリーンアウトでしっかり抑える。

壇之浦、白山

「！！！！」

バツシイ！！

青空がリバウンドを制す。

青空

「カミヤ！！リバウンドは俺の勝利だな！！」

壇之浦

(こいつ・・・高い上に速い！！)

青空

「フミ！！！！」

スリーポイントラインで待ち構える新にパス。

ザシユ

湘北 39 - 40 陵南

「1点差だ——!!」

「また7番だ——!!」

「あの金髪のリバウンドもすごかった!!」

白山

（あいつら本当に一年か??・・・）

壇之浦

（あの金髪下手くそだがリバウンドと運動能力に関してはすごいものを持ってやがる）

熊岡

「壇之浦からリバウンドを・・・」

静かに口を開く赤木

「さっきの話の続きだが・・・」

熊岡

「先生……」

赤木

「青空は何も考えずにただがむしゃらにやっているだけなんだ」

#38 カムバック

熊岡

「がむしゃら……」

(確かに……細かいことばかり考えていたかもしれん)

2Q残り40秒

湘北 39 - 40 陵南

花田がボールを運ぶ。

「一本確実に取るぞ！」

ディフェンスの日下部

(常に冷静やな。やりづらいガードやで)

田岡

「いいぞ花田。まだ慌てる時間じゃない」

伴

「花田のやつ、これと言った武器はないが安定感があるな」

風間

「こういう人が一番つくの嫌なんですよね」

(でもマッチアップしてみたいな)

ここで陵南が動く。

トップの花田から45度の朝井へ。

そして朝井からローポストの壇之浦に入った。

「やはりここは壇之浦に任せるか!!」

宮野

「またあのデカブツか!!」

高杉

「拓馬にはきつそうだな」

無言で見守る浩一。

ダムッ

ドリブルしながら青空を押し込む。

青空

(こいつ重い!!)

「踏ん張れ!!!青空!!!」

激を飛ばしたのは熊岡だった。

如月

「先輩……」

赤木は微笑む。

青空

「言われなくてもわかってらい!!!」

キュッ

壇之浦、ターンシュートへ。

「撃たせるか!!」
青空が反応して飛ぶ。

しかし壇之浦は撃たない。

日下部

「フェイクや!!」

熊岡

「馬鹿野郎!! 簡単に引つ掛かるな!!」

ドンッ

壇之浦、飛んだ青空に体をぶつけてシュートを放つ。

バスッ

そしてボールはリングを通過。

『ブー—————』

「ファール白10番（青空）。カウントワンスロー。」

田岡

「よーしーしー！」

「出たー！ー！！壇之浦の十八番パワープレイ！」

「これで流れを引き寄せられるか！ー！！」

青空

「ちくしょう……」

伴

「このプレイはでかいな」

風間

「流れが陵南になるかもしれないですね」

ここで湘北ベンチの赤木が口を開く。

「お前はつまらないことを考えずにプレーしてればいいんだ」

熊岡

「先生……」

赤木

「普通にプレーすれば壇之浦にも勝てる……俺はそう思っている」

無言で頷く熊岡

赤木

「2Qももうすぐ終わるが、陵南のゴール下を倒してこい」

熊岡

「はい……!」

彦一

「今の壇之浦君のプレーは大きい。フリースローを決めれば陵南はいい形で2Qが終われるで」

(でもフリースロー苦手やからな……)

2Q残り25秒

湘北 39 - 42 陵南

花田

「ナイスプレー……!」

壇之浦

「はい。流れを戻して終わらせないと」

そのとき

『ブーーーーー』

「交代。白。」

熊岡がユニフォーム姿で立っている。

「熊岡だ!!あの金髪と交代か!？」

「ということはまだ壇之浦につくのか!？」

青空

(くそ・・・交代か)

熊岡

「駒坂!!交代だ!!」

駒坂、手を差し出しながら

「熊岡任せたぞ!決勝リーグ行こうぜ」

「おう！」

熊岡ハイタッチする。

そして青空の方に歩み寄る。

熊岡

「ファールのことは気にするな」

意外な言葉に驚く青空

「お、おう」

熊岡

「お前と試合出るのは始めてだな。
とりあえず壇之浦は俺に任せろ」

青空

「わかった・・・」

熊岡

「ゴール下は俺達で守るんだ！！」

青空

「おう・・・」

（絶対逆転してやるぜ）

20残り25秒

熊岡、復活。

#39 戻った男

熊岡

「俺達でゴール下を守るんだ!!」

20残り25秒

湘北 39 - 42 陵南

しばらくベンチに下がっていた熊岡が復活し、壇之浦のフリースローを撃とうとしている。

田岡

「この一本は決めてくれ・・・」

壇之浦、一息おいてシュートを放つ。

ザシュ

「決まったー！ー！！！」

「壇之浦のプレーで差が離れたぞー！！！」

湘北 39 - 43 陵南

彦一

「これで流れは陵南やー！湘北も熊岡君を戻したけど流れを戻すのは難しいやろな」

田岡

「よーし！！よく決めたぞー！！」

ここで熊岡が叫ぶ。

「切り替えるー！！一本決めて終わらせるぞー！！」

日下部

「キャプテン……」

新、ニコリと微笑みながら

「これでこそ先輩だ」

青空

「おうよー!」

神谷

「うす」

如月

「なんか吹っ切れたみたいですね」

赤木、ニコリとしながら

「ったく・・・やっと戻ったか」

伴

「湘北はシュートを決めて終われるかだな」

風間

「2Qギリギリで熊岡さんを戻したのが吉と出るか」

日下部がボールを運ぶ。

「一本決めて終わりましたよー!」

ガッ！！

熊岡が壇之浦を相手にポストを取る。

熊岡

「日下部！！」

ボールは日下部から壇之浦へ。

壇之浦

「また勝負ができますね」

「また壇之浦と熊岡だ！！」

熊岡、パワードリブルからターン。

壇之浦がこれになんとかついていく。

（これくらいなら止められる）

しかし

ビッ

熊岡が外にパスを出す。

ボールはスリーポイントラインの新へ。

花田

(またこいつ動き回ってディフェンスを振り切ったか!!)

ザシュ

「また7番のスリーだ!!」

湘北 42 - 43 陵南

熊岡

「よし!!新!!」

新

「ナイスパスです」

二人はハイタッチを交わす。

風間

「あの7番すごいですね。前半だけでかなり取ってんじゃないっすか？」

伴

「ああ。前半から飛ばしすぎのようにも見えるが、シュートを決めたのはなかなか大きいぞ」

三井

「絶好調なのはいいが、あんなに動き回って後で潰れちまうぞ」

……そして

『……………』

前半終了。

湘北 42 - 43 陵南

ここで試合はハーフタイムに入る。

#40 ハーフ

湘北 42 - 43 陵南

2Q終了

試合はハーフタイムに入る。

記者席

彦一

「1点差か。」

熊岡君が抜けたことで一気に離れると思ったけど、神谷君と新君が踏ん張って逆に詰めたな」

観客席

風間

「大和と7番のシューターの活躍で点差を縮めましたね。熊岡さんが戻って来たから湘北有利かな」

「いや、まだそうとは限らないぞ」
風間と伴と同じく海南のジャージを着た美形の男がやって来た。

風間

「真田さん!!」

伴

「つたく・・・遅いぞ!!」
これから試合だって言うのに」

美形の男は頭をかきながら
「すみません。寝坊してしまって・・・」

真田一樹

海南大附属高校 / F / 2年

真田

「陵南と湘北、接戦みたいですね」

伴

「ああ。」

でもまだ陵南は余力を残して戦ってるからな。
まだあいつが出てないし、名将田岡監督が何か仕掛けてくるかもし

れない」

風間

「あいつ・・・??？」

湘北控え室

赤木、手を叩きながら

「よし！！2Qは上出来だ！！」

後半も攻めのバスケットを忘れるな！！」

「はい！！」

如月

「神谷！！あんた大活躍じゃない！後半を頼んだわよ！」

神谷

「うす」

この会話に青空が入る。

「ふん。どうせ前の練習試合みたいにガス欠なるに決まってる」

神谷

「しるせー」

一方で新は一人ベンチに腰かけている。

それを見て日下部

「新さん、大丈夫ですか？」

新、微笑みながら

「ああ、大丈夫だ」

日下部

（新さん、前半はオープンになるためにかなり走り回ってたからな。まだブランクから体力が戻ってるとも思えへんし、少し心配やな・・・）

熊岡も無言で新を見ていた。

（新・・・）

陵南控え室

田岡、スコアラーに声をかける。

「湘北の得点は主に誰が取っている？」

スコアラー

「神谷が14点、新が16点です」

腕組みの田岡

「やはりあの二人か・・・」

スコアラーが話を続ける。

「ちなみに新は怪我でしばらく戦列を離れていたらしく、復帰したばかりらしいです」

それを聞いて田岡、ニヤリ

「ほほう・・・ではそこを攻めるか」

よし！！攻めは前半と同じように壇之浦中心で攻めるんだ！！」

「はい！！」

田岡

「花田はもう少し自分で攻めてもいいからな」

花田頷く。

「わかりました」

田岡

「そしてディフェンスは・・・」

そして

コート上では両チームの選手がハーフタイムを終え戻って来た。

湘北のメンバーは2Q終了時と変わらない。

それを見て宮野

「お！！まだ拓馬出るみたいだぞ！」

高杉

「ドンキーとのタッグか！！」

浩一

「おお・・・また退場しなければいいが」

一方で陵南はメンバーが変わっていた。

陵南のメンバーを見て真田

「やっぱり出てきましたね」

伴

「ああ。これが今の陵南のベストメンバーかもな」

風間

「ベストメンバー・・・？」

ボールは湘北のスローイングから。

いよいよ後半開始！！

4 1 借り

湘北 4 2 - 4 3 陵南

3Qが開始しようとしている。

両チームのメンバーがコートに入る。

湘北のメンバーは2Q終了時と同じ。

一方で陵南は一人入れ代わっていた。
坊主頭の男が入っている。

その男を見て観客席の真田

「やっぱり出てきたか。五十嵐」

伴

「付くとしたら前半に得点を取ってた神谷か新だな」

真田

「まあ、そつなるでしょうね」

彦一

「やっと出てきたで！五十嵐政人君」

彦一はノートのあるページをめくる。

そこには五十嵐のことが書かれていた。

五十嵐政人

180cm / G・F / 2年

如月

「メンバーを替えてきましたね」

腕組みの赤木

「ああ」

(きつと田岡監督は何かやってってくる気がするな)

攻撃は湘北から開始した。

「後半始まったぞ！！」

「終わるころはどっちが勝ってるか！！」

日下部がボールをキープ。

陵南のディフェンスはマンツーマンである。

湘北メンバー

- 4 ・熊岡 / 198 cm / C
- 7 ・新 / 182 cm / SG
- 10 ・青空 / 190 cm / PF
- 11 ・神谷 / 188 cm / SF
- 14 ・日下部 / 167 cm / PG

陵南メンバー

- 4 ・花田 / 172 cm / PG
- 6 ・朝井 / 185 cm / SF
- 7 ・五十嵐 / 180 cm / SG
- 8 ・白山 / 191 cm / PF
- 9 ・壇之浦 / 196 cm / C

五十嵐は新にディフェンスをつく。五十嵐
「よろしくなシューターくん」

マッチアップを見て伴

「新につくみたいだな。五十嵐のやつ」

真田

「確かに神谷よりは新の方が湘北を崩せるかもな」

風間

（五十嵐って人、どんな選手なのか気になるな）

田岡

（頼むぞ！五十嵐！）

ボールは日下部から神谷に渡る。

「おお！！来たぞ！！一番！！」

歓声に不満の青空

（ボール持っただけだろうが！庶民め！）

神谷はその歓声をよそにパスを出した。

パスの行く先は熊岡。

(勝負だ!!)

ディフェンスの壇之浦に熱が入る。

ダム

熊岡、ドリブルをついて押し込む。
そして

キュッ

素早くターン、そしてシュートへ。

(また俺の勝ちだ!!)

壇之浦はしっかり反応しチエツク。

しかし熊岡からシュートは放たれていない。

空中で壇之浦

(!!!!)

熊岡はそこから飛んでいる壇之浦に体をぶつけながらシュートを放つ。

パスッ

『ピューーーーー』

「ファール青9番（壇之浦）！！カウントワンスロー！！」

赤木

「よーし！！」

青空

「ドンキー！！」

「おおー！決めたー！！」

「逆転だー！！」

「壇之浦からパワープレイで決めたぞ！！」

そしてきっちりワンスローを決める。

湘北 45 - 43 陵南

田岡

「壇之浦にパワーで対抗するとはな」

熊岡、壇之浦を睨みながら

「前半の借りなんぞすぐ返してやるわ」

壇之浦、ニヤリ

（おもしろい・・・）

4 2 五十嵐政人

湘北 4 5 - 4 3 陵南

3Q開始早々、熊岡のプレーにより湘北逆転に成功。

ボールを運びながら声を出す花田

「一本じっくり行こう」

田岡

「それでいいぞ花田。まだ慌てる必要はない」

花田から途中出場の五十嵐にボールが渡る。

(どんな選手なのか。しっかりと把握するぞ！)
ディフェンスの新が腰を落とす。

風間

「どんな選手なのかお手並み拝見ですね」

伴、真田は無言で見ている。

そのとき、白山がディフェンスの青空をかわしフリーになった。

青空（しまったー!!）

五十嵐はすぐにパスを出す。

ザシュ!!

白山、シュートを決める。

湘北 45 - 45 陵南

「すぐさま陵南が追い付いたぞ!!!!」

白山

「ナイスパス」

五十嵐

「はい」

風間

「今のよく見てたな。ゲームメイクが上手い選手かな」

伴

「いや、あいつの力が発揮されるのは今だ」

風間

「え!?!」

コートを見ながら真田

「お!?! やっぱりそう来たか!?!」

風間もすぐさまコートを見る。

コート上では湘北の攻撃が始まるうとしている。

エンドラインでパス出ししようとする神谷。

(!?!?!?)

陵南のディフェンスはハーフコートマンツーマンである。

ただ一人を除いて……

新

「!?!?!」

五十嵐が新に前からフェイスガードでついている。

ニヤリとしながら田岡

「仕掛けさせてもらっよ赤木君」

赤木

「ディフェンス要員の選手か!？」

湘北の攻撃、日下部からインサイドの熊岡へ。

ディフェンスの壇之浦

「さっきと同じようなことはさせませんよ!?!」

熊岡

「ふん、黙っとけ!?!」

そのとき

キュッ

白山も熊岡にディフェンスをつく。

白山

「ゴール下で仕事はさせねえ」

く
熊岡

そのとき新が五十嵐をかわす。
新

「熊岡さん!!」

風間

「お!かわした!」

真田、伴はまたしても無言。

ビッ

熊岡、外の新にパス。

しかし

バシィ！！！！

五十嵐がステイル。

新（完全にかわしたのに！！）

五十嵐

「花田さん！」

前線を走る花田にパス。

そして速攻が決まる。

湘北 45 - 47 陵南

「あつという間に逆転だー！！！！」

まだ陵南のディフェンスが牙を剥く。

ボールを持った新に五十嵐がプレッシャーをかける。

新（この人の圧力すごい！！）

バシィ！！

またしても五十嵐がスティール。

五十嵐

「もーらい」

そして

ドゴッ！！！！！！

壇之浦がダンクをかます。

湘北 45 - 49 陵南

「壇之浦きたー！！！！」

「後半序盤は陵南だー！！！！」

青空

「ぬりかべめ」

風間

「すごいディフェンスだ……」

伴

「ああ、奴の真骨頂だ」

真田

「あの瞬発力に反応速度はすごいものがある」

彦一

「やはりきたで!!!」

あのディフェンスは真田君と唯一渡り合えるかもしれないからな!
「!」

3Q開始1分

湘北 45 - 49 陵南

五十嵐の投入により、
陵南が流れを取り戻した。

4 3 機能

3 Q 開始 1 分

湘北 4 5 - 4 9 陵南

五十嵐の投入により陵南に流れがくる。

湘北の攻撃。

五十嵐はまたしてもタイトに新につく。

日下部がボールをキープ。

(あの 7 番が入ってきて、流れがあっちにいってる。ここはどっかで攻めるか?)

そのとき

「へい」

神谷がボールを要求。

日下部、神谷へパス。

(任せたで! 大和!)

神谷、朝井と一対一の体制。

そしてあっさりとドライブで抜く。

真田

「速い!!」

風間

「さすが大和！」

神谷、中に切れ込みシュートへ。

しかし壇之浦、白山がチェックに飛ぶ。

「高————い!!」

そこで神谷は横へパスを出す。

熊岡がノーマークでパスを貰う。

「ナイスパス!!」

しかし

バシィ!!!!!!

熊岡が持っていたボールが叩かれる。

熊岡

「!!!!?」

ステイルしたのは

花田勝頼

田岡

「ナイスカットだ!!」

彦一

「陵南のディフェンスがしっかりと機能した。このディフェンスこそが陵南の強い理由や!!」

陵南に攻撃が移り、ボールは五十嵐へ。

ディフェンスに新がつく。

（止める！！）

五十嵐があっさりとドライブで抜く。

新

（くそ！！）

三井

「新のやつ、前半に飛ばした疲れがもう出たか！」

ヘルプで熊岡が出る。

五十嵐、マークがあいた壇之浦にパス。

そのとき、即座に青空がヘルプ。

青空

「来いや！ぬりかべ！！」

壇之浦攻めずにハイポストの白山へ。

ニヤリと田岡

「白山のシュートレンジは広いぞ！」

ザシュ！！

湘北 45 - 51 陵南

「6点差だー！！！！」

「陵南のインサイドは壇之浦だけじゃないぞ！！」

田岡、その言葉に反応。

「もちろんだ！！」

風間

「あの7番が入ってから、陵南のディフェンスがかなりいいですね」

真田

「まああれが本来の陵南だからな」

伴

「風間。五十嵐のディフェンスをみてください」

五十嵐に目を向ける風間

「あの7番のディフェンス？」

コート上では日下部がミドルを外していた。

日下部

「くそー!!」

赤木

「リバウンドだー!!」

両チームのインサイド陣が争う。

そして

バツシイ!!!

リバウンドを取ったのは青空。

「よっしゃー!!!」

白山

(こいつー!!動きが素人だがリバウンドに関してはかなり強いぞ!!)

駒坂

「ナイスリバンだ青空!!」

「外出して拓馬くん!!」ノーマークで新が立っている。

「フミ!!」

新にパスを出す。

しかし

バシィ!!!

五十嵐がスティール。

新

(また!?)

青空

(空いてたたる!!)

三井

「あいつわざと新を空けて、そのパスを狙ってやがるな」

伴

「あれは脚力が相当ないとできない」

風間

「なるほど。だからパスアウトのスティールがあるのか」

真田

「そついつこと」

コート上では・・・

花田がフワリとゴールにパスを出す。

ゴール付近で壇之浦が飛ぶ。

そして

ドガッッッ！！！！

そのままリングに押し込んだ。

「すげえー！！！！」

「花田から壇之浦のアリウープだ！！！！」

湘北 45 - 53 陵南

彦一

「アンビリーバブルや！」

これで完全に陵南のペースや!!」

『ビーーーーー!!』

ここでブザーが鳴った。

「チャージドタイムアウト。白（湘北）」

腕組の赤木が無言で立っていた。

#44 お前達は強い

3Q残り2分

湘北 45 - 53 陵南

陵南のディフェンスの名手・五十嵐の投入により、点差が8点に開く。

ここで湘北がタイムアウト。

陵南ベンチ

田岡、手を叩きながら選手を迎え入れる。

「いい調子だ！ディフェンスが機能してるぞ！」

花田

「はい！」

田岡

「このまま新のマークを頼むぞ五十嵐！」

五十嵐

「はい！！」

田岡

「ゴール下はお前らがしつかりと仕事するんだぞ！」

壇之浦・朝井・白山

「はい！！！」

田岡

「今年こそ陵南が全国に行くんだぞ！！！」

一方で湘北ベンチ

赤木

「ディフェンスが変わって混乱したか？
お前らの力はこんなもんじゃない」

みんな無言で聞く。

赤木

「新！！お前の限界はこんなもんじゃないはずだ」

新

「はい！！！」

赤木

「熊岡も陵南のゴール下を崩せる力がある！！！」

熊岡

「はい！！！」

青空

(俺には何かねえのか?)

少し期待している。

赤木

「陵南はかつて全国に出たほどの強いチームだ!」

神谷

「.....」

日下部

「.....」

赤木

「だがな.....お前達も強いチームだ!!」

「はい!!!」

赤木

「言いたいのはそれだけだ!!行ってこい!!!」

- - - 観客席

伴

「本来の力を出したな。陵南は」

真田

「これを崩すのは難しいぞ。どつする湘北」

風間

「大和・・・」

熊岡

「神谷！青空！」

二人が熊岡の方を向く。

熊岡

「ゴール下がこのチームの基盤になっている。
壇之浦は俺に任せろ！
他の二人に絶対に負けるな！！」

青空

「負けるか！！絶対に抑えてやる！！」

神谷

「っす」

『……………』

「試合再開です！！」

両チームがコートに戻る。

彦一

「試合再開や！」

このディフェンスを崩すのは大変やで！！湘北はどう立て直すのか・
・・・要チエツクやで！！」

陵南のディフェンスは五十嵐のフェイスガードを除いて、ハーフコートマンツーマン。

湘北の攻撃でリスタート。

日下部がボールをキープ。

「一本いきましよう！」

ボールは日下部から神谷へ。

神谷、ドライブでディフェンスの朝井を抜く。

真田

「速い！！！」

風間

「相変わらずだな」

神谷、シュートモーションに入るが壇之浦がヘルプ。

如月

「ヘルプが早い!！」

神谷、ゴール下で空いた熊岡に落とす。

しかしすかさず白山がヘルプ。

「ディフェンスの連携がすごい!！」

熊岡が素早くパスを出す。

パスはミドルレンジの新に渡った。

五十嵐がすぐにつく。

新、そのままクイックでシュートモーションに入る。

五十嵐がこれに反応。

(慌てたか!?)

そこで・・・

ダム

シュートに入るのをやめ、ドリブルでステップバック。

立っている位置はスリーポイントライン。

新、シュートを打つ。

(・・・来い!!!)

ザシュ!!!

湘北 48 - 53 陵南

「スリーだー!!!」

「五十嵐のディフェンスをかわして打ったぞ!!!」

三井

「よし!!!うまくかわして打ったぞ!!!」

新

(このフェイスガードになんか負けてられない!!!絶対に全国に行くんだ!)

3Q2分30秒

湘北 48 - 53 陵南

新のスリーで反撃ののろしが上がるか!?

#45 流れをつかめ！

3Q2分30秒経過

湘北 48 - 53 陵南

湘北のシューター新がとうとう五十嵐からシュートを決める。

湘北ベンチ

「ナイシュウだ新!!!」

如月

「よし! やっと五十嵐から決めることができたわ!!!」

五十嵐

「やるねー。そう来ないと」

田岡

「ほほう。すぐ立て直して決めてきたか。しかし・・・流れは変わらない」

ハイポストで白山

「花田さん！こっち！」

トップの花田から白山へパス。

白山難無く青空を抜く。

青空

「くそ！！」

白山

(こいつのディフェンス、ど素人だな)

ヘルプで熊岡が出る。

白山からノーマークの壇之浦へ、シュートモーションに入る。

「おおー！！壇之浦だ！！」

しかし

チッ

打ったボールに誰かの手が触れる。

壇之浦

「なに!!」

神谷大和だ。

田岡

「ううっ……」

真田

「ほほう……」

神谷

(ちくしょう。叩けなかった)

シュートは外れる。

そして、リバウンドは

青空

「だりゃあああ!!!!」

空中でボールを取る。

駒坂

「よーし青空ー!」

青空

「はっはっはー!見たか!このリバウンド王の実力を!」

伴

「あの金髪、動きは素人丸だしたが、リバウンドに関してはすごいぞ!」

真田、ニコリ。

「確かに。風間の元チームメイトを含めて、面白い奴らがいるな」

風間

「あのガードも俺とタメらしいですからね」

コート上では日下部がドライブで切れ込む。

花田

(早い!!)

壇之浦、白山、朝井のインサイド三枚が囲む。

壇之浦

「ゴール下には入らせん!」

スッ

日下部、外にいる新にパス。

五十嵐

「こいつ!!よく動き回る!!」

新、五十嵐が追いついた後すぐに中に鋭いパスを出す。

一瞬空いた熊岡にボールが渡る。

バス

バンクショットを決める。

湘北 50 - 53 陵南

山岡

「3点差だ!!」

駒坂

「みんなで取った得点だ!!」

熊岡

「ナイスパスだ新!!」

新

「はい!!」

ハイタッチを交わす。

青空

「まあ俺のリバウンドがあつたからな!!」

呆れる日下部

「すぐ調子に乗る奴やな」

神谷

「えらそーに」

彦一

「湘北・・・やはりいいチームや!!」

今の得点、ディフェンスから全員が絡んでいる。これは陵南も苦戦するで!!」

腕組みの田岡

「今のプレーはよかったが、うちも負けん!!」

陵南の攻撃

花田からハイポの壇之浦へ。

ディフェンスの熊岡。

(勝負か!!)

壇之浦はドリブルもせず、ゴール下にバウンドパスを出す。

パスはゴール下に切れ込んだ五十嵐へ。

パスッ

レイアップを決める。

湘北 50 - 55 陵南

「うまい!!」

「壇之浦も良く見てるぞ!!」

赤木

「さすがは陵南。流れを内にくれない。

しかしここでまた流れをやる訳にはいかん!!」

神谷がドライブで切れ込みミドルを放つ。

ザシユ!!!

湘北 52 - 55 陵南

三井

「おお!!! すごいなあいつ!
プレイスタイルといい本当に流川そっくりだ!!!」

ここで陵南は壇之浦のゴール下でやり返す。

壇之浦

「さっきのお返しです」

熊岡、ニヤリ

「生意気な!!!」

そしてお互いどちらも一歩もひかないまま3Qが終了することになる。

3Q終了

湘北 62 - 65 陵南

決勝リーグを賭けた試合はラスト10分に移る。

4 6 ハイ&ロー

3Q終了

湘北 62 - 65 陵南

いよいよ決勝リーグを賭けたラスト10分が始まる。

両チームともメンバーは変わらず4Qに挑む。

真田 「両チームともメンバーは変わらないか・・・」

伴 「お互いベストメンバーかな」

風間 「さあ、どっちが上がってくるかですね」

(個人的には湘北を応援してるけど)

三井 「残り10分・・・絶対に勝てよ」

宮野 「また拓馬が出るみたいだ」

高杉 「頑張つて勝つてほしいな」

浩一 「拓馬・・・勝てよ」

4Qは陵南の攻撃から開始。

ボールが花田に渡つた。

ドリブルでキープしながら声を出す。

「一本取るぞ!!」

湘北のディフェンスは変わらずハーフコートマンツーマン。

腕組みの田岡 「ここは絶対に決めるよ。相手を乗らせたなら苦しくなる」

ハイポストに白山が上がる。

花田から白山にボールが入る。

腰を落とす青空 (止めてやるぜ!!)

しかし白山はもらってすぐに後ろにバウンドパスを出した。

ボールはローポストの壇之浦へ。

バスッ!!

熊岡をかわし、バンクショットを決める。

湘北 65 - 69 陵南

田岡、拳を握る。「よし!!」

(こんなところで負けてやれん!!)

次こそ海南、翔陽に勝って再び全国へ行くんだ!!)

「うまい!! 白山と壇之浦のハイ&ローだ!!」

青空 「くそ……」

青空の背中を叩く熊岡 「今は俺が壇之浦を空けてしまった。次やり返すぞ!!」

青空 「おつよ……!」

如月 「一本きっちり返すのよ!!」

日下部がボールを運ぶ。

陵南のディフェンスはハーフコートマンツーマン。しかし、3Q同様に五十嵐が新にフェイスガードでつく。

日下部 (また新さんに7番にべったりついてる。これは今回も新さんを使うのは難しそうや)

そのときハイポストに青空が上がってきた。

青空 「チビ助……!!パス!!」

赤木 「!?!」

如月 「あの子あそこにも何にもできないわよ!?!」

日下部 (パス出せって言っただって)

怒鳴る青空 「いいから早くだせ!?!」

日下部、渋々青空へパス。

(何にもできなかつたら許さへんで!?!)

青空にパスが渡った。

後ろには白山がついている。

青空 (……………!?!)

ビッ!?!

その瞬間、青空は後ろにパスを出した。

白山 「!？」

神谷 「！」

赤木 「!!!」

パスはローポストの熊岡へ。
取った熊岡もこのパスに驚く。

バスッ！！

熊岡がシュートを決めた。

湘北 67 - 69 陵南

「さっき同じハイ&ローでやり返したぞ!!」

白山を指さして青空 「さっきの真似させてもらったぜ!!」

白山 「・・・なんだと？」

今度は熊岡に向かって青空 「どうだ！俺のパスは！？
きっちりやり返してやったぜ！！」

熊岡 「ナイスパスだ！！絶対にこの試合勝つぞ！！」

青空 「あたりめえよ！！」

彦一 「アンビリーバボルや！！同じプレーでやり返すなんて！！」

真田 「あの10番。素人だと思いが面白いプレーするな」

伴 「動きが全く読めないな」

風間 「あれも俺とタメだもんな」

赤木 （全くあいつは面白いプレーをするな。よく思つが、あのころの桜木を見てるみたいだ）

青空が激を飛ばす。

「絶対に逆転するぞ！！」

新 「おう!!」

神谷 「えらそーに」

日下部 「当たり前や!」

熊岡 「次止めるぞ!!」

試合は終盤へと動き出す。

47 波

湘北 67 - 69 陵南

お互いにゴールを決め、4Qが始まった。

手をたたきながら熊岡 「一本止めるぞ!!」

花田がボールを運ぶ。

伴 「攻撃を止めた方に流れがくるな」

真田 「そうですね。しばらくシーソーゲームだったからな」

風間 「またインサイドで攻めるのか？」

花田がドライブを仕掛ける。

日下部が横に並んで走る。

そのとき

キュッ！！

青空（！！！！）

ハイポストの白山が動き、一瞬あく。

そこを花田は見逃さない。

白山にボールが渡った。

そのままシュート体制に入る。

しかし

青空 「撃たせん！！」

遅れながらも反応してチェックに飛ぶ。

白山 「！！！！」

彦一 「反応が早い！！」

「白山!!!パスだ!!!」

五十嵐がディフェンスの新をかわし、ミドルレンジに入ってきた。

新（くそ!!!）

如月（新君、徹底されたマークのせいで疲れが出始めてる!!!）

五十嵐にボールが渡り、そのままシュートへ。

しかし、今度は熊岡がチェックに飛ぶ。

熊岡（簡単に撃たせるか!!!）

五十嵐（高っ!!!……でもこうなったら、ここが空くぞ!!!）

空中で熊岡のマークがはずれた壇之浦にパス。

田岡 「よし！…よく見てるぞ！…」

壇之浦、シュートを放つ。

…が、一本の手が後ろからボールに伸びていた。

バツシイイイ！！！！

神谷のブロックショット炸裂。

壇之浦 （またこの一年坊主か！！）

駒坂 「ナイスブロックだ！！」

ルーズボールを熊岡が拾い、すぐ日下部に出す。

「ソッコー！！！！」

湘北メンバーが一斉に走り出す。

花田がしっかりとセーフティーで戻っていた。

花田 「ここは決めさせない!!」

田岡 「よく戻ったぞ花田!!」

日下部 「さすがに戻りが早いで!!」

神谷 「へい」

パスを要求。

ボールは神谷へ。

ディフェンスの朝井もすでに戻っている。

朝井 「もう抜かせねえ!!」

ピクッ！！ 中を見る神谷。

神谷 「いや、抜く必要はねえ」

朝井 「!？」

神谷はゴールに向かってボールを放った。

そのとき

ドストドス。

熊岡が地響きをたてながら中に走ってきた。

熊岡 「ウホッ！！」

そして空中でボールをつかみ、そのままリングに叩き込んだ。

ドガッツツツツ！！！！

ボースハンドダク炸裂。

湘北 69 - 69 陵南

「同点だ——!!!!」

「ついに湘北が追いついたぞ——!!」

「あのセンターよく走ったな——!!」

「いや、その前のディフェンスも凄かった——!!」

田岡 「!!!!!!」

赤木、ガッツポーズ。 「よ——し——!!」

駒坂 「熊岡——!!」

「同点だ——!!!!」

沸き上がる湘北ベンチ。

青空 「ドンキー!!」

熊岡 「ナイスパスだ!神谷!!」

手を差し出す。

神谷、その手を叩く。

「しす」

三井 「熊岡のやつ、よく走ってたな!!」

伴 「熊岡……」ここまでのはやっだったとは思わなかった」

真田、苦笑い。「しかしすごい迫力のダンクだな」

風間 「……まるでゴリゴリだ」

湘北の猛攻は止まらない。

日下部が花田からボールをカット。

花田 「……！」

田岡 (まずい……完全にさっきのダンクでのまれてる……！)

「新さん……！」

すぐさま新にパス。

ノーマークでボールが新へ。

立っているのはスリーポイントラインの前。

五十嵐 「まずい……！」

急いでチェックに向かう。

しかし、間に合う前に新はシュートを放った。

新（絶対決める！！）

ザシュ！！！！

「スリーを決めたー！！！！」

「ついに湘北逆転だー！！！！」

湘北 72 - 69 陵南

「よっしゃー！！！！」

湘北ベンチ、またしても歓喜にわく。

新、ガッツポーズ。「よし!」

青空 「でかした!フミ!」

熊岡 「よく決めた!」

そして

三井 「よし!よくやったぞ!」

『ゴゴゴ……』

「タイムアウト!青(陵南)!!」

田岡 「完璧に向こうの流れだ。ここは一旦切る。」

4Q残り8分。

湘北、とつとつ逆転。

48 本物

4Q残り8分

湘北 72 - 69 陵南

神谷から熊岡のアリウープ、
日下部のステールから新のスリーポイント
の連続得点で湘北ついに逆転。

ここで陵南がタイムアウトをとる。

彦一 「湘北が逆転。やはりただもんやないで。陵南はこのまま引き下がらないと思うけど」

母校なので陵南を応援。

伴 「あのスリーを決めたのは大きい」

真田 「これで流れは湘北ですね」

風間 「あの14番のディフェンスも見事だ」

・・陵南ベンチ

田岡 「まだ8分もある。焦る必要はない。
とりあえず相手の流れを決めることを考えるんだ!!」

「はい!!」

田岡 「五十嵐はこのまま新につけ!!あとあと成果がでるはずだ
!!」

五十嵐、ニヤリ。 「まかせてください」

田岡 「壇之浦、熊岡は想像以上か？」

壇之浦 「はい。・・・でも止めてみせます」

微笑む田岡 「フッ。任せたぞ」

・・湘北ベンチ

赤木 「よくやった！！今流れはうちだ！！とことん攻めていけ！！」

「はい！！」

熊岡 「決勝リーグに行くのは俺達だ！！絶対勝つぞ！！」

青空 「当たり前だ！！」

『ブーーーーー……！！』

タイムアウト終了を告げるブザーが鳴る。

田岡 「8分後に笑ってんのは陵南だ！！湘北を倒してこい！！」

赤木 「残り8分一分たりとも気をぬくな！！」

両チームがコートに戻る。

陵南ボールから試合再開。

彦一 「さあ立て直しの攻撃はどいつするか、要チエックやで!」!

花田がボールをキープ。

日下部 (誰を使って攻めるか)

ダムッ!!

日下部 「!」!

花田、ドライブイン。

日下部の反応が遅れ抜かれる。

ザシュー!!!

花田がそのままシュートを決める。

湘北 72 - 71 陵南

ポンッ 日下部の肩を叩く花田

「自分で攻めるとは思わなかったかい??」

日下部 「!!」

(油断できない人やで)

パンパン 手を叩く田岡

「よく決めたぞ花田!」

しかし湘北はすぐに返す。

バスッ!!

「また熊岡だー!!」

湘北 74 - 71 陵南

熊岡 「ディフェンスだ！戻れ！！」

日下部 「おうー！！」

新 「はい！！」

青空 「絶好調だなドンキー！！」

三井 「前半はどうなるかと思ったが、熊岡が目覚めたみたいだな」

(ゴール下の威圧感と言い本当に赤木そっくりだな)

ガンツ！！

白山のシュートが外れる。

「おらああああ！！！！」

青空がリバウンドを取る。

如月 「ナイスリバンよ青空拓馬！！」

伴 「まだ流れは湘北みたいだな」

日下部 「陵南のゴール下と闘えるとは……」

真田 「湘北が勝ち上がってくるかもな……」

ザシュ！！

神谷がシュートを決める。

湘北 76 - 71 陵南

「差がさらに開いたぞ！！」

真田 「奴らの強さは本物だ」

#49 反撃の前兆

4Q残り6分

湘北 81 - 73 陵南

湘北の攻撃が続き、点差は8点と離れていた。

バストッ！！

熊岡のゴール下が決まる。

壇之浦 「くそ！！！」

湘北 83 - 73 陵南

赤木、拳を振り下ろす。 「よーし！！！」

「おおー！！！！！」

「熊岡が止まらないぞー！！！！！」

「これで点差が二桁になったぞー！！！」

高野 「二桁……」

「まだ終わりじゃないぞ高野」

腕組みの田岡が口を開く。

高野 「先生……」

田岡 「まだ時間がある。しばらくの辛抱だ」

ガンツ！！

五十嵐のシュートが外れる。

バツシイイイ！！！！

このリバウンドを熊岡が取る。

青空 「ドンキー!!」

熊岡 「最初の大口はどっか行ったか。壇之浦よ」

壇之浦 「!!」

(・・・くそ!!)

如月 「先輩、あの壇之浦を圧倒している」

駒坂 「勝てるぞ・・・」

日下部がドライブイン。

花田がついていく。

(パスで来る!!)

しかし、そのままシュートを入れる。

パスッ!

「自ら行ったー!!」

「あのガード速いぞ!!」

日下部、ニヤリ 「自ら行くとは思いませんでしたか？」

花田も笑みを浮かべる。

(こいつ・・・)

風間 「あいつのドライブ速いな!!」

伴 「もし湘北が上がってきたら、あのガードにつくのはお前だ。しっかり見ておけ」

風間 「はい」

バッシィィィ!!!!

「今度は青空のリバウンドだー！ー！ー！」

「湘北のインサイドつえー！ー！ー！ー！ー！」

青空 「さすが俺様！ー！」

彦一 「陵南の攻撃のリズムが悪い。それにリバウンドもずっと湘北に支配されとる」

今度は神谷がドライブからシュートを決める。

湘北 85 - 73 陵南

朝井 (こいつ・・・本当に一年か？止められる気がしねえ)

青空 「カミヤなんかにやられてんじゃねえよ」

朝井 「え？」

(味方じゃないのかよ)

如月 「神谷もすごいわ！あんなに淡々とシュートを決めるなんて」

赤木 「本当にたいしたやつだよ」

(多少自分勝手なところが流川に似てるが)

三井 「いい調子だな。しかしわかってると思うが、陵南はこのまま引き下がらないぜ。赤木先生よ」

真田 「もうそろそろ流れを止めたいところだな」

風間 「確かにこのまま続くと手遅れになる」

伴 「そういつときはあいつに任せるしかない……」

花田からローポストの壇之浦にボールが入る。

「壇之浦と熊岡の一对一だ!!!」

壇之浦 「決めてやるぜ」

熊岡 「来い! 決めません」

ダムツ!!

壇之浦、ドリブルについて背中で押し込む。

熊岡 (相変わらず重いやつだ)

キュキュツ!!

壇之浦、一回フェイクを入れ逆にターンシュート。

キュツ!

熊岡、フェイクに引っ掛からずについていきチェックに飛ぶ。

しかし

シュートが放たれない。

熊岡 「!!!!」

壇之浦はポンプフェイクを入れていた。

ガッ!!

体を熊岡に当てながらシュートを放つ。

ガンッ!!

ボールはリングの上方に少し跳ねる。

壇之浦 (入れ!!!!)

パスッ。

跳ねたボールはリングを通過した。

『ピューーーーー……!』

「ファール!!白4番!!カウントワンズロー!!」

湘北 85 - 75 陵南

吠える壇之浦 「うおーしゃーーーー!」

「カウントだーーーー!」

「得意のパワープレイで決めたーーーー!」

陵南ベンチも盛り上がる。

「よーし……!」

「ナイス！！壇之浦！！」

伴、ニヤリ。「あそこで決めるあたりはさすがだな」

風間「これで流れは陵南に……」

真田「まだわからないが、反撃の前兆が出たな」

オフィシャルテーブルでは『3』の文字が点灯される。

それを見て田岡が笑みを浮かべる。「よくやったぞ壇之浦！これでもうそろそろ逆転への土台ができる」

#50 もう一つの動き

4Q残り5分

湘北 85 - 75 陵南

熊岡、壇之浦からバスカンを取られる。

これにより熊岡のファール数は「3」となる。

熊岡 「くそ!!」

日下部が声をかける。

「どんまいですキャプテン!!!リバウンドたのんますよ!!」

熊岡 「おう」

青空が会話に乱入。 「いやチビ助。心配することないぞ」

日下部 「あ?」

青空 「ゴール下にはこの青空拓馬様がいるからよ！だーはっはー
ー！！！」

高笑いをする。

神谷 「……ばかやるー」

ベンチから赤木の激が飛ぶ。

「熊岡！！ファール気をつけるよ！！！」

コクリ

頷く熊岡。

如月 （熊岡先輩のファールトラブルも心配だけど、それ以上に新君の体力の方が心配だわ）

新 （……）

「ワンスロー」

壇之浦にフリースローのボールが渡される。

花田 （決めてくれ！）

白山 （リバウンドは任せろ！！）

田岡 （・・・頼むぞ！！）

風間 「これを決めれば、陵南にとって大きいですね」

伴 「でもあいつフリースロー下手だからな」

真田 「そこが伴さんとの違いですね」

腕を組みながら伴 「ふん」

壇之浦 （決める！！）

一呼吸おきシュートを放つ。

ガンッ！！

壇之浦 「！！！！」

「リバー……ン！！！！」

両チームがリバウンドに飛ぶ。

「ふんぬああ……！！！！」

リバウンドを取ったのは熊岡。

駒坂 「熊岡！！！！」

山岡 「先輩！！ナイスリバン！！」

真田 「流れは陵南に行かず・・・か」

ボールはミドルポストの熊岡に入る。

「また熊岡で勝負か！？！？」

しかし熊岡、外の新にパス。

如月 「新君！！！！」

厳しいチェックに向かう五十嵐

（撃たせねえ！）

五十嵐がつく前に新が中にバウンドパスを出す。

五十嵐 「!!！」

中には青空が走りこんできた。

浩一 「行け!! 拓馬!!！」

青空 「くらえ! レイアツペ!!！」

パスッ

湘北 87 - 75 陵南

「決まった——!!！」

「また12点差だ——!!！」

青空 「どつだつミ？俺のレイアップは？」

手を挙げる新 「なかなかかな。ちなみにレイアップね」

その手を叩く青空。

「今のはパスがよかった」

走り際に神谷が言う。

青空、憤慨。

「なんだと!？」

彦一 「壇之浦君のプレーで少しは流れが傾くかと思っただけ、全く崩れないで!!」

熊岡君・・・すごい選手や!!」

伴 「フリースローを決められなかったのが痛かったな」

真田 「こつこつうときにあの弱点は厳しい」

風間 「しかし熊岡さんすごいな!!・・・てか本当にゴリラだ」

田岡 「今は熊岡が基点となって湘北の流れが来ている。きっとあいつは海南の伴に匹敵するぐらいの選手かもしれない!!
やつを下げることでできれば・・・」

熊岡を見る五十嵐 (・・・熊岡信博。壇之浦相手にここまで戦えるとはすごいやつだ)

そして壇之浦に話しかける。

「壇之浦!ちよつと耳貸せ」

壇之浦 「??」

五十嵐の話聞き頷く。

「・・・わかった」

ザシユ!!

陵南は朝井がミドルを決める。

湘北 87 - 77 陵南

朝井 「お前にやられてばかりだったからな」

無愛想に神谷 「ふん」

風間 「陵南もやっとシュートを決められるようになりましたね」

真田 「やはりあのバスカンのおかげかな」

伴 「でも逆転するには完全に流れを引き寄せないとまずい！
なにかもう一つ動きがあれば……」

日下部がボールをキープしている。

(ずっとインサイドに頼って得点してきたから今度は……)

ダムッ！！

ドライブで花田を抜く。

花田（速い！！）

五十嵐、とっさにヘルプで日下部につく。

日下部（外や！！）

ビッ！！

ヘルプでマークが外れた新にパスを出す。

日下部「新さん、たのんます！！」

新がノーマークでシュートを放つ。

新（・・・！！！！）

バンツ！

リングに当たらずボードに当たってシュートが落ちる。

赤木 「！！！！」

如月 「新君！！」

五十嵐 「！！！！」

田岡 「！！！！」

「リングから大幅に外れた！！！！」

しかしルーズボールを青空が取る。

「どりゃああ！！！！！！！！」

浩一 「拓馬！！」

駒坂 「青空！ナイスだ！！」

青空 「ドンキー！！」

すぐにローポストの熊岡にパス。

ディフェンスの壇之浦 （熊岡さん！！）

スツ 少し間が空く。

ピクツ！ その間を感じとり熊岡ターンシュートへ。

キュツ！！

ドンッ！！！！

熊岡の体に何か当たった。

そこには五十嵐倒れていた。

『ピーーーーー！！』

「オフエンスチャージング！！白4番！！」

熊岡 「！！！」

赤木 「！！！」

「チャージングを取ったぞーーーー！！」

「ということ……」

オフィシャルテーブルでは「4」の数字が点灯。

「熊岡、ファール4つだーーーー！！」

田岡、ニヤリ。

「よー…。」

五十嵐 「熊岡さんよ。少し大人しくしてもらっせ」

5 1 逆転劇開始

4 Q 残り4分

湘北 87 - 77 陵南

五十嵐のファインプレーにより、熊岡から4個目のファールを奪つ。

「熊岡4つ目だー！ー！ー！ー！」

「この時間帯は痛い！」

壇之浦 「ナイスだ！！」

五十嵐に手を差し出す。

その手を取り立ち上がる五十嵐 「作戦成功だな。これからはお前が攻める番だぜ」

壇之浦 「任せろ！！」

彦一 「壇之浦君と五十嵐君の見事な連携プレイや!」

風間 「うまく熊岡さん呼び寄せましたね」

真田 「相変わらずいやらしいディフェンスするな」

伴 「さすがだ」

田岡 「よくやったぞ五十嵐!これで流れはうちに傾きつつある。それと……」

ニヤリ。

「もう一つ達成できれば、逆転勝利が見える」

高野 (……不気味な笑みだ)

声をかける日下部 「どんまいです。ファールに気をつけてくださいね、キャプテンが抜けるわけにはいかへんのですから」

熊岡 「わかってる」

如月 「先生……」

赤木は動かず立っている。

「このままいくぞ！こんなところで引つ込めたりはせん！！」

三井 「赤木のやつ、このまま熊岡を出すつもりか！？」

確かに今の時間帯にあいつの代わりはいないが……5個目になったら終わりだぞ！！」

コートでは壇之浦がゴール下を沈める。

バスッ！！

「熊岡のところから決めてきたー！ー！！」

「これで点差は一桁だー！ー！！！！」

田岡 「弱つてるところは徹底的に攻めるー！！」

風間 「これで流れは陵南かな？」

伴 「ああ熊岡のファール数以外にも欠点が出来たからな」

真田 「さっきのシュートを見てるとほぼ確実かな？」

風間 「??？」

そのとき

「キャッチミスだー！ー！！」

新がボールをファンブル。

新 「！ー！！」

青空 「フミ！ー！！」

如月 「新くん!!」

三井 「!!!」

五十嵐がすかさずボールを取り、前線を走る花田へ。

パスッ!!

湘北 87 - 81 陵南

「決まったー!!」

「これで6点差だー!!」

伴 「とうとう限界が来はじめたか」

田岡 「五十嵐!!」

五十嵐に指示を送る。

それを聞いて頷く五十嵐。

陵南のディフェンス。

五十嵐が新から距離を離す。

「陵南、ディフェンスを変えてきた!!」

彦一 「ここで動いてきたか!!」

湘北の攻撃。

日下部から神谷へボールが渡る。

ダムツ!!

朝井をドライブであっさり抜く。

しかし、五十嵐も神谷につく。

「ダブルチームだー!!」

神谷は二人がかりでもものともしない。

「おおー！ー！！抜いてきたー！ー！！」

五十嵐、ニヤリ。

「ぎーんねん！ー！！」

神谷 「！！！」

抜いた先には壇之浦が立っていた。

真田 「うまい！ー！！」

三井 「わざと方向づけして追い込んだな」

壇之浦 「はたき落としてやる！ー！！」

日下部が叫ぶ。

「大和ー！無理すんなー！新さんが空いてるー！」

外で五十嵐のマークが外れ、新が空いている。

神谷（ちっ・・・でけーな）

外の新にパス。

ノーマークで新へ。

日下部「新さんー！シュートー！」

新、シュートを放つ。

駒坂「入ってくれ！」

山岡「入れーー！」

しかしボールはリングに届かない。

新 「!!！」

如月 「……！」

三井 「!!！」

「エアボールだー!!！」

バツシイ!!!

そのボールを熊岡の上から壇之浦が取る。

壇之浦 「よーし!!！」

白川 「ナイス!!！」

熊岡 「くそ!!！」

青空 (……ドンキー)

伴 「やっぱり新はガス切れか」

真田 「さっきのシュートでほぼ決定的だったですね」

伴 「情報によると復帰1ヶ月で前半の飛ばし具合と、後半の五十嵐の徹底マークを振り切るために走り回ってたんじゃ無理もない」

真田 「熊岡も4ファールで、攻め手を2つ失ったことになるな」

風間 「ということは……」

田岡 「攻め手は神谷だけになる。層の薄さからあの二人の代わりはいない!!あとは神谷を徹底的に止めればいいだけだ!!
これで要素は揃った!!……」

ニヤリ。

田岡 「これから陵南の逆転劇開始だ!!」

52 徹底的に中？

残り3分30秒

湘北 87 - 81 陵南

田岡、ニヤリ。

「あとは逆転するだけだ!!」

陵南の攻撃、花田がボールをキープ。

花田（今はここを攻めるしかない!）

ゴール下の壇之浦にパス。

熊岡を背負った状態でもらう。

壇之浦 「ファールこわいですよね?」

熊岡 「!?!?!」

ダムッ！

壇之浦、ドリブルをつきながら背中で押し込む。

「……ぐ」

熊岡、簡単に押し込まれる。

青空 「ドンキーー!!」

バスッ!!

湘北 87 - 83 陵南

「壇之浦決めたー!!」

「4点差ー!!」

「逆転射程圏内だー!!」

彦一 「穴があればとことん攻めてく。相変わらず先生の采配はすごいでー!!」

湘北、神谷にボールに入る。
またしても五十嵐が神谷に寄った位置で守る。

三井「新のガス欠を見込んで神谷を止めについてやがる!!」

ダムッ!!

神谷、ドライブするも抜けきれない。

「あー二人だからなかなか抜けない!!」

風間 「二人だとさすがの大和でもぬけない」

伴 「ディフェンスの一人が五十嵐だからな」

真田 「あいつのディフェンス力は県内屈指だからな」

腕組みの田岡

「五十嵐はディフェンスはうちでNo.1だ!!
神谷おるか真田も止める力を持っているはずだ!」

五十嵐 「悪いがディフェンスで負けるつもりはないんでね」

神谷 「くそ……」

「大和ー!! 24秒になるで!早くだせ!!」

日下部、神谷の方へ走りながらボールをもらいに行く。

神谷 (抜ける自信あるのに……)

渋々、手渡しで日下部にパス。

キュッ！！

パスをもらってストップ。

ダムッ！！

そして、急発進。

花田を抜き去る。

花田（！！！！）

風間「はやい！！！！」

しかし

ガンッ！！

シュートはリングに当たる。

日下部 (くそ……なぜ決まん!!!)

「リバー……!!!」

ガシ。

壇之浦、簡単に熊岡を押さえ込む。
そしてリバウンドを取る。

壇之浦 「よっしゃー!!!」

白川 「ナイス!!!」

熊岡 (くそ……あと一つファールを取られたら)

(……)

青空は無言で熊岡を見つめる。

田岡 「よーし!!!」

(完全にうちの流れだ!!!この試合もらつぞ!!!)

如月 「熊岡先輩がかんたんに押さえ込まれてる」

赤木は無言のままじっと動かない。

「また壇之浦だー！ー！ー！」

壇之浦がローポストで熊岡をかわし、シュートへ。

ダンー！！

「ドンキーに任せてられっかー！！」

青空がチェックに飛ぶ。

ピッ。

熊岡、マークがあいた白川にパス。

白川 「ナイスパスー！！」

ザシュ!!

湘北 87 - 85 陵南

「白川のミドルだー!!」

「1ゴール差ー!!」

花田 「よーし!!」

朝井 「ナイシュウ!!」

五十嵐、拳を握る。

風間 「あーあ、こりゃあ完璧に陵南のペースですね」

伴 「前半と同じように熊岡が機能しない!!」

彦一 「陵南のツインタワーが機能するわけや!!」

コート上では新のシュートがまたしてもエアボールで落ちる。

新 「!!!」

三井 「フォームもバラバラだ。どう見てもあいつは限界だぞ!!
なぜ下げないんだ赤木!？」

真田 「前半のキーマンの新もこの調子だ」

ボールを朝井が取る。

朝井 「花田さん!!」

すぐに花田にパス。

花田 「一本じっくりとるぞ!!」

ディフェンスの日下部

(くそ・・・流れが良くない。熊岡さんのファール数から、徹底的に中を攻めてくるはずや!!
ここは中のパスを警戒せんと・・・)

中へのパスを警戒し、離れて守る。

そのとき

・・・シュツ!!

花田がキープから、ジャンプシュートを放った。

スリーポイントラインの手前。

日下部 「・・・え!?!」

赤木 「!?!?!」

如月 「!?!」

伴 「え?!?!」

真田 「・・・!?!」

・・・シュパッ。

花田のうったシュートはリングを通過した。

残り2分30秒

湘北 87 - 88 陵南

陵南が逆転。

#53 賭け

4Q残り2分30分

湘北 87 - 88 陵南

「逆転だーーーーー!!!!」

「花田のスリーだーーーー!!!!」

花田のスリーが決まり、陵南が逆転。

田岡 「よーーーーし!!!!」

壇之浦 「花田さん!!!!」

五十嵐 「うし!!!!」

陵南ベンチ 「ナイシュウ!!キャプテン!!!!」

日下部 (中を意識しすぎた。完全に裏をかかれたで)

『……………!!!!』

「タイムアウト!!白(湘北)!!」

ここでたまらず赤木がタイムアウトをかける。

真田 「花田さん、完全に裏をかけたな」

風間 「あの人、外も入るなら早くから狙えばよかったのに」

伴 「いや、あいつはあまり得意ではないはずだ。だからこそ序盤から狙わなかったんだ」

風間 「では……なぜ今外を??」

真田 「今の流れを利用して一気にたたみかけたかったんだろ」

伴 「例え落としてもリバウンドを取ってくれらるという信頼もなきやできない!」

真田 「まあ賭けだな」

風間 「となれば賭けが成功というわけか・・・」

(まずいな・・・大和、なんとか打開しろ！！)

陵南ベンチ。

手を叩く田岡。

「よく決めたぞ花田！！」

五十嵐 「まさかキャプテンが外から撃つなんて思わなかったぜ」

壇之浦 「ああ」

花田、ニコリ。

「騙すのは味方からだ。それに落としてもうちのインサイドは強いから安心だしね」

壇之浦 「花田さん・・・」

白川も笑顔で返す。

田岡 「逆転したからってまだ気は抜くな!!
今のスリーで外にも意識がいくはずだ!中できとことん攻めていけ!
!」

「はい!!!!」

三井 「熊岡は代わりがないから仕方ねえけど、新はもう代えた方がいい」

『ビーーーーー!!!!!!』

タイムアウト終了のブザーがなる。

両チームがコートに戻る。

陵南、湘北ともにメンバーは変わらず。

彦一 「熊岡くんも新くんもそのまま残してきたで!!」

三井 「おいおい・・・新を残すのかよ。何考えてんだ赤木」

如月 「先生・・・新くんは下げた方が」

「・・・」

赤木は無言で腕組みして立っている。

湘北ボールから攻撃を開始。

伴 「もう点を取れないと湘北はまずいぞ」

新がフリーでシュートを放つ。

ガンッ！！

リバウンドは壇之浦が取る。

「攻撃外れたーーーー！！！！」

新（くそー！なんでこんなにへばってるんだ！
せっかく出してもらってるのに、これじゃあ足を引っ張ってるだけ
だ）

三井 「新のシュートが全く決まらない」

ベンチにいる赤木が口を開く。

「あいつはまだこんなもんじゃない」

如月（信頼してるのはわかるけど・・・）

陵南の攻撃。

ボールをキープする花田。

日下部は外を警戒し、距離を詰めて守る。

（また外をうつつてくるかもしれへんからな）

しかし花田はハイポストの白川へパス。

青空 「止めーる!ー!」

キュッ

白川はスピンターンからシュート。

ダンッ!ー!

青空はそれについていく。

しかしシュートは放たれない。

青空 「!ー!」

神谷 (ばかやろー。あからさまにフェイクだろ)

白川から壇之浦へ。

ディフェンスの熊岡。

(くそ！むやみなディフェンスができない)

バスッ！！

簡単にゴール下を決める。

神谷 (ちくしょう・・・こんなところで負ける訳にはいかねえんだよ)

青空 (ぬりかべめ！調子に乗りやがって!!
ドンキーもファールにビビって何も役に立たねえ)

日下部 (流れを一刻も早く止めへんと)

このまま陵南の攻撃は着々と進み・・・

残り1分30秒

湘北 87 - 92 陵南

差が開いていった。

しかしここから湘北の一年トリオが動き出す。

#54 決めさせられない一本

残り1分30秒

湘北 87 - 92 陵南

今だ陵南のペース。

「いけいけ陵南!!おせおせ陵南!!」

観客席の応援団が盛り上がる。

青空 「ちっ。うっせーんだよ!!」

神谷 (くそ・・・ぜってー流れを変えてやる!!)

日下部 (このままだとまずい!!時間がない!!)

熊岡 (あと一つで退場・・・俺が下がる訳にはいかん!)

新 (・・・くそ・・・これじゃあ足引っ張ってるだけだ)

如月 (完全に陵南にペースを奪われてる。

それに新君をまだ出しつづけるなんて差を拡げる一方よ・・・先生

は何を考えているのかしら)

赤木 「……」

ガンツ!!

日下部のシュートが外れる。

(なんで入らへんのや!!)

そしてリバウンドは壇之浦が取る。

壇之浦 「おっしゃー!!!!!!」

「また壇之浦だー!!!!!!!!」

「すごい!!!!!!」

「完全にゴール下を制圧してるぞ!!!!」

田岡 「よーし!!!!いいぞ壇之浦!!!!」

(あいつは去年からかなり延びてる。今や海南の伴にも渡り合える

はずだ！)

ピクッ。

伴 「ん??？」

風間 「どっしたんですか??？」

伴 「いや、何でもない」

(誰かに噂されてる気がした・・・)

コートでは壇之浦がシュートを決める。

湘北 87 - 94 陵南

「壇之浦決めたー!!」

「これは陵南に勝ちが決まったか?!?!?」

風間 「確かに周りが言うようにこれで決まりですかね」

伴 「ああ」

頬杖をつき無言の真田

「……………」

熊岡 (くそ！…………全部俺のところで決められてる)

「……………」

熊岡を無言で見つめる青空。

彦一 「陵南の勝ちほぼ決まりな感じやけど……
まだわからん！！ましてや相手はあの湘北！！
10年前は土壇場でもすごい強さを発揮してた」

(そしてそのときのメンバーの一人の赤木さんが監督や！油断でき
へん！！！)

「陵南がボールを取った……！！！！」

新がボールをファンブル。
それを朝井が取った。

新 「あ……」

三井 「体力の限界だ……」

青空 「フミ!!!」

神谷 「ばかやろー」

ボールが花田に渡り速攻へ。

「走らせんで！」

日下部が戻る。

花田 「早いな」

如月 「なんとか速攻は止めたわね……でも次決められたら……」

日下部 (さすがにもう決められたらあかん！)

中を一番注意するべきやけど、この人また外で撃つかもわからへん)

花田 (やっぱりさっきの外が効いてるみたいだね。

でも中で攻めるよ。

内には怪物がいるからね)

花田が中へパス。

「壇之浦だー！ー！」

宮野 「うわー！あのでっかい奴、ボール渡っただけであの歓声かよー！」

高杉 「さっきからずっとあいつが目立ってるからな」

浩一 「さすがにこれ以上決められるとまずいんじゃないか？」

(拓馬！どうにかしろよ！！)

壇之浦がパワープレイで熊岡を押し込む。

壇之浦（やはり退場が怖いか！さっきより全然力を感じられん！）

押し込まれる熊岡

「くそ！！」

壇之浦、シュートへ。

「お前らに全国は譲らん！！」

熊岡は壇之浦の前方で飛ぶも止めきれない。

田岡「決める！！！！」

「いけーーーー！！！！」

陵南ベンチ、観客席の応援団と共に一丸となって叫ぶ。

しかし・・・

熊岡の影からもう一人の男が飛んできた。

「決めさせーん!!」

壇之浦 (こいつ!!)

浩一 「拓馬!!」

バツシイイイ!!

上空に伸びた青空の手が壇之浦のシュートを叩いた。

「壇之浦を止めたー!!」

赤木 「よーし!!」

しかしボールはラインに向かって転がっていく。

ベンチから叫ぶ如月 「ルーズボールよ!!」

そのボールに向かって一人飛び込む。

駒坂 「日下部!!」

日下部、空中でボールをキャッチ。

そのとき、神谷がボールをもらいに走ってくる。

神谷 「へい」

日下部 「頼んだで!大和!!」

空中の無理な体勢からボールを神谷へ放り投げた。

神谷がボールを取り、一人で速攻へ。

山岡 「いけー!!」

しかし前には五十嵐が戻っている。

五十嵐 「簡単にいかせねえよ!!」

田岡 「よく戻ったぞ五十嵐!!」

神谷 (ディフェンスが上手いんだか知らねえが……ぶっ倒すま
でだ!!)

神谷は勝負を仕掛けた。

「五十嵐と神谷の二対一だ!!」

風間 「大和!!」

神谷、高速フロントチェンジで方向転換。

五十嵐はそれについていく。

伴 「やはり五十嵐が上か？」

神谷 (こんなところで負けてられねえんだよ!!!)

五十嵐 「!!!」

すぐにスピントーンで五十嵐を交わした。

花田 (五十嵐が抜かれた!!!)

そしてゴールへ飛ぶ。

青空 「ぶち込め!!!」

ドガッアアアア!!!

神谷は片手でリングに直接ぶち込んだ。

5 5 俺の仕事

残り1分

湘北 89 - 94 陵南

神谷はリングにぶら下がっている。

ダンッ。

「ダックを決めたー！ー！！」

「あの五十嵐を完全に抜いたー！ー！！」

着地と同時に歓声が響く。

如月 「神谷！ー！！」

赤木は無言で拳をにぎりしめる。

「その前の金髪のプロックショットもすごかったぞ!！」

「あいつのジャンプ力やばいな!！」

田岡 (神谷、青空に壇之浦、五十嵐の二本の柱を崩された)

「……あの二人、昔の流川と桜木を思い出させる」

青空 「ファールなんかにビビってるんじゃないよ」

熊岡 「あ!？」

青空 「全部あのぬりかべんところでやられてんじゃないかねえか。
ゴール下は俺達で守るんじゃないかなかったのかよ」

熊岡 「……!！」

神谷は新のもとへ

「ガス欠で何にもできねえんなら下がれよ」

新 「!！」

神谷 「はっきり言って迷惑だ。出るんだったら自分の仕事をしっ

かりやれ！」

新 「……………」

五十嵐 「朝井、ディフェンス俺と代わってくれ」

朝井 「…………残り1分しかねえぞ」

五十嵐 「それでもいい。

俺がああルーキーを止めてやるぜ」

朝井 「…………わかった」

(普通に抜かれて、お前が燃えない訳ないよな！)

伴 「五十嵐があっさり抜かれるなんて…………真田以来じゃないか？」

真田、ニコリ。

「そうですか？」

まあ風間の元チームメイトはただ者ではないっていうのはわかるけどな」

風間 「あいつは全中のときもやばかったですから」

(完璧に負けたのは、今福岡にいるあいつぐらいだったからな)

真田 「もう一人もただ者ではないね」

伴 「あいつのことだろ??」

「.....」

風間はコートをじっと見つめる。

彦一 「五十嵐君を抜いた神谷君は評判通りすごいけど、壇之浦君をブロックした青空君も荒々しいがただ者やないで!!
発展途上みたいやし・・・もし伸びたら、どんな選手になるんやるか」

花田がボールを受ける。

「当たれ!!!」

日下部の掛け声と同時に湘北ディフェンスは前から当たる。

三井 「当たり前だ!もう時間は一分をきってやがるんだ!」

(しかし熊岡は4ファールで、新はガス欠状態だ。)

陵南はこのディフェンスをパス回しで対応。

「さすが陵南！！当たられても動じない！！」

田岡 「当たり前だ！！全国に行くために技術だけでなく精神面でもみっちり鍛えたつもりだ！！」

花田、五十嵐、朝井を中心にパスを回す。

日下部 「ちくしょう！捕れへん！！」

青空 「ちまちま回しやがって！！！！」

如月 「時間を稼いでる！！」

24秒タイマーが残り10秒を切ったとき、陵南が動く。

朝井 「壇之浦！！」

朝井からローポストの壇之浦にボールが入った。

背後には熊岡がディフェンスにつく。

駒坂 「やっぱり熊岡のところを狙ってきた!」

赤木 「熊岡!」

壇之浦 「全国に行くのは俺達、陵南ですから!」

熊岡 「!」

ダンッ!!

壇之浦、パワープレイでシュートに持ち込む。

田岡 「行け!」

青空 「ドンキー!」

熊岡 「!」

……ゴール下は俺達で守るんじゃないのかよ

熊岡 「全国に行くのは、湘北だ――！！！！！！」

バツシイイイイ！！！！！！

熊岡の力のこもったブロックショットが炸裂。

赤木 「よ―――し！！！！！！」

田岡 「！！！！！！」

ルーズボールを日下部が拾う。

風間 「またあいつか！！」

真田 「ボールへの執着心がすごいな」

日下部 「いくで！大和！！」

日下部と神谷は一斉に前に走る。

「速——い——!!」

しかし、

五十嵐 「お前にだけは仕事させねー」

花田 「点は取らせない!!」五十嵐に神谷、日下部に花田がつきに戻る。

日下部 「くそ——!!」

(簡単に速攻できへん)

田岡 「よし!!よく戻った!!」

ピクッ

日下部すぐさま何かを察知し、横にパスを出す。

花田 「!?!?!」

ボールは走り込んできた新へと渡った。

新 「・・・ハア・・・ハア・・・」

山岡 「新!?!」

三井 「打てー!?!」

・・・出るんだったら自分の仕事をやれ

新 (・・・これ以上・・・迷惑かけたら・・・俺は・・・くそ
野郎だ)

スリーポイントライン上でフラフラになりながらシュートを構える。

しかし

「撃たせねえ!?!」

朝井が止めに飛んできた。

クイツ。

そこで新はモーションを止める。朝井（フェイク!?）

新（……シュートを……決めることが……俺の仕事だ）

改めてシュートを放つ。

新（……絶対に決める!!）

ガッシイイイ!!!!

空中で新と朝井が接触し、吹っ飛ばす。

ドガアアアアアア!!!!

#56 4ポイントプレイ

残り40秒

湘北 92 - 94 陵南

新がスリーポイントを決め、2点差に

「2点差だーーーー！！！！！」

「あんなへ口へ口だったのによく決めたな！！！！！」

神谷が倒れてる新に手を差し出す。

「やればできるじゃねえか」

新、ニコリ。

「自分の仕事は……しっかりやらないとな」
手を掴み立ち上がる。

神谷 「ふん。フリースロー絶対決めるよ。
こんなところ負けるつもりはねえからな」

風間 「新さん、ガス欠でもうダメかと思ったら、しぶといですね」

伴 「ああ。熊岡のブロックも大きいな」

真田 「あの二人が復活したなら、陵南は守るのが厳しいな」

「ワンスロー!!!」

新にフリースローのボールが渡される。

三井 「決めるよ!!!」

祈る如月 (……………決めて!!!)

赤木 (頼む!!!)

新 「ふうう……………」

歓声と同時にブザーがなる。

「チャージドタイムアウト！青（陵南）！！！」

ここで陵南はすかさずタイムアウト。

彦一 「さすが湘北や。

終盤のこの追い上げ……

昔の湘北を思い出させる」

腕組みの伴 「新の4ポイントプレイもでかいが、それ以上に壇之浦を二回連続でブロックしてるのが大きい」

真田 「壇之浦は陵南の支柱だからな」

風間 「最後までゴール下が鍵になりそうですね」

・ ・ ・ 陵南ベンチ

田岡 「ラスト40秒。1点差まで詰められてはいるが……勝ってるのはうちだ！！！」

壇之浦 「……………」

田岡 「朝井!! さっきのミスから切り替える!
ガス欠だが油断できん!! しっかりと新につけ!!」

両手の拳を握りながら朝井

「……はい」

田岡 「それに壇之浦! お前もブロックされたことは気にするな!
ゴール下は頼んだぞ!」

壇之浦、集中した表情で

「はい!……!」

田岡 「何度も言うが……勝つのは陵南だ!!
行ってこい!……!」

「はい!……!」

立ち上がりながら花田

「よし勝つぞ!……!」

壇之浦 「当たり前じゃないですか!!
俺達は花田さんと一緒に全国行くんですから!!」

五十嵐、ニヤリ。

「そつだな」

白山、朝井も頷く。

花田は微笑んで応える。

- - 湘北ベンチ

赤木 「絶対に次の攻撃を止めるんだ!!!
残り少ないチャンスをものにしないと勝てないぞ!!!」

「はい!!!」

赤木 「新!!!残り時間いけるな!?!」

新、微笑みながら

「・・・ハア・・・ハア・・・はい!!!」

赤木 「きつと攻撃は壇之浦で来るはずだ!!
壇之浦!任せられるな!？」

熊岡 「はい!!!」

赤木 「決勝リーグは目の前だ!!
絶対に勝つぞ!!!」

「はい!!!」

熊岡 「青空、ゴール下は絶対に守るぞ」

青空 「ああ」

そして笑みを浮かべながら

「ドンキーはこうでねえとな」

熊岡 「ふん。何を馬鹿言っとる」

『-----』

ブザーと同時に両チームがコートに戻る。

エンドラインには五十嵐がスローワーとして立つ。

その近くには花田、そしてディフェンスに日下部がつく。

日下部 （絶対に止めてやるで！！）

彦一 「湘北はオールコートマンツーマン。
勝ってはいるけど、プレッシャーに負けずに残り時間を戦えるかや
な！！」

残り40秒

湘北 93 - 94 陵南

57 ワンプレイ

残り40秒

湘北 93 - 94 陵南

三井 「絶対に守れよ」

宮野 「一点差か……」

高杉 「頼むぞ!! 拓馬!!」

浩一 「絶対に止めてくれよ」

伴 「ここで決まれば、ほぼ陵南の勝ちだな」

真田 「このワンプレイが勝負を決めるな」

ゴクリ……

風間 「……………」

花田が日下部のディフェンスをかわし、ボールが渡った。

彦一 「勝負を決める数秒間や!!要チエックやで!!!!」

陵南はボールをまわしながら24秒をフルに使って攻撃。

田岡 「当たり前だ。この一本を絶対に貰うぞ!!」

湘北はボールを取れずに刻々と時間が過ぎる。

日下部 「くそ!!」

24秒タイマーが残り10秒になったとき、陵南は動いた。

「やっぱりここは壇之浦だ!!!!!!」

大事な一本を壇之浦に託した。

花田 (頼んだぞ!!!)

五十嵐 (壇之浦!!!)

田岡 「壇之浦!!!」

ダムッ!!!!

今まで通り、パワープレイでディフェンスの熊岡に対抗。

熊岡 (絶対に止める!!!!!!)

如月 「ファールよ!!!」

ファールぎりぎりのプレーからシュート入。

壇之浦 (絶対に決める!!!)

ダンッ!!!

熊岡も対抗して止めに飛ぶ。

熊岡 (絶対に決めません!!!)

駒坂 「熊岡!!!」

赤木 「熊岡!!!」

壇之浦 (全国に行くんだ!!!)

シュートを放った。

ボールは熊岡の伸ばした手の上を通過。

熊岡 (くそ!!届かない!!!)

田岡 (入ってくれ!!!)

ボールは……

ガンッ!!!!!!

田岡が叫ぶ。 「戻れ————!!!!!!」

如月が電光掲示板に目を向ける。

残り18秒

湘北 93 - 94 陵南

如月 「時間がない!!」

日下部がフロントコートまで運ぶ。

残り16秒

日下部からサイドに走ってきた新へ。

しかし朝井がしっかりとディフェンスに着く。

朝井（絶対に撃たせない！！）

残り14秒

新から走り込んできた神谷へ渡す。

神谷、ディフェンスの五十嵐を抜きにかかるが抜けない。

五十嵐「簡単に抜かせねえよ！！」

神谷（くそ……）

熊岡「神谷！！！！」

神谷が声に反応し、ローポストで面を取る熊岡にボールをパスした。

またしても熊岡と壇之浦の二対一へ。

赤木 「熊岡！……！」

田岡 「止める……！壇之浦……！」

残り9秒

キュキュツ……！

熊岡、横に首をフェイクで振り、その逆方向に一気にターン。

壇之浦 「……！」

そのターンに一気に突き放し、シュートへ。

しかしヘルプで白山がチェックに飛んできた。

ガンッ!!!

熊岡 「!!!」

シュートは外れた。

田岡、握りこぶし。

(よく飛んだぞ!白山!!)

残り5秒

誰もが陵南の勝ちを確信する中、一人ボールに飛び込んだ。

背番号10番

青空 「勝————つ!!!!!!」

背番号11番

そのボールを拾い、すぐにシュートへ。

五十嵐 (まずい!!!)

慌てて神谷のチェックに飛ぶ。

「絶対に決める!!!!!!」

青空が叫ぶ。

神谷 (……当たり前だ!!!!!!)

そしてシュートは放たれた。

『……!……!……!……!』

同時に試合終了のブザーが鳴る。

ザシュ!!!!!!!!

その音に少し遅れて、ボールはリングを通過した。

五十嵐 (!!!!!!!!)

壇之浦 「!!!!!!!!」

田岡 (!!!!!!!!)

赤木 「!!!!!!!!」

審判は二本指を立て、上方から振り下ろした。

湘北 95 - 94 陵南

#58 前へ・・・

試合終了

湘北 95 - 94 陵南

神谷のブザービーターにより、湘北が逆転勝利をあげた。

「よっしゃーーーーー!!!!!!」

「これで決勝リーグだーーーーー!!!!!!」

湘北ベンチは歓喜で一気に飛び上がる。

コート上の湘北メンバーは神谷のもとに集まる。

日下部 「よくやったで！大和！！」

新 「・・・よく決めた」

熊岡 「さすがだな」

神谷の頭をぐちゃぐちゃにする。

「ぐっ……」

嫌そうにする神谷。

青空だけその輪の中に入らない。

(カミヤめ……あんなもん決めて普通だ)

ベンチから青空を見て如月 「本当に素直じゃないんだから……」

一方で陵南は暗い雰囲気になっている。

白山、朝井、五十嵐は沈黙。

壇之浦は涙を流している。

花田は熊岡のもとへ。

花田 「海南、翔陽は本当に強い!!!俺達に分まで絶対に勝ち上がれよ!!」

熊岡 「ああ。そのつもりだ」

「両チーム整列!!!!!!」

両チームは向かい合って整列。

「95対94で湘北の勝利!!!!!!」

「ありがとうございました!!!!!!」

伴 「湘北か……」

真田、ニコリ。

「面白くなりそうだな」

風間（大和、今度は敵同士だな。絶対に倒す！）

伴「戻るぞ」

真田、風間「はい！！」

彦一「湘北が勝ったか・・・。

陵南は最後踏ん張れなかったな」

（最後のシュート、きつと壇之浦君に相当なプレッシャーになったんやろな。

それにしても・・・湘北の爆発力は見事や！！）

陵南ベンチでは無言が続いていた。

田岡もくやしさからか黙っている。

その中で壇之浦は泣いている。

「壇之浦、顔を上げる!!」

花田が声をかける。

花田 「お前はよくやったよ。

俺達三年はもう終わりだが・・・

お前達はこれからだ」

壇之浦は顔を上げる。

花田 「これからはお前が中心となって陵南を全国に連れていくんだ」

壇之浦 「・・・・はい!!」

「前に進もう」

今度は田岡が口を開いた。

「今回の負けを次に生かせ!!!」

花田達が残してくれたことを無駄にするな!!」

花田 「先生・・・・」

五十嵐 「・・・絶対に強くなってる」

朝井 「ああ」

白山も頷く。

「お前達も頼んだぞ」

花田は微笑んだ。

三井 「ふう・・・これで決勝リーグか・・・
大変なのはこれからだぜ赤木」

「三井さん!!!」

三井が振り返ると、そこには両耳にピアスをつけた小柄の男が立っていた。

「お久しぶりです」

三井 「おお！お前ずつとこの試合見てたのか？」

「いえ、最後の方だけ」

三井 「お前赤木にも挨拶しに行くのか？」

「いや……」

男はニヤリと笑みを浮かべる。

「その必要はないです。どっちにしろもうすぐ旦那に会うことになるんで……」

三井 「……??」

……湘北控え室

日下部 「よっしゃー！！これで決勝リーグや！！！！」

山岡 「これで全国へ近付いたな」

石毛 「ああ」

「あの陵南に勝っちゃったよ!!!」

「この調子で全国まで突っ走るしかないな!!!」

勝利の歓喜で盛り上がっている。

「凡人共め……」

俺のおかげで勝てたんだぞ」

不機嫌そうな青空。

ガチャリ。

赤木が控え室に入ってきた。

赤木 「喜ぶのはいいが……勝負はまだ始まったばかりだぞ」

一気に静まりかえる。

赤木 「これから勝ち続けないと全国への道は開けん!!!」

「当たり前だ」

神谷が口を開く。

「全部ぶっ倒して全国に行く」

熊岡 「当然だ!!!」

それに応えるかのように全員の表情が引き締まる。

赤木はそれを見て微笑む。

「その意気だ!!!」

絶対に全国に行くぞ!!!」

「はい!!!!!!!」

青空 「俺様がいれば、余裕だけどな!!!」

熊岡 「何を馬鹿言ってる!!!!!!」

ゴッソッ！！！！！

青空の頭にゲンゴツが炸裂。

青空 「いってー……」

湘北高校、決勝リーグ進出。

59 王者

湘北と陵南の試合による熱気が冷めない中、観客が次の試合に注目を始めていた。

まだ浩一達は会場に残っている。

高杉 「なんかさつきより人増えてねえか？」

浩一 「確かに・・・」

「あー!!」

宮野は後ろの人影に気づく。

「ゴリだー!!」

「おお」

赤木も浩一達に気づく。

「ここらへん空いてるか??」

宮野 「ああ」

高杉 「何故か周りに誰も座ってこねえんだよ」

赤木 (そりゃあお前ら柄が悪いからな・・・)

「じゃあ座らせてもらっな」

浩一 達の後ろの席に座る。

浩一 「さっきは勝ててよかったな。試合楽しませてもらったぜ」

赤木 「ありがとう。お前らも応援ありがとな」

宮野 「礼には及ばねえよ。そういえば拓馬のやつ、試合出してきたけど、どうだ??」

赤木 「青空か・・・」

まあ不完全ではあるが、あいつは強くなるな」

笑いながら高杉 「それ本人に言えばきつと喜ぶぜ! まあ調子乗る

試合開始前のブザーが鳴る。

両チームが練習を切り上げベンチに戻る。

記者席の彦一 「海南は一時期を除いてずっと神奈川を制している。今年もその強さは本物のはずや!!」
それに対するのは常に県上位に名をあげる津久武高校や!!」

・・・海南ベンチ

「湘北が上がってきたか!!10年前を思い出すわ!!」

扇子を手に持ち笑顔の高頭

伴 「どこが上がってこようが関係ないですよ」

高頭 「がっはっはー!!確かにそうだな伴!!」

彦一 「高頭監督も田岡先生と同じく、ずっと海南を束ねている名

将や!!」

高頭 「スタメンはいつも通り。今年も王者の強さを見せてやれ!!」

「はい!!!!!!!!」

「お!いたいた」

観客では三井が赤木を見つける。

赤木 「お前まだいたのかよ」

三井 「いちや悪いかよ。まあ陵南に勝ててよかったな」

赤木の隣に座る。

赤木 「でもまだまだこれからだ」

三井、ニコリ。

「そうだな。しかし今年の海南も強いぞ！」

赤木 「わかつとるわ！」

伴に真田はもちろんだが、有能な一年が入ったとも聞いたしな」

三井 「この試合に注目だな。」

「……あ！そういえばさっき宮城に会ったぞ！」

しかめっ面で赤木

「宮城??何でここに？」

三井 「しらねーよ。でも『旦那とは会うことになる』とか意味わかんねえこと言ってたな」

「?????」

疑問そうな表情の赤木。

そのとき

「三井さん、こんにちは！！！！」

熊岡を先頭に湘北バスケット部が来た。

宮野 「うわ！！沢山来た！！！」

全員が空いている席に座る。

一方で新は三井の隣へ、そして

高杉 「拓馬！！浩一の隣空いてるぜ！！！」

青空 「でかした！！！」

浩一の隣に座る。

浩一 「お疲れ様。あのデカブツ強かったろ??」

青空 「ああ、ぬりかべか！！あんなのたいしたことねーよ！！俺様の力で一ひねりだ！！！」

赤木 「何を馬鹿言っとるか!!!」

ゴツン!!!!!!

後ろにいる赤木からゲンゴツが飛ぶ。

うづくまる青空

「………いってえ。ドンキーの次はゴリかよ」

赤木 「馬鹿言ってねえで試合をしっかり見る!」

二人のやり取りを見て三井。

(本当に桜木を見てみたいだな)

熊岡 「伴勇次郎………こいつのプレーはしっかり見とかないとな」

三井 「新、この試合しっかりと見ておけよ!
陵南よりも上のチームのはずだからな」

新 「はい」

神谷 「…………ZZZ」

日下部 (こいつ寝てやがる)

熊岡 「始まるぞ…！」

コートでは両チームがセンターサークルに散らばる。

「いけいけ海南…！！！！！」

「とべとべ海南…！！！！！」

応援席が盛り上がる。

啞然の高杉 「すげえ応援だな」

ジャンプボールのトスが放たれた。

バシィ！！！！！！！

海南がジャンプボールを制す。

ルーズボールを風間が拾う。

「伴さん！！！！」

すぐにハイポストの伴にパス。

「伴に入ったぞ！！！！！！」

伴のディフェンスにつく津久武の選手（神奈川県ナンバー1のチー
ムだか知らないが……絶対に勝つ！！！！）

キュッ！！

ターンでディフェンスを交わそうとするが津久武も負けてない。

「簡単に抜かさない！」

しかし伴はボールを持っていない。

「!!!??」

ダンッ!!!

ゴールに向かって一人の男がボールを持って飛んできた。

海南の背番号7番

津久武 (真田一樹!!!!!!)

熊岡 (伴め!ターンしながらパスを……!!!!!!)

そして

ドガアアアアアアア!!!!!!!!

真田のワンハンドダークが炸裂。

「いきなり来たー!!!!!!!!」

「伴、真田の最強ラインだー!!!!!!!!」

彦一 「ア・・・アンビリーバブルや!!!!!!!!」

赤木 「・・・!!!!!!」

青空 「!!!!!!!!」

神谷 「・・・!!!!!!!!」

日下部 「いつ起きたんや!？」

真田 「伴さん、ナイスパス」

伴、ニコリ。

「ああ」

海南 V S 津久武

衝撃的な出だしからスタート。

#60 圧倒的

海南 2 - 0 津久武

試合開始早々、伴と真田のコンビプレーからスタート。

「すげー！ー！！！！！！」

「伴、真田がいきなり見せたー！ー！！！！」

序盤から会場が沸く。

彦一 「最初のプレーで会場をこんなに盛り上がった。
今年の海南も強そうやな！！」

そしてメンバー表を眺める。

海南大附属高校 スターティングメンバー

- 4・伴 191cm / PF / 3年
- 5・辰吉 194cm / C / 3年
- 6・畑山 181cm / SG / 2年

7・真田 189cm / SF / 2年
10・風間 178cm / PG / 1年

バシィ!!!!!!

風間がステイール。

日下部 (!!!!!!)

ビュン!!!!!!

すぐさま前線を走る真田にパスを送る。

バスッ!!!!!!

今度はレイアップを沈めた。

海南 4 - 0 津久武

「また真田だーーーー！！！」

海南の流れは止まらない。

今度は伴のブロックショットが炸裂。

「伴が止めたーーーー！！！」

「威圧感が半端ないぞーーーー！！！」

熊岡 「これが海南のキャプテン……」

風間がボールを運ぶ。

「真田だ！真田にボールを渡すな！！！」

津久武、チーム一丸となり真田につく。

新 「エースを徹底的に抑えるつもりだ」

ビュン！！！

風間、ノールックでゴール下に矢のようなパスを送る。

日下部 「！！！！！！」

一瞬マークの外れた辰吉に渡った。

バスッ！！

海南 6 - 0 津久武

「何だ今のパスは！！！！」

「なんかすごかったぞ！！！！」

「あいつ一年らしいぞ！！！！」

神谷 「ふん、相変わらずだな」

日下部 「なんや大和、あいつ知っとんのか？」

神谷 「元チームメイト」

日下部 「マジで!!」

(てことは大和と全中に行ったメンバー……ただ者やない訳や)

彦一 「やはり風間君、ルーキーで海南のスタメンを勝ち取っただけあって、高レベルのプレイヤーみたいやな」

(ガードとして視野がかなり広そうや!!!!)

ガンッ!!

津久武のシュートが外れる。

リバウンドを伴が取る。

「まだ津久武が決められない!!!!」

三井 「あーあ、完全に海南の流れにのまれちゃってるな」

赤木 「ああ、決して津久武も弱いチームではないんだが」

辰吉のスクリーンから外角で畑山がノーマークになる。

風間からパスがまわる。

ザシュ!!!

畑山のスリーが決まる。

海南 9 - 0 津久武

「今度はスリーだー!!!」

新 「綺麗なシュートフォームだな」

彦一 「畑山君は外角のシュートが得意なピュアシューターやし、辰吉君は伴君みたいな派手さはないけど柔軟なプレーができる好プレーヤーや」

バシィ!!!!

今度は真田がスティール。

「くそ!!!全然決められない!!!」

焦る津久武。

青空 「情けねえな。全然攻めてねえじゃねえか」

神谷 「てめえなら一生決めらんねえよ」

青空 「もっぺん言ってみろコラアアア!!!!」

怒鳴る熊岡 「やめんか!!!試合をちゃんと見る!!!!」

そのとき

「うわ————!!!!!!」

大歓声があがる。

海南 12 - 0 津久武

「真田が自分から外で決めたー！ー！ー！ー！」

「一気に10点差以上開いたぞ！ー！ー！」

神谷 「真田……」

赤木 「神谷、あいつのプレー見ておけよ」

神谷 「うす」

真田、伴を中心に海南の怒涛の攻撃が続いた。

そして1Q最後のワンプレー。

風間がボールをキープ。

日下部 (どっぴりっプレイをするんや)

ダムッ！！

ドライブを仕掛ける。

津久武のディフェンスが必死についていく。

しかし風間の手元にはボールが消えてた。

近くに真田がボールを持っている。

ダムッ！！！！

今度は真田のドライブ。

ディフェンスをあっさり抜く。

神谷（！！！！！！）

インサイドからヘルプで真田を止めに出る。

フワッ。

それと同時に優しくボールをゴールに放った。

ダンッ！！！！

ゴールに向かって一人の男が飛んできた。

伴が真田へのヘルプでマークが外れたのである。

ドガアアアアアアア！！！！！！！！

「真田から伴へのアリウープだーーーー！！！！」

「一番初めのプレーと逆だーーーー！！！！」

熊岡 「！！！！」

青空 「……ゴレムだ」

扇子を扇ぎながら余裕の笑みの高頭（まあまあかな）

『……………!!……!!』

1Q終了を告げるブザーが鳴る。

「今年も海南つえー!!!!」

「ベスト8相手に圧倒的強さだー!!!!……!!」

新「やはり強い……」

三井「ああ、圧倒的だな」

神谷「……………」

青空「ふん」

全くわかっていない。

電光掲示板に目を向ける赤木

1Q終了

海南 36 - 8 津久武

赤木 「・・・全国への最大の壁だな」

61 とんでもない奴ら

決勝リーグを賭けたブロック決勝戦。

伴 「ふん！！！」

バズッ！！

「伴のゴール下だー！！！！！！」

「海南の攻撃が止まらないぞ！！！！」

苦笑いの三井 「はは・・・こりゃあ全然止まる気配がねえぞ」

新 「神奈川ナンバーワンはやはり違いますね」

如月は電光掲示板に目を向ける。

2Q残り5分

海南 48 - 18 津久武

如月 「すごいチームだわ」

辰吉のリバウンドから、また海南の攻撃。

風間がボールを運ぶ。

日下部 「あいつのパスが攻撃の起点となつとるんや」

風間のディフェンスが離れてつく。 (パスを警戒しておかないと)

神谷 「ふん・・・無駄だな」

日下部 「??」

そのとき風間はシュートを放った。
足元はスリーポイントラインの手前。

「!!!!!!」

ザシュ!!!

海南 51 - 18 津久武

「スリー決まった!!!!!!」

「これで50点代にのったぞー!!!!!!」

神谷 「シュート力もあるからな」

日下部 「マジかよ」

彦一 「風間くん……ゲームメイクに特化したプレイヤーやと
思ってたけど、そういう訳でもなさそうやな!! 要チエックやで
!」

ザシュ!!

海南 51 - 20 津久武

津久武が8強の意地で決め返す。

「常勝軍団だか知らねえが、うちも古豪と言われる意地ってもんがあんだよ!!!」

赤木 「さすが強豪校だ。この点差でも引き下がらない」

青空 「ふん。諦めてる方がだせーけどな」

赤木 「!!!」 (ほう。予想外のことを言うな。諦めが悪いのは、俺との勝負からわかってはいたが)

会場では真田にボールが渡ったことにより、歓声があがる。

「真田だー!!!」

「次はどういうプレーをするんだ!?!」

熊岡 「真田……」

青空 「この歓声が気に入わねー」

浩一 「何ひがんでるんだよ」

神谷 「……………」

津久武は二人で真田を止めにかかる。

(絶対に止める!!!!)

「ダブルチームだ!!」

「真田でも抜くのはきついかもしれないぞ!!」

扇子を仰ぎながら高頭 「行け!!!!」

クイツ……………

ダムツ!!!!!!

真田、フェイクを入れて急発進。

そのフェイクに反応した一人を抜き去る。

キュキュツッ!!

(抜かせねえ!!!)

もう一人はコースを塞いだ。

熊岡 「止めたか!？」

しかし高速バックロールで置き去りに。

神谷 「!!!!」

そして・・・

ドガッツツツッ!!!!!!!!!!

片手でリングにぶち込んだ。

海南の全メンバーが入れ代わる。

風間 「ふー……もう終わりか」

三井 「半分も終わってないのに、もう二軍に交代かよ」

赤木 「しかし想像以上だな」

熊岡 「はい。中では伴が完全に支配していた。あとは……」
真田はとんでもないやつだな

「倒しますよ」

声の主は神谷だった。

「あの真田ってやつ、俺が止めてやるよ」

日下部、ニヤリ。「頼りになるねー。さすがエースやな」

熊岡 「お前にはあのガードを止めてもらわんといかんからな」

ギクッ。

日下部 「……はい」

自身満々の顔で青空 「まあドンキー、こいつらに頼らんでも、この俺様がゴーレムもサナダって野郎も倒してやるから安心しろ」

熊岡 「別にお前には期待もしたらん」

青空 「なんだと!?!?!」

如月 (どこからそんな自信が湧いて来るのかわからないわ)

湘北と反対側の観客席では三人の男が試合を観戦していた。

小柄な男が口を開く。 「もう交代かよー。もっと本気の海南を見たかったのに」

「まあ楽しみは次に置いといて、まず俺達は翔陽を倒さないと」
今度は好青年の雰囲気を持った男が口を開いた。

「唐沢の言う通りだぞ、前園。翔陽は海南と双壁と言われるほどの強豪校だ」

茶髪の男が小柄な男に強く言い放つ。

小柄の男 「わかってますよ、渡来さん。

翔陽はこのスーパールーキーの俺様、前園勇一が倒す!!」

茶髪の男 「よしアップ行くぞ」

好青年 「そうですね。あんなやつ放って置いて行きましょう」

小柄の男 「お・・・おい!!無視して行くなよ!!」

慌てて二人を追いかける。

三人のジャージの背中には『RYUGASAKI』と書かれていた。

#62 3つ目の椅子

神奈川県予選ブロック決勝戦。

昨年のベスト4の強豪校を破り、湘北が決勝リーグ進出という大波乱から数時間後、

もう一つの椅子が決まろうとしていた。

「10、9、8、7・・・」

会場では試合ラスト10秒のカウントが始まっていた。

「4、3、2、1!!」

『ブーーーーー!!!!!!』

「試合終了ーーーー!!!!!!」

海南 108 - 52 津久武

「海南大附属高校、27年連続決勝リーグ出場決定!!」

「これで湘北に続いて、王者海南が上がってきた!!!」

彦一 「さっきの波乱と違って盤石通り海南が最高の状態で勝ち上がってきたで！」

熊岡 「試合のほとんどを二軍で戦ってダブルスコアか」

新 「王者と言われる強さは本物ですね」

日下部 (あのガードを抑えるかで勝負が決まるで!!!)

自信満々に青空 (どっちにしろ俺様には敵わねーな)

神谷 「サナダ……」

(王者か何だかしらねーが絶対倒してやる)

そして席から立ち上がる。

日下部 「どこに行くん??」

神谷 「トイレ」

笑いながら青空 「なんだお前、今の試合見てちびったのか!？」

神谷 「んなわけねーだろ」

試合表を見ながら如月 「次の試合は・・・翔陽対竜ヶ崎か」

赤木 「熊岡、次の試合もしっかり見ておけよ」

熊岡 「はい」

コートサイドでは次の試合の両チームが出てきた。

「翔陽だーーーーー!!!!」

「今年こそ県ナンバーワンを奪えるか!!!!」

彦一 「次は去年2位の翔陽や。その中でも注目は……」

観客の視線は翔陽にいる一人の大男に向けられている。

「笠松だ……！！！」

「高……い……！！！」

笠松道信

201cm / C / 翔陽高校キャプテン

彦一 「笠松道信くん、去年から翔陽の中心として活躍した好プレイヤー。背も県内一や」

「伴……！！！」

ベンチからあがるうとしていた伴に笠松が話しかける。

伴 「笠松……」

笠松 「今年はお前を倒して県ナンバーワンをとるからな!!」

伴、ニヤリ。 「ああ。楽しみにしてる」

そして竜ヶ崎の練習してる姿を見る。

「相手は竜ヶ崎か……油断しない方がいいぞ」

コートに戻る笠松 「ああ、でもお前らに当たるまでは絶対に負けねえよ」

593

まだ竜ヶ崎を見ている伴 「真田」

真田 「はい？」

伴 「お前竜ヶ崎覚えてるか？」

真田 「……もちろん」

――体育館裏通路

トイレから神谷が出てきた。

（真田……あいつを倒さないと全国への道は開かねえ）

すると逆の方から来た一人の男と会う。

「大和!!」

神谷 「風間……」

試合からあがったばかりの風間との再会だった。

風間 「久しぶりだな」

神谷 「ああ」

風間 「相変わらず冷たいな」

ザッ。

風間の横を通り過ぎながら神谷 「ふん、あのサナダってやつを倒して全国行ってやる」

風間、ニヤリ。 「敵としてお前と戦えるのを楽しみにしてるよ。」

それと・・・」
神谷の方振り返る。

「あいつ博多の高校に行ったらしいぜ」

その言葉を聞き足を止める神谷。

そして振り返る。

「どこにいようが関係ねえ。倒して全国制覇するだけだ」

・・・コート上の試合前練習。

ドガアアアアアア!!!!!!

笠松がダクのパフォーマンスをしていた。

「高けえ————!!!」

三井 「壇之浦を倒したと思ったら、伴に笠松って……すげいやつが多すぎだな、熊岡」

熊岡 「それだけやりがいがありますよ」

青空 「俺様もいるしな」

日下部 （何でいつも入ってくるんや）

そこに神谷が戻ってきた。

日下部 「長かったな、うんこか？」

席に座る神谷 「ちげーよ」

新 「そついえば先生、翔陽の対戦相手は……」

赤木 「竜ヶ崎高校、昨年はベスト8なんだが……もしかしたらそこが上がってくる可能性も無きにしてもあらずなんだよな」

熊岡 「????」

三井 「は??」

竜ヶ崎側の練習では観客席にいた小柄な男と、好青年がいた。

好青年 「あのでかいおっちゃん派手だね」

唐沢敏也

179cm / SG / 竜ヶ崎高校1年

小柄な男 「なんかムカつくんだけど、唐沢」

唐沢 「じゃあゾノもやっっちゃえば？」

小柄な男、ニヤリ。 「そうか！この前園勇一の凄さを観客に見せ
つけないとな」

前園勇一

172cm / SF / 竜ヶ崎高校1年

前園 「渡来さん、パーース！！！」

少し離れた所にいる茶髪の男がパスを出す。

「勝手なことやって、リョーさんに怒られても知らねえぞ」

前園、パスをとってゴールに走る。

「おいおい！！！」

「何かやる気だぞ！！！」

リングの前で踏み切った。

ダンッ！！！

熊岡 「！！！」

神谷 「…………！！！」

笠松 「！！！」

「高……………い……………」

しかし

ドロビ。

前園 「……………え？？」

少し届かずリングの前円に当たる。

ドガアアアア！！！！！

派手に大転倒。

前園 「いつてー！ー！！！！」

「 Dank 失敗したー！ー！！！！」

「 何だあいつは！？！？」

青空と隣を陣取る浩一達は大爆笑。

青空 「だーはっは！ー！面白い奴がいるなー」

日下部 「何やあいつは？」

一方で驚愕の表情の三井 「赤木、今の見たか？」

赤木 「ああ。あの身長であそこまで飛ぶとは」

新 「すごいジャンプ力だ」

彦一 「竜ヶ崎にこんな新しい子が入ってきたなんて……、アン
ビリーバブルや」

前園 「いてて……」

痛そうに起き上がる前園に更なる不幸が起こる。

「調子乗ってんじゃねえ!!」

ドガアアア!!!!!!

前園 「うおお!!!!!!」

何者かに飛び蹴りをされ吹っ飛ぶ。

唐沢 「あちゃー……」

茶髪の男 「全く調子に乗るからだよ」

飛び蹴りをした小柄なピアス男が前園に向かっていく。

「前園、また馬鹿なことやりやがったな」

焦った前園 「リョーさん……、つい相手のでかいおっさんに刺激されて」

ピアス男 「試合前から張り合ってどうすんだよ」

ピアス男を見て三井 「……え???」

熊岡 「どうしたんですか、三井さん」

赤木もピアス男を見て三井と同じ反応をしていた。

赤木 「……宮城？」

ピアス男が口を開く。

「張り合うのは試合始まってからでいいだろ」

宮城リョータ

竜ヶ崎高校監督 / 元湘北高校キャプテン

63 翔陽VS竜ヶ崎

三井 「宮城が監督!?!?!」

名簿の紙を見ながら如月

「はい。今年からみたいですけど」

日下部 「宮城さんって元湘北の」

赤木 「ああ、チームメイトだ」

両チームのベンチに集まり試合に備える。

宮城 「いよいよ次は決勝リーグを賭けた大事な試合だ。相手はあの翔陽、舞台としては最高だ」

前園、ニヤリ。 「腕がなるぜ」

次は宮城がニヤリ 「さあ見せてやるーか、俺らの力を」

「はい!?!?!」

宮城 「行くぞ!?!?!」

「おおおお！……！」

一方、翔陽ベンチ。

翔陽監督 「この試合で勝って弾みをつけるぞ……！」

「はい……！」

翔陽監督 「それと笠松」

笠松 「なんですか、花形監督」

翔陽の監督、花形が竜ヶ崎ベンチを見て口を開く。

花形透 翔陽高校監督／元翔陽高校センター

「監督がああ宮城っていうのもあって、何か不気味な気がする……
気拔くなよ」

笠松 「はい」

（さすがに去年の海南戦見ればそんな風にはならない）

『……………！……！……！』

「両チーム、整列！！」

両チームがコートに向かう。

宮城 「渡来」

声に反応した茶髪の男が振り向く。

宮城 「頼んだぜ」

男はニヤリと微笑む。

「任せてください。リヨーさん」

渡来鉄平 176cm / G / 2年

前園 「俺にはないのかよ！！！」

湘北と離れた観客席では海南が観戦していた。

真田 「さーてと翔陽と竜ヶ崎か」

風間 「翔陽はまだしも竜ヶ崎とも戦ったんですか？」

伴 「ああ。去年のブロック決勝で」

風間 「先輩達がそこまで警戒してるってことは接戦だったんですか？」

真田 「いや、結構突き放して勝ったよ。20点差ぐらいかな」

風間 「・・・え!？」

両チームがセンターサークルに集まる。

翔陽高校スタメン

- 4 ・笠松道信 201cm / C / 3年
- 5 ・宇佐美利夫 191cm / F / 3年
- 6 ・猫田和幸 185cm / G / 3年
- 7 ・栗原恵一 187cm / G / 3年
- 8 ・大山光 193cm / F / 3年

竜ヶ崎高校スタメン

- 4 ・早草宏大 186cm / C / 3年
- 5 ・遠山金次 181cm / F / 3年
- 7 ・渡来鉄平 176cm / G / 2年
- 13 ・唐沢敏也 179cm / G / 1年
- 15 ・前園勇一 172cm / F / 1年

新 「こうして見てみると身長差がありすぎる」

日下部 「さっきのダンク失敗したやつがスタメンや」

青空 「ありゃーザコだろ」

神谷 （てめえが言うなよ）

赤木 （宮城はどんなチームを作ってるのか）

ジャンパーは両チームのキャプテンの笠松と早草。

早草 （た、高い・・・）

彦一 「翔陽はチームの高さ県内一や。逆にこうして見てみると竜ヶ崎の背の低さも目立つ」

バッシィィィ！！！！！！！

笠松が余裕でジャンプボールを制す。

「高い！！！！！！」

翔陽のガード、猫田がボールをキープ。

ハイポストで笠松が面を取る。

ボールは猫田から笠松へ。

キュツキュツ!!

ディフェンスの早草を簡単にかわす。

熊岡 「ステップワークがうまい!!」

花形 「いけ!! 笠松!!」

バツシイイイ!!!!!!

笠松 「!?!?!」

渡来が笠松のボールを弾いた。

ルーズボールを唐沢が拾う。

「唐沢パース!!!」

前園が前に走っている。

日下部 「もう前にいる」

風間 「速い!!!」

バス!!!

唐沢から前園に渡り、レイアップを決める。

前園 「よーしゃーさすが俺!!!」

青空 「うるせーなあいつ」

神谷 (お前も同じだろ)

竜ヶ崎が先制。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9600f/>

SLUMDUNK 2ND

2011年2月15日20時14分発行